
猫かぶりなあの男とキスをする。

夢花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫かぶりなあのお男とキスをする。

【Nコード】

N3914R

【作者名】

夢花

【あらすじ】

『優しくて、運動神経抜群で、頭脳明晰な超人少年、水無瀬愁也。とか思っていたあの頃のあたしが情けない。くそう！！あの野郎！ファーストキスを返せええええ！』これは、水無瀬愁也の秘密を知ってしまった、彩那の苦悩の日々。結構ベタな展開が多いです。後、ノリで書き始めてしまったもので、矛盾してる部分とかあったらお知らせください！基本的には土日更新の・・・はず・・・です

猫かぶり（前書き）

はじめましての方ははじめまして。そうではない方はまたお会いできて光栄です^^

この小説がお目にかかるとはなんたる至福・っ！読んでくださるなど誠にありがとうございます><

稚拙な文章で申し訳ありませんが、よろしく願いいたします。

それでは、最後までお付き合い願います。

猫かぶり

ああ、なぜこんなことになっているのだろうか。

神様、あたしが何か間違ったことをしたんだったら謝ります。だけれどこの仕打ちはあるまりじゃありませんか？別に好きでこいつのことを知ったわけじゃないし、好きでこいつの秘密守ってるわけじゃないし。

好きで、好きでこいつとキスをしてるわけじゃねええんだよね
おお！

事の発端は二日前。

いつもように親友の稔みのりと一緒に帰っていただけなのだ。今思い返せばあの時の忘れ物なんて次の日に学校に行ってからでもよかったのに、どうしてよりによってあの時取りに行ってしまったのだろうか。

「あー！」

いきなり声を上げるあたしを、稔はびっくりして見つめてきた。そりゃそうだ。さっきまでまったく他愛もない話をしていたのにいきなり声をあげたら誰だって驚く。

目を丸めて稔があたしに問いかけて来る。

「び、びっくりした。いきなり何なのよ、彩那^{あやな}」

「ごめん稔！ 先に帰ってて！ ノート忘れて来た！」

と叫びながら走り出す私を止めることが出来たらどれだけいいか。
一層目を丸めた稔が一瞬キョトンとしてから慌てて身体を反対方向に向けた。

「え？ の、ノート！？ ちょ、待ってよそんなの明日でもよくない！？」

「だめなんだって！ 今日のうちの予習しとかなないと絶対明日のテスト無理だもんっ！」

「ちよつと彩那！？ 小テストよ！？」

「それでも！」

自分でいうのもなんだけど、あたしは真面目だ。中間テストはもちろんのこと小テストとかでも絶対いい点は取りたいってくらいに真面目だ。稔とか他の友達には真面目すぎるよー、っていつも言われてるけど、おかげさまで成績もいいし大学進学も問題ないんだからあたしのやってることは合ってる。はず。いやいや合ってるよ絶対。

反対に稔はあり得ないくらいの究極の面倒くさがりや。中間テスト、小テストが共に近づいて来ても一切勉強に打ち込む姿を見ない。ってかテストが近づいてくれば近づく程どんどんリラックスするタイプである。それなのに成績はいい。なぜだ。あたしはこれだけ真

面目に勉強して学年成績二位、稔は勉強する姿を一切見た事ないのに学年成績は五位。なぜだ。稔曰く『適当に聞き流してれば全て呑み込む天才型なのよ、私は』。

世の中って不公平だよな。

とにかく学校からあんまり離れてなかったから一分も走ってればすぐに学校についた。でも、あたしも稔も既に放課後になってる時点で学校から出て来たから、学校に戻ると殆ど誰もいなかった。

夜じゃないだけいいか。お化けとかそういう類いは一切信じないんだけど、やっぱり夜の学校って不気味だと思うのよね。

急いで校舎内に入って上履きを履くと、疲れてしまったから息切れしながら階段を登って行く。高校二年生にもなるとわざわざ三階まで階段でいかないといけないから大変すぎる。来年が憂鬱になってくるわ。

やっとのことで三階までたどり着くと、誰もいないはずの教室のドアが閉まる音がして、思わず柱の後ろに隠れてしまった。

そつと顔を覗かせると、男子生徒が耳に携帯を当てて一人立っていた。

あれ？ あれって……。水無瀬君？

水無瀬愁也君。サラッサラの黒髪から覗く（クォーターだから）青まじりの茶目に端正な顔立ちが男の子なのに思わず綺麗だと思ってしまうほどのイケメンで、運動神経も抜群。謙虚で温和で優しくて、男女共に友人が多い。その上学年成績は唯一あたしを抜かす、学年一位の完璧超人少年だ。

あたしとあまり交流はないけど、同じクラスだし学年一位、二位同士だから勉強の世話になることも時々ある。本当に謙虚で優しい男の子で、そりゃ女子にモテるわとも思う。

そんな水無瀬君が、こんな時間にこんなところで何してるんだろ

う？

声をかけようと思って柱から離れた瞬間、

「つつざっけんなっ！！勝手に出て行きやがったくせにいきなりフラフラ帰って来るとか許さねえぞ！！絶対に家に入れんなよ！入れたらぶっ殺す！」

聞こえて来た怒声と共に壊れる勢いで携帯が閉まる音に足が止まり、水無瀬君を呼ぼうとした口も開いたまま固まった。

「……今の、声は、水無瀬君、だよな……？叫んで、たよな……？あれ……？おかしいぞ。あたしの知ってる水無瀬君はそんな口調じゃないはずなんだけど。」

勉強とかできなくても「あ、そこ間違ってるよ」とか、よくできてるところを見ると「うわっ、^{ありが}有賀さんってやっぱ頭いいんだね」とか、普段からあたしや友達とかにたいしても「昨日のテレビ見た？ヤバイよ、俺感動した」とかいうおっとりー、とした口調のはず。

そんな水無瀬君が（あたしの空耳じゃない限り）「ぶっ殺す」とか口にしてるんだが。

なんとなく見てはいけない場面を見てしまったような気がしてゆっくりと下がって行っただけ、携帯での対話を終えた水無瀬君がイライラした様子のまま振り向いた。

バチツと見事に視線が合った。

「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」

思い返せば、この時一目散に逃げ出したのが悪かった。結局ノートも手に入らなかったし、稔との楽しい帰り道も帰れなくなっただし、わざわざ息を切らしてまで学校に行ったのに見てはいけないものを見てしまったし。

だけどあの時逃げていなければ、あたしはどうやって言い訳をするつもりだったのだろう。

そして次の日。なんとなく危険な気がして結局水無瀬君のことは稔には言わなかった。いや、あれはどう考えてもあたしの空耳ではないんだけど、きっと水無瀬君がマジ切れした時にああなるんだろうなあ、って勝手に解釈したら稔にそれを教えて実は水無瀬君が猫かぶりだったとか回されたくないあたしの貴重気遣いであって決して言ってしまったら水無瀬君が鎌を持って追いかけて来る夢を見たわけでもなんでもないし。

・・・・・・・・なんで鎌だったんだろう・・・・・・・・。マジで怖かったんだけど・・・・・・・・。

学校に行く時には稔は一緒ではない。確かに一緒に帰るけど、それは親友だからであって別に帰り道が一緒だから、という理由から

来るわけではない。十分くらいは駅まで一緒だけど、稔は電車に乗ってあたしは歩ける距離に住んでいるからいつも駅で別れる。時々駅から出て来た稔と一緒にになることはあるけど、やっぱり一人で登校することが多い。

だから教室に入った瞬間に水無瀬君と視線が合った時、傍らに稔がいないことを強く呪った。

パツと視線を逸らしてそのまま何事もないように席についた。正直それしか方法が思い浮かばなかったし、水無瀬君がいきなりあたしを教室から引っぱりだしたりはしないだろうとも思ったからだ。

案の定その日いっぱい水無瀬君はあたしと接触を図ることはなかった。一日中視線を感じていたけど。いや、近づくことならきつとできたと思うんだけど、あたしはずっと稔にくっついていたら話しかけてくることはなかった。たとえ稔が同じクラスにいても他の友達と一緒に過ごすことでなんとか水無瀬君から離れることができたのだ。

ま、そのお陰ですっかり安心しきっていたあたしは、トイレに行くために下駄箱で稔を待たせて、再び階段を登って行ったのだ。それから用を足してトイレから出た瞬間、

「ねえ」

固まった。驚いたからじゃない。いや、確かにびつくりしたわけだけど、その声には確かに聞き覚えがあつて、間違いなく彼はあたしに話しかけて来ると分かったからだ。

ゆつつつくりと首を振り向かせると、
．．．．．やっぱり．．．．．。

水無瀬君が腕を組んで壁に寄りかかっていた。そしてこちらを見ている。無言で。

「み、なせ君」

「・・・・・・・・・・」

沈黙を貫き通す水無瀬君。汗ダラダラのあたし。

「水無瀬君、こ、こんな時間にここで何やってんの？」

「・・・・・・・・・・」

「こ、ここ、女子トイレの前だよ？」

「有賀さんさ、」

ビクッと身体が震えた。そのまま水無瀬君の視線ががちりとあたしの視線と交わる。

「昨日の放課後学校に来てたよね？」

ピキッと再び動きが固まる。あたし、もしかしくなくても、大ピンチじゃない？

そのまま冷や汗ダラダラで水無瀬君を無言で見つめていても、あつちは確実にあたしが何かを言うまで待っている様子でいる。っていうか腕を組みながら壁によりかかっているその姿、めっちゃめっちゃ絵になってるんだけど。

「き、来た、かな？」

「．．．俺さ、昨日の放課後学校に残ってたんだよ」

「う、うん」

「それで電話してたんだけど、それを終わらした瞬間に振り向いたら有賀さんがいたんだよね」

「．．．い、いた、ね」

「しかもなんかじりじり後ずさりしてさ」

「．．．して、た？」

「もしかして、俺の会話聞いてた？」

はっ！ これは確かめてるの！？ 確かめてるのね！？ ということはあたしが本当にそこにいたかどうかは知らないってことね！
よし！ ここは嘘を貫こう！

「ききき聞いてないよ！ そんな他人の会話聞くなんて？」
「じゃあさ」

いきなり一段低くなった声に言葉が止まった。そのまま水無瀬君がジリジリと近づいて来て、あたしは思わず下がりに続けて、壁にぶつかってしまった。それでも尚水無瀬君は近づいて来る。

「．．．今日、どうしても俺のこと避けてるわけ？」
「．．．．．．．．．．．．．．．．」

ヤバイ。これは本当にヤバイ。絶対絶命大ピンチなんだけど。しかもなんだか頭の両側に水無瀬君の腕があって逃げられない状況になってる．．．．！　なんで！？　なんでこんなことになってるの！？　どうすればいいの！？　本当のことを言えば良いの！？　マジで分からない！

百面相を繰り返すあたしをじっと見つめてから、水無瀬君は俯いた。

「．．．．聞いてたんでしょ」

「えっ！？」

「．．電話での会話、聞いてたんだろ」

「．．．．え、ちょ、水無瀬君．．．？」

あのー。口調が変わって来てるんですけど。

声をかけると、水無瀬君はキツと視線を上げた。

「往生際が悪いんだよ。俺が電話してる所、しっかりと見てただろーが」

「！ー」

く、黒水無瀬君になった．．．っ！　な、なんで！？　やつぱり昨日は水無瀬君がマジ切れした瞬間とかじゃなかったわけ！？　何これ！？　どうなってるの！？

「ちょ、ちよつと水無瀬君!？」

「．．．俺はな、有賀」

いきなり呼び捨てかよ．．．!

「学校では優しくて謙虚で温和な誰にでも好かれる優等生をやつてんだよ。だつてそつちの方が人生が楽だろ? 変な輩に喧嘩も売られねえし、先生達には評判はいいし、男にも女にも同じ量の友達が出来る。おまけに女にモテるモテる!」

「．．．み、．．．みなせ、．．．君?」

きゃ、キャラが変わり過ぎなんだが。

「けどよ、俺の本性はこつちだ。昨日の電話を聞かれるとは計算外だった。ま、周りを確かめなかった俺も俺なんだがな。まさか誰かに聞かれてとは思わなかったから、振り向いてお前がいた時には驚いたよ。しかも一目散に逃げやがつて」

「ちょ、ちよつと待ってよ! これどういうこと!? どうなつてんのよ! あ、あんた本当に水無瀬君!? 双子とか他人の空似とかじゃないでしょうね!？」

「俺が水無瀬愁也には見えないくらいに驚いたってことか?」

「そうよ! 水無瀬君はあんたみたいな奴じゃないわ! 水無瀬君に何したのよ!」

「有賀」

抗議をするために腕に手をかけて水無瀬君を睨みつけければ、静かに名前を呼ばれる。それからあたしが手をかけていない方の腕で鞆の中からノートを取り出した。それを突きつけて来る。

ノートには確かに『水無瀬愁也』と書いてあるし、中身も綺麗な水無瀬君の字だ。

「その中にある問題、俺に一つ聞いてみる」

「えっ？」

「お前より頭がいいって証明できれば、信じてくれんだろ？」

「・・・・・・・・・・」

た、確かにあたしより頭がいい人は水無瀬君しかいない。あたしより一つ下で、三位の成績を持っている神楽さんでさえも中間テストの総合点数はあたしより百点以上の差がついている。水無瀬君とあたしの成績の差は、五十点。だけどその五十点の差があまりにも大きいのだ。あたしがどれだけ勉強して、どれだけ頑張ってもその距離を縮めたことはない。

自信満々のまま水無瀬君はあたしを見つめている。

分かっている。虫の良すぎる理屈で目の前にいるこの男の子が水無瀬君じゃないって決めつけてる。でも、そう思ってしまうほどにこの男の子は水無瀬君っぽくないのだ。

「・・・・いい」

「は？」

「わざわざそうやって証明してくれなくても、あんたが水無瀬君だってことくらい分かっている」

「・・・・・・・・・・」

そう言ったあたしに対して両目を大きく見開いた水無瀬君は、確かにあたしや稔の知ってる水無瀬君に見えた。

ああ、これが水無瀬君なのだ。口が悪くて意地悪そうなのこの腹黒い水無瀬君が、本当の水無瀬愁也なのだ。

「・・・・・・・・・・よりによってなんであたしが知るのよー・・・・・・・・・・最低な立場だわ・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・なんで、そんな、わざわざ猫なんてかぶってんのよ」

ポツリポツリと言葉を紡ぐと、水無瀬君はニツと笑った。

「言っただろ。こっちの方が人生が楽だつてよ。中学からずっとこれで貫き通して、断然簡単だよ。ちよつとくらい失敗しても俺のことは先生達はすぐに許してくれるのに、俺と同じ失敗をした態度の悪い奴は散々怒られる。だったら失敗しても許してくれる奴になりてえだろ？」

「・・・・・・・・・・水無瀬君」

「ありがあ。このこと絶対誰にも言っくなよ」
「は？」

誰にも言っくなって・・・・・・・・・・。今まさに誰かに言っついていいって許可を訊く所だったんだけど。

聞き返したあたしに、水無瀬君は溜息をついた。

「は？　じゃねえだろ。お前が言っちゃったら俺の人生計画は台無しになんだよ。本気で頼むぜ」

「そ、そんなのずるい！　みんなを騙してるみたいなものじゃない！」

「騙してるんなら騙されてる方が悪いんだよ。大体、運動神経と頭脳はともかく、性格まで完璧な男なんているわけねえだろ。普通なら違和感覚えるっつーの」

「水無瀬君！」

「うるせえ。有賀、もしお前が他の奴らにバラしたりしたら、どうなるかは分かってんだろうな？」

「は？　そんなの知るわけ？？」

気づいたら水無瀬君の顔がすぐ目の前にあった。

それから、気づいたら水無瀬君の唇に、自分の唇が当たっていた。

「！？」

目を見開いて驚いていると、あたしにキスをしたまま水無瀬君が目を開いてこっちを見てる。その美しい瞳にキスされていることも忘れて思わず見惚れてしまいそうになったけど、脳の隅っこで必死に理性が叫んでいて、我に返る。

瞬時に顔を引き離そうとしたけど、いつのまにかがっちりと頭の後ろの水無瀬君の手があって一向に離れる気配がない。

息をするために僅かにあけた口の中に、濡れた何かが入って来て、それが水無瀬君の舌だと理解するまで少し時間が経ってしまった。だけど理解してからは一層強く水無瀬君を押し返そうとしたのに微動だにしない。

「んっ、っ、はっ、み、んんっっ！」

荒い吐息が漏れても尚、水無瀬君はあたしの舌を絡めとる。さっきまで開いていた瞳も伏せていて、開いたままのあたしの目には彼の美しい睫毛が見えた。

だけどそんなことに気を回している暇はない。

「んっ………っ、んん………っっ！」

必死の音を出して抵抗をしても水無瀬君のキスは止まらない。だけどこれ以上はだめだ。このままだと理性が粉々になっってしまう。身体が溶けてしまっんじゃないかって思う程に熱い。水無瀬君の胸板に押し付けているあたしの手の力も抜けて行っている。だめだ。これ以上は、だめ。

一度強く唇を吸い上げてからふっと水無瀬君が離れて行って、あたしは息を切らしながら彼を睨み上げた。あたしとは対照的に息一つ乱れていない。

「な、何、すんのよ、このクソ水無瀬！」

「それが嫌だったら誰にも言うなよ。誰かに言ったら、キスだけじゃすまねえぞ」

お、恐ろしいことを言いやがったこいつ！！ あっさり人のファーストキスを奪っておいてその台詞は何！？ 許せない！

「こんの．．．っ、猫かぶり野郎がああ！！」

「なんとも言えはいいだろ」

飄々とした様子で水無瀬は床に落ちていた鞆を拾い上げると、何事もなかったかのように階段の方に歩を進めた。それから一度だけ振り向いて、未だに床に座り込むをあたしを見て、ふんっ、と鼻で笑った。

．．．あんの、野郎．．．！！ 鼻で、鼻で笑いやがったああああああ！！

許さない！！！！ 絶対に許さない！！！！

これが、あたしと水無瀬の、秘密の共有の始まりだった。

秘密守り（前書き）

なんだか一話目より短くなってしまった。

秘密守り

「有賀さーん」

「・・・・・・・・・・」

堂々と声をかけてくんなこの下衆野郎が。散々人を騙しやがって許さねえ。おまけに人のファーストキスを奪いやがってますます許せねえ。ってかそんな下衆野郎の言う事を素直に聞いているあたしもどうなの？

無視を通して歩き続けると後ろからタッタッタと足音が聞こえて来る。なぜ近づいて来る！

「有賀さんってばー」

「・・・・・・・・・・」

大体こいつの猫かぶりはマジで完璧すぎる。こつやつて見るとやっぱり昨日、おとこの水無瀬君のままー、なような気もするんだけど。

現実はその甘くないわけで。

「・・・・・・・・無視通してんじゃねえぞてめえ」

肩が掴まれたと思うと、極上の笑顔を浮かべたまま水無瀬が小声であたしに言い放った。

こ、わ、怖っ！？ 思わずものすごいスピードで後ずさりしちゃったじゃないの！ バクバクする心臓を押さえて水無瀬を睨み上げると、相も変わらず笑顔を浮かべたままこっちを見てる。

因みに現在学校に登校中。教室に入った瞬間に話しかけられることとかなくなるようにわざわざ遅く登校してきたっていうのになんによりに寄ってバツタリ会うのよ！ あんたいつもは登校するの早いでしょーが！！

「な、何なの！？ びっくりさせないでよ！」

「お前がさつさと返事しないのが悪いんだろ。こっちはわざわざ優しい水無瀬愁也のままで呼んでやったのにさ」

「自分で言うな！ 大体こんな所で本性さらけ出しちゃっていいわけ？ 誰かが聞いてたらどうすんのよ」

「聞いてるわけねえだろ。こんな時間だぞ？ 大体全員が登校してるし、誰かがいたとしても半径五メートル以内に入ったら俺は優しい俺にスイッチオンするから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

もう嫌だこいつ。

「・・・・・・・・ねえ、もしかしてとは思っただけど、あたしが誰にも言っていないと思ってるでしょ」

「は？」

カマをかけてみると以外と水無瀬は驚いてこっちを見た。
ふっ。少しは苦しむがいい。

「あんなことされて誰にも言わないと思ってたら大間違いよ。言っとくけど稔には言っちゃったし、ついでに美里ちゃんみさとと果鈴かりんにも言っちゃったわ」

ふふん、と笑ってみせてから水無瀬を盗み見ると、あいつは酷く驚いていた。けれど、あたしが言い終わると同時にスッと目を細めた。それからキョロキョロと周りを見回してからいきなり肩を掴んで来た。

「いつ!?!」

そのまま壁に押し付けて来たと思うと、水無瀬の端正な顔が近づいて来た。

「ちょ、まっ！　嘘、嘘つきましたごめんなさい嘘ですっ！!!」

両手を顔の前にかざして水無瀬の顔を押し返すと、今度は水無瀬がふふんと笑って見せた。

こいつ……っ!!

「しょーもねー嘘ついてんじゃねえよ。俺が本気だったことくらい分かってんだろ、バーカ」

「っっっっっ！！！！」

声にならない叫びを上げて真っ赤になった顔で水無瀬を睨みつけたが、微動だにしない。それどころかピンツとあたしの額にデコピンをしてからニツと口角を上げて学校の方に歩き出した。

飄々とした様子で歩きやがってー！！ 乙女の純情振り回してんじゃないわよ！ 一体何様のつもりなわけ？ しかも、なんか、言いたくないけどめっちゃああいいうキスに慣れた様子だったし、いろんな女とピーツツとかやってんじやないでしょうね．．．！！

「水無瀬君！」

わなわなと肩を震わせて水無瀬の後を追うと、後ろから可愛らしい声が聞こえた。あたしの声じゃないと分かっていたのか、さっきの極悪面はどこにいったのやら、水無瀬はいつもの優しい表情のまま振り向いた。ついでにあたしも振り向くと、嬉しそうに瞳を輝かせながら女子生徒が立っていた。

制服から見るとあたし達と同じ学校。リボンの色からして．．．
・三年生にいます、先輩だ。

あたし達の学校は女子のリボンと男子のタイの色が学年に寄って違って、一年生は赤、二年生は青、三年生は緑だ。

「．．．．．久我先輩」

見覚えのある顔だったけど誰だか分からずに首を傾げていると、後ろから水無瀬が呟いたのを聞いて、あ、そうだ！ とポン、と手をついた。この人は確か久我夏美先輩だ。なんで知っているかと言うと生徒会副会長だからだ。

なんか、生徒会長って覚えてるんだけど副会長ってなかなか覚えられないのよね。水無瀬は確か生徒会役員だから顔見知りなのかな。．．．．．ってか生徒会にも入ってるのかよこいつ。つくづく優等生の猫かぶってやがる。

ところで．．．．．どうしてそんな気まずそうな顔をしてるの、水無瀬君よ。

「おはようございます」

「おはよう」

丁寧に礼をするので、あたしを一瞥した久我先輩にあたしも一応礼をした。それから顔を上げるとにっこりと微笑んでいる。水無瀬に向かつて。あたしは眼中にないですか。まあ交流ないから当然かもしれないけど。

「ずいぶん遅いのね。普段はもっと早いでしょう？」

「．．．はい。今日は家の用事で」

嘘だろ。絶対嘘だろ。あたしの行動パターンを読んで遅く出て来

たんでしょ？　だってあたし水無瀬と一緒に登校するのはじめてじゃないし！　まだほのぼの優しい水無瀬君だった頃は時々登校中に会うことがあったからあたしの登校時間絶対把握してただろ！

水無瀬の言葉に久我先輩は、そう、と静かに呟いてつきり黙り込んでしまった。

．．．．．何この気まずい雰囲気。

「み、水無瀬君、先輩、そろそろ学校に行かないと？」

「何か俺に言いたいことがあるんですか？　先輩」

わざわざ先輩に配慮してあんたのこと君付けで呼んだのに台詞遮ったよこいつ。

しかも久我先輩もあたしの言葉には反応しなかったのに水無瀬の言葉には顔を上げた。．．．．．ってか、もしかしてあたしって邪魔者？　だってさっきから久我先輩がめっちゃ邪魔そうにあたしのことチラチラ見てるもん。

．．．．．ここは二人に配慮して学校に向かうか、と思って水無瀬を通りすぎようとする。

「水無瀬君、あたし先に学校に行くから？」

「いいよ有賀さん。ここにいて」

「えっ」

おいおい。人が配慮してやってるのになんで引き止めるのよ。

何やってんのよ？　みたいな視線を向けると、久我先輩には見えない様に水無瀬は顔をこちらに向かせてあたしを睨みつけた。

「俺も一緒に行くからさ。勉強の話も途中だったでしょ？」

「へっ！？　あ、う、うんっ！　そうだね！？」

顔とは対照的すぎる声に思わず顔がひきつって声も裏返った。．．

．．これは、残らなかったら後が怖い。

でもやっぱり久我先輩は邪魔そうにあたしをチラチラと見ている。当然それに気づかない水無瀬ではないはず。ってことは、先輩と二人きりになりたくないってことか？

「水無瀬君．．．」

「すみません先輩、俺達すぐに学校に向かわないといけないので．．

．．話があるのなら．．．」

「．．．．．」

ほら、またあたしをチラ見した。

「．．．いいわ。また今度にする。引き止めてごめんなさい、水無瀬君」

「いいえ」

それじゃあ、と言ってさっさと進んで行く久我先輩の後をびっく

りして見つめる。ってか先輩、あたしに挨拶はなしですか。

はあ、と溜息をついて横にいる水無瀬を見ると、苦虫を噛み潰した様な顔でチツと舌打ちをした。

「え？ 何あんた、久我先輩に恨みでもあるわけ？」

「ねえよ別に」

「．．．．．なんであたしを引き止めたのよ。せつかく気を遣ってあげたのに」

「余計なことすんな。あいつが何を言いたがってたのかお前だって分かってんだろ」

先輩をあいっつ呼ばわりですか。

「．．．．．まあ、なんとなく雰囲気から察してたけど．．．．．」

「．．．．．どうして聞いてあげないの？」

「あの人と付き合う気はないし、好きでもなんでもない。生徒会役員だつてただの形だし、思い入れもなにもないし。．．．．．そもそも本当の俺のことを知らないくせに好きになつた人を好きになれるとは思えない」

「．．．．．．．．．．そんなのあんたが猫かぶんなきゃいいだけじゃないのよ」

「うるせえよ」

えええええ．．．．．。ごもつともなこと言ったのになんでそんなこと言われないといけないわけ？

「とにかくさつさと学校行くぞ。早く歩けよ」
「…………っ！」

こっちの台詞だよ！　そもそもさつきあんたがあたしを行かせてくれたらこんなことになってないんだよ！　何なのこの俺様野郎は！

言い捨ててさつさと歩き出していく水無瀬を無言であたしは追いかけた。

あたし達に通っている学校は国立藤ヶ丘高等学校という。国立と言っているけれどそんなにレベルが高いわけではない。そもそも毎年の金額がなかなか高いのでそこにお金のあるあたしの家でも払うのに苦労している。それでも通わせてくれるのは藤ヶ丘の勉強の教え方がとても上手だからだ。黒板に書いてあたし達に知識を押し込むだけじゃなく、一人一人の生徒に回って手伝いをしてくれて、放課後も必ず先生達が残って、勉強で分からない部分があれば聞きに行く丁寧な教えてくれることもする。

そのおかげであたしもここまで成績が伸びているのだ。

ひたすら無言を貫き通して二人で学校の門に入る。上履きを履いた瞬間にチャイムがなったけれど、あたしも水無瀬も急ぐ様子は一切見せない。．．．いや、あたしはすぐにでも走って登りたいんだけど、水無瀬の方が『俺を通り越したら殺すぞ?』的なオーラを発してるからなかなか進むことができない。

．．．このままだと遅刻なんだけど．．．。

あたしの心の声が届かないまま水無瀬と共に階段を登って教室のドアを開ける。既に教室は静寂に包まれていて、先生が教卓に立って話をしていた。だから普段は真面目でどちらも早く学校についてるあたし達が遅刻したのを見ると、先生だけじゃなくてほかのみんなも驚いてお互いのことを見ていた。

「水無瀬、有賀。珍しいな。二人揃って遅刻か?」

「すみません、有賀さんと勉強の話をしていたら話し込んでしまっ
て」

「．．．．．」

呆然と水無瀬を見つめるあたし。

なんつー言い訳を使うんだよお前。そんなんです許してくれると思
って?

「どこまでも真面目な二人だな、お前ら。普段は生活態度がいいか
ら許してやる、早く席につけ」

「はい」

「あ、はいっ」

ヒラヒラと手を振ってあたし達に席につくよう促すと、あたしと水無瀬は急いで席についた。

そうかこれか！ 猫かぶつてるとこんな利点があるのか！

．．．．．確かに、これが成績優秀だけど問題児である遠田とあだが言い訳につかったら絶対に先生に怒鳴られるに決まってる。だって態度が悪いもん。

．．．．．つくづく世の中って不公平すぎる。

「．．．あんたと水無瀬の勉強を話し込む姿とかめっちゃ見たかったんだけど」

ヒソツ、と隣にいる稔が話しかけて来て、あたしは疲れたように溜息をついた。

「そんなの見てどうすんのよ」

「だって学年トップツールの勉強の話だよ？ めっちゃ高レベルでしょ」

「．．．．．あのねえ、」

「いやあ、見たかったー。だってあんた達二人ともレベル高すぎなんだもん。三位の神楽さんでも二人の勉強には追いつけないって噂だよ？ ま、総合点数が百点以上も差があるんだからそりゃそうだよね」

「．．．．．」

実際そんなことは全然してないし、むしろ水無瀬が先輩に告白されそうになった場面に出くわしてただけなんだけど、さすがにそれは言えない。だって少し斜め前にいる水無瀬がめっちゃこっち見てるんだもん。めっちゃ。

ギリギリと顔に視線を感じながらも絶っっ対に水無瀬の方を見ない様にしてあたしはひたすら俯いていた。

不安な感じがして仕方がない

理科で実験をする時は理科室へ行き、そこで班に別れる。大体は出席番号に寄って班が決まるんだけど、それだと必ず早く終わる班と遅く終わる班、真面目にやる班とかふざけてやる班がいつも同じで偏ってしまうため、今日は気分を変えて違う班決めにしようという事になった。んで、その変わった班でこれから先実験をやることになる。

実験は単純で、バネにおもりをぶらさげて、重さによってどれだけバネが伸びるかを記録するということだ。

実験班の決め方は単純にクジ引きになった。引いたクジに書いてある番号に寄って四人で構成された班になる。出席番号の最後から順にくじを引いて行く。あたしは『有賀』だから自然と最後の方になる。因みにあたしの出席番号は二番だ。

次々と全員がクジを引いて行き、あたしの番が回って来ると、一番の愛野さんと一緒にクジを引きに行く。二枚しか残っていないから上にあつたクジを引いてから折り畳まれていた紙切れを開いた。

「・・・六班・・・」

綺麗な字で大きく『6』と書かれた紙切れを再び折り畳んで席に戻ると、先生が全員を静かにさせてから教卓に立った。

「はいはい。静かに静かに。スタンドもバネも重りも各自で取ってきてください。んじゃあ班になってくださいねー」

先生が言い終わってから『さんぱーんこつちー！』『一班ここに集まれよ！』などと言葉が飛び交い、あたしは溜息をついて席から腰を上げた。正直ただの班決めでここまで盛り上がる意味がよく分からない。

六班を探しながら視線を彷徨わせっていると、左手の指を全部広げて、右手の指を一本だけ上げて『ろっぱーん』と呼んでいる人が見えてあたしは近寄った。あれは美里ちゃんだ。頭はそんなにいいわけじゃないけど仲のいい友達と一緒にの班なのはいつだって心強いことだ。

人の間をすり抜けて美里ちゃんに近づいて行くと、美里ちゃんの顔がパアと明るくなった。

「やった！ 彩那と同じ班！」

「やったねー」

いえーい、とハイタッチをして、ほかの二人がくる間にスタンドを取りに行こうとして歩き出した瞬間、

「ああ！ 水無瀬君も六班！？」

その美里ちゃんの言葉に足が止まった。

それからゆつくりと首を振り向かせると、美里ちゃんに向かって水無瀬が顔に微笑を浮かべながら近寄って行く。

「うん。え、狭川^{さがわ}さんも六班だね？」

「うん、そうだよー。いやあ、彩那と水無瀬君と同じ班とかヤバイ。超恵まれてる！」

その発言に水無瀬の目が少し見開いて、未だに二人の方に首を振り向かせているあたしに顔を向けた

．．．くつ、いつ見ても端正な顔立ちしやがって．．．！

「．．．へえ、有賀さんも一緒？」

ニイ、と口角を上げながらあたしに向かって水無瀬が微笑んだ。いや、周りからは微笑みに見えたかもしれないけどあたしに取ったら悪魔の微笑にしか見えなかった。

もう．．．なんでよりに寄って水無瀬と同じ班なのよー．．．。これから先ずつと一緒にすることじゃないのー。

．．．仕組んだんじゃねえだろうなこいつ。あたしが六班にくるのを見て、違う六班の人の紙と交換してきたとか。くつ、あたしに嫌がらせをするためにはあり得る。超あり得る。

「有賀さんと同じ班だと心強いね」

極上の眩しい笑顔を見せて来たこいつ。
負けるものか！

「うん、そうだね。水無瀬君と一緒にだったら苦労しないよね」
「大げさだよ、そんなの」
「何言ってるのよ。水無瀬君学年成績が一位じゃない」
「そんな有賀さんだって二位でしょ？」
「いやいや、水無瀬君とは比べ物にもなんないよー」
「五十点しか違うくせに何言ってるんだよ」

周りの人には笑顔を振りまいてトップツーが会話をしているようにしか見えないだろうけど、実際は目でこんな感じの言い争いをしている：

『へえ、有賀、お前と一緒にだよ』
『何か文句でもあるわけ？』
『いやいやまさか。お前と一緒にだったら実験も楽に行くよ』
『全部あたしに任せるってこと？』
『まあそういうことだよな』
『ふ・ざ・け・ん・な』
『いいだろ？ 言う事きかねえとどういうことになる分かってるだろうよ』

．．．いや、こうかどうかは分からないけど多分こんなもんだよね。最後の台詞はとも水無瀬っぽい。とっても。

「おっ、水無瀬も有賀も同じ班かよ！ ラッキー」

「ああ、宮谷君も同じ班？」
「おうよ」

あたしと水無瀬が見つめ合ったまま四人目の班員の宮谷君が寄つて来た。宮谷君もいればあたし達の班に問題はない。態度は悪そうに見えるけどとても真面目だからね。

ってか一番の問題はこいつだよこいつ。この目の前にいる猫かぶり野郎だよ。

「じゃあ俺と有賀さんは実験道具集めて来るから、狭川さんと宮谷はここで待ってて良いよ」

「ああ、サンキュー水無瀬、有賀」

「ありがとう」

なんであたしがあんと行くわけ。一人で取りに行けばいいだろうが。

はあ、と溜息をついてスタンドを取りに行くと、重りやバネも同じ所にあるから後ろから水無瀬が追って来る。顔には満面の笑みがあるに違いない。ああム力つく。

「同じ班になるとはさすがに予想外だったな」

「……仕組んだんじゃないでしょうね」

「なんで俺がお前と同じ班になりたいと思うんだよ。自意識過剰」
「……………」

落ち着け。落ち着くんだ彩那。だめだ。こんなことで怒ってはいけない。こいつはこういう奴なのだ。表では笑顔を振りまきながら優しい少年を演じてるけど本当は小声で嫌味を繰り返す嫌な男なのだ。こんなことで振り回されてはならない。落ち着くんだ彩那。

ふう、と落ち着くために息を吐くと、何も反応しなかったあたしを水無瀬がつまらなそうに見た。

「はい。スタンドもって」

「俺が？」

「あんたが。あたしはバネと重り持つから」

「.....」

有無を言わずにスタンドを押し付けてあたしはバネと重りを持つてさつさと班に戻って行く。後ろから水無瀬が溜息をつくのが聞こえたけど、同時に道具を取りに誰かが来たので何も言わずにあたしの後を追ってきた。

さすがというかやはりというか実験が最初に終わったのは私達で、結果も私達の班が一番正確だった。ム力つくけれど水無瀬があたしよりも頭がいいのは猫をかぶっててもかぶってなくても同じなので

仕方がない。

でも悔しい。

なんであんなに嫌な奴なのに全てにおいて超人なのよ！ ああムカつく！

「彩那ってば！」

ぺしっ、と軽く叩かれながら名前を呼ばれて我に返った。目の前を見ると稔が腰に手を当てて、肩眉をあげながらあたしを見下ろしている。

．．．あれ？ いつのまに学校終わってたんだろう。前にいる稔が呆れた様子で我に返ったあたしを眺めてから溜息をついて、あたしの鞆を机のホックから外して教室から出て行く。

「あ、ちょ、稔！ 待ってよ！」

いろいろなことに対して強引すぎるよこの子。 ったく。

「あれ？」

慌てて教室から飛び出して稔を追いかけると、階段の手前で稔が立ち止まっていた。 追いついて自分の鞆を稔の手から取ってから、

稔のしているものに視線を向けた。

「．．．げっ．．．」

水無瀬が立つてた。っていつてもあたし達を見てるわけでもなんでもなく耳に携帯を当ててるだけなんだけど。．．．あんたって奴はどうしてそんなに携帯で話す必要があるのよ。ってか猫かぶってんだからせめて人気のないところで電話しなよ。

あたし達の足音が聞こえたのか、水無瀬ははっとして振り向いた。そこにあたしと稔の姿を見つけると、小さく微笑んでから階段を降りて行く。

「．．．だから絶対に家に入れないで。俺が帰るまで頼むよ」

あたしはともかく稔が側にいるから口調はいつものように穏やかだったけど、そこには確かに怒気が込められていて、あたしははじめて水無瀬の叫ぶ姿を見た放課後を思い出した。あの時も確か『絶対に家に入れんなよ』とか叫んでた気がする。

．．．誰だろう？ 水無瀬のことだから女関係か？ 酷いフラレかたをされた女の子が押し寄せて来たとか。あり得るあり得る。あいつ絶対あいうタイプだもん。

うんうん、と一人で納得していると、隣にいる稔が首を傾げながら水無瀬が降りて行った階段を見つめた。

「なんだろう。なんか怒ってるみたいだったわね」

「そうねー」

「水無瀬君にしては珍しい」

「まあ、水無瀬君も人間なんだから苦労があるんじゃないの？」

感謝しろよ水無瀬。今この瞬間に稔にあんたが猫かぶってること
言えてもよかったんだから。

．．．．あれ？　　そういえば今思ってたんだけど。あたしが水無瀬が猫かぶりだって発見した日、あいつは確かに素のまま電話の中に叫んでいた。ということは電話の相手も水無瀬の本性を知ってるわけで．．．猫かぶってるってことも知ってるってことかな？
中学から猫かぶってるって言ってたから、家族もしかして知ってるのかもしれない。

んー。気になる。

それにもし家族じゃなかったとしたら、あいつが本性をバラしてるのって誰になるんだろう？　彼女とかできても本性見せなさそうだし。

いやー。気になる。

「そういえば彩那、水無瀬君と同じ理科の班になったんでしょ？」

「え？　ああ、そういえばそうだね」

「ラッキーすぎるでしょ。私も水無瀬君と同じ班がよかったー！
なんで学年トップツーが同じ班なのよ！　そんなのずるい！」

朝から何人もの人に言われている言葉にあたしは溜息を吐いた。自慢してるつもりではない。だけど確かに周りから見れば学年トップブツが同じ理科の実験班なんだから、班員が羨ましいのは当然といえは当然かもしれない。

それでも稔だって頭は悪くはないわけで。

「．．．あのさあ、そんなこと言うけど稔だって余裕で実験やってたじゃん。学年五位なんだから文句言うなよ。充分頭良いんだから」

「そりゃあね？ 順位だけ聞いたら『うわお！ 何、ちょ、稔超頭いいじゃん！』とか思われるかもしれないけど！」

「．．．．．」
「あんと私の総合得点の差、知ってんの？ 知らないでしょ？」

「．．．．．そういえば見た事なかったな．．．。神楽さんは自分からあたしに言ってきたから知ってたけど、基本的には水無瀬とどのくらい点差がついてるかを確認するから、あたしよりも順位が下の人の得点はあまり気にした事がない。

言っておくが断じて自慢してるわけじゃないし、あたしよりも順位が下の人をバカにしてるわけでもなんでもない。ただ、二位の成績としてはやっぱり一位にはなりたいわけで、どうしても水無瀬の得点が気になってしまうのだ。

「．．．．．そういえばあんまり見た事がないかも」

正直に答えると稔が『でしょ?』とでも言いたげにあたしを見た。

「神楽さんとあんたの得点の差が百点以上。神楽さんと遠田の得点が基本的には四十点差。んで、私と遠田の得点が基本的に八十から百点差。さて、私とあんたの得点の差はなんでしょう?」

「ざっと二百二十点から二百六十点?」

「はやっ! そうだよそういうこと! つまりあんたと水無瀬君の得点の差はめっちゃくちや僅差なの。私が遠田にいつまでたっても追いつけないように、神楽さんも彩那の足下には及ばない。分かるー? そんないつでも僅差な二人が同じ班なんて羨ましいに決まってるじゃん」

「.....」

確かに点数についてはあまり考えた事がなかったけど、稔の言う通りだと思った。テストの合計得点は千点。水無瀬は必ず九百点台をたたき出して来て、あたしはいつも八百点から九百点弱を取る。一方の神楽さんは殆ど七百点で、時々八百点台にも入って来るけれど、そういう時は基本的にあたしも点数が高くて、水無瀬の点数も高い時だ。

「.....んー。そう考えるとあたしと水無瀬が同じ班って、すごいことなのかも。決して自慢してるわけじゃないけど。そういうふうに聞こえるかもしれないけど。」

「まったく。彩那ってそういう所に関してまったく自覚がないから嫌な感じだよな」

「.....ちよつと」

「嘘。うそうそ。そういうところが彩那のいい所。んじゃあねえー」
「はいはい。じゃあね」

手を振りながら稔が駅に入って行って、あたしは溜息をついた。
稔は水無瀬の本性が知らないから羨ましいと言えるんだよねー。
あたしは水無瀬の本性を知ってて、あいつがどれだけ腹黒くて酷い
奴なのかは知ってるから、いまいち喜びが大きくない。

再び溜息をついて、青に変わった信号を渡るうとした瞬間、

「おい」

.....。

「またあんたかよ!？」

叫びながら振り向くと、腕を組んで壁によりかかりながら水無瀬
が目を見開いた。

「んだよ。文句あんのか？」

「ありまくりだよ! どうしてそういうタイミングで呼びかけてく
んのよ、あんたは!」

「お前が一人じゃないと話しかけられないから仕方がねえだろ」

「ってかどうして呼びかけてくんのよ! ほっとけばいいじゃない」
「聞きたいことがあったから呼びかけたんだよ」

「…………もう……。何？ さつさと済ませてよね」

もうあたし優しい。こんな嫌な奴のいうことを素直に聞いてるあたり、ただのお人好しに見えるかもしれないけど断じて違うよ。違うよ？

「…………お前さ、」

…………。え、そこで言葉を切るの？ めっちゃ何か聞きたげなのになんでそこで言葉を止めんのよ。

「…………ちよつと、何よ。気になるじゃない」

「……………やっぱいい。知ってたら恐ろしい」

「はあ！？ 知ってたらつて何よ？ ちょ、え、ちよつと水無瀬！」

自分から引き止めておいてやっぱいいって何よあんた！ しかも歩き出したし！ 何事もなかったかのように歩き出したし！ 挨拶もなしかよお前はよ！！

顔を引きつらせながら水無瀬の後ろ姿を追うと、あたしが何を知ってたら恐ろしいのか考えてしまった。

知ってたら恐ろしいって、何が？

不安な感じがして仕方がない（後書き）

これを上げたらもう一つの方の小説に取りかかるので、次話は遅れてしまつかもしれません。

ご了承ください。

ここまで読んでくれてありがとうございます。

猫かぶり家族

水無瀬の言った意味がよく理解できないまま家に帰ると、いつの間にか土曜日になっていた。なんだろう。最近時間が流れるのが速くなってる様な気がする。水無瀬と関わるようになってからだよ。絶対。

時計を見ると午後一時。しまった。昨日遅く寝たから起きたのが十一時だったんだよね……。朝ご飯食べて朝シャワー浴びたらいつの間にかこんな時間になっていた……。。

そこで、

「そんなこと思っただったら出て行けばいいでしょ!？」

「お前らがやってけるのは誰のおかげだと思っただ!！」

「働いてるのはあんただけじゃないのよ!！」

……。またはじまった。もう結構前からだけどね、お母さんとお父さんの喧嘩がはじまったの。最初はそんなに簡単に怒りだす二人じゃなかったのに、今ではちよっとくらいですぐにヒートアップしてしまう。

こういう時に家の中にいるのは憂鬱だから、大抵喧嘩が勃発する時は出かけることにしてる。

部屋から出て玄関に向かうと、後ろのドアがしまった部屋で二人が叫び合うのが聞こえる。どうせまたお父さんがお母さんに小さな文句でもつけてそれにお母さんが爆発した、っていういつもパターンに決まってる。

溜息をついて、一応『いつてきまーす』と言ってからドアを開け

た。

外に出ると二人の叫び声が一気に小さくなったのに安堵の溜息をついて、どこへ行くわけでもなくあたしはフラフラーっとでかけた。どうせ暇なんだから本屋でもいつて漫画買ってるかな。そういえば食材もなかったような気がするけど．．．、多分怒った後にお母さんが買い物に出かけるから食材はいいや。本屋にでも寄ろうかな。

商店街をブラブラと歩いて本屋を見つけると、その前に見覚えのある人物が見えた。

美里ちゃんだ。

「美里ちゃん！」

声をかけると、本屋に入ろうとしていた美里ちゃんが驚いて振り向いた。そこであたしが手を振りながら駆け寄って来る姿に顔を輝かせて美里ちゃんも手をふる。可愛いなもー。

「彩那！ 超偶然！ こんな所で何やってんの？」

「こっちの台詞だよ！ あたしは本屋に寄って漫画でも買おうと思っ
つて」

「あたしもーっ。どうせなら二人で見てく？ 買う漫画は同じでしょ？」

「だねっ」

あははと二人で笑って本屋に入る。趣味は似ているため、しばら

く美里ちゃんと一緒に漫画を探すと、やはり二人で立ち読みを始める。立ち読みをはじめると何時間も同じ所に立って読み続けられるから時間を潰すのにはもってこいの場所だけど、急いでる時に『ちよつとだけ』と思って寄っちゃうと大変なことになる。

因みにあたしはそういうの体験済み。十分くらい寄るはずだったのがいつまにか一時間も立ち読みしてて大慌てで家に帰ったんだっけ。その時も相も変わらずお母さんとお父さんが喧嘩してたからあたしが遅れたのに気づいたのかさえも不明だけど。

結局今回も一時間半くらい立ち読みをしまつて、美里ちゃんと一緒に本屋から出たのが三時近くだった。

「ヤバい。長居しすぎた」

「あははっ、分かる。でも本屋ってつい何時間もいちゃうよね」

「だよねっ！」

「結局何も買わなかったし」

「あははっ、ほんと！」

二人で笑いながら商店街を進んで行くと、美里ちゃんの家の方角があたしとは反対方向なので、信号の手前で手を振って別れる。それから腕時計を見ると三時五分。さすがにお母さんとお父さんの喧嘩は終わってるかな、と思って溜息をついた。

これでまだ続いてたらあの家でてってやる。稔の家にでも居候しようかな。

．．．．．こういう時に兄妹が欲しいと思うのよねー。一人でもあたしと同じ気持ちの人がいてくれればあの家で住むのも楽になるのに。一緒に住んでるから二人ですつと愚痴ってられるし。

結局人生そうは甘くないけどねー。

再び溜息をついて角を曲がった瞬間、

「彩那ちゃん？」

凜とした声に、あたしの友達にそんな声の人はいないと思いながら振り向くと、友達でなくともとても見慣れた姿が両手に大きな袋を持ちながらこっちに向かって微笑んでいた。

「美智子さん！」

齊木美智子さんは近所に住んでる二十六歳くらいのおねーさん。ある時、家に帰る途中で袋を四つくらい大変そうに運んでるのを見かけて助けるために声をかけたらすごく感謝されて、お茶をしてつとまで言われたんだよね。それからなんとなく気が合って、ここらへんで会う時は必ず声をかけてくれる。

「やっぱり彩那ちゃんだ。すごい偶然ねー。こんな所で何やってるの？」

「あたしは本屋に……。美智子さんこそ、どうしてこんなところにいるの？」

「見ての通り買い物。弟が食べ盛りだからねー、最近たくさん食べないといけないのよ」

苦笑を浮かべて美智子さんが両手を上げた。

美智子さんには結構歳の離れた弟さんがいて、土日は部活で殆ど家にいないらしいけど、帰って来た後に山のように食べるらしい。

「そういえば、彩那ちゃん今時間ある？ 家すぐそこだからお茶でもするために寄っててよ」

ね？ と可愛らしく小首を傾げる美智子さんに抗うことができたわけでもなく、あたしは美智子さんの右手にある袋を持って二人で美智子さん宅へよって行く。

美智子さんの家は二階建てで大きく、白い柵に囲まれた綺麗な家だ。

表札に斉木があるのを見て、そういえば・・・と思って問いかけてみた。

「美智子さんって、結婚しないの？」

「え？」

「そんなに美人なのになんで結婚してないのになって」

キョトンと目を丸めて、しばらくしてから美智子さんは盛大に笑い声をあげはじめた。

・・・意味が分からない。

「あはっ、・・・あは、はははっ、あははは、ははは、あははははははー!!」

「え、ちょ、美智子さん!？」

「う、あははっ、ごめん、ごめんっ！ 私、こう見えて結婚してるのよ。」

・・・・・・・・。。

「えええええ！？」

「絶対知ってると思ってた！ だって私の家に来るのはじめてじゃないし、棚の上にある写真とか見て勝手に推測したと思ってたの！ いつも家にいないのは出張中だからで、いやだ！ 絶対知ってると思ってた！」

「えええええええええ！？」

再び笑い転げる美智子さんを驚いた目で見つめた。

・・・・・・知らなかった。いや、言われてみれば棚の上に写真が置いてあったからそれを見ればよかったんだけど・・・・。。なんとなく勝手にいろいろ見るのも失礼な気がして見なかったんだっけ。

「人の写真をそんなジロジロ見てないよ！ もう！ 美智子さんいつまで笑ってんの！」

「ごめ、ごめんっ！」

ふふふふふ、といまだ笑いを零しながらも美智子さんが家の中に入って行って、あたしも少し眉間にしわを寄せながらも美智子さんの後を追った。前回来てから結構時間が経ってたけど、やっぱりクリーム色と白のまざった綺麗な部屋のままだった。

玄関から入ってすぐ横にある棚に写真があるのを見て、さっき言われたことも考えて写真を見た。確かに真っ白のウェディングドレスに身を包んで、イケメンと腕を組みながら階段を降りてる写真がある。

「．．．しかし美人は何を着ても似合うねー．．．。正直美智子さんほどの美人はあんまり見た事がない気がするしなー。」

「すごい．．．。美智子さんめっちゃ綺麗」

「やだ！褒めてもなにも出ないわよ？」

「いやいやほんと！このウェディングドレスだってすごく似合ってる！」

「あら、ありがとう　恥ずかしいわね、なんだか」

ほんのり頬を染めたまま美智子さんが袋を置いて笑いを零した。それからその袋の横にあたしも袋を置くと、じつと美智子さんがこちらを見たままだったので少し驚いて身を引いた。

「え、何？」

「いや、あんまりじっくり見た事なかったんだけど、彩那ちゃんってとっても美人ね」

「．．．．．はい？」

いや、真顔でそんなこと言われてもすごく困るんだけど。

「とても高校一年生には見えないわー。すごく美人。これは一目

では分からないけど、じっくり見て美人だって分かるタイプね。モテるでしょ？」

「モテ、はい！？ あたしが！？」

「そうよー！ 彩那ちゃん以外に誰がいるっていうの！ 髪の毛はすつごく綺麗でサラサラだし、目も丁度いい大きさだし、鼻と口もすつごく綺麗な形してるー」

「ちよっと美智子さん！ いきなり何なの！？」

あまりにも驚いて数歩下がっても美智子さんが追って来る。

「いやだー、どうせならうちの弟のお嫁さんにでもなつてよー。こんな綺麗な顔をずつと見てられるんだったら幸せだわー」

「見ず知らずの男と結婚させようとししないで！ 美智子さん！ ちよ、追いかけないでー！！」

身の危険を感じるくらいの勢いで美智子さんが追って来て、あたしが身体の前で止めるために両手を差し出した時だった。

「おい、姉貴。外にまで声が漏れてんぞ？」

男の子の声と共にドアからひよつこりと顔が除いて、その顔を見た瞬間に目の前に美智子さんが迫っていたことも忘れて愕然とした。相手も手に鞆を持ったまま目を見開いてあたしを見る。

「み、み、み、水無瀬えええええ！！！！？」
「．．．．有賀」

なんでこんな所にこいつがいるのよ！？　どんな腐れ縁！？　なんでどこにいたってこいつと関わりがあるのよ私は！！

水無瀬に指を突きつけたまま心の中で絶叫を繰り返すと、水無瀬はあたしと同じくらいに驚いた表情のまま、横で全てを傍観してる美智子さんに向いた。

やっぱり美智子さんも同じくらいに驚いた表情をしていることから、あたしが藤ヶ丘に通つてるとは知らなかったのか。ってか水無瀬と知り合いだったのは知らなかったってとこかな。

いやいや、そんなことより。

「なんで水無瀬がこんな所にいのよ!!」

「ここは俺の家だ」

「なんで!？」
まさかあんたが美智子さんの弟とかやめてよ!!!!」

「そのまさかだ」

「嘘でしょ！？ 苗字が違っじゃん！！」

「嘘じゃねえよ。姉貴は結婚してんだから苗字違うのは当たり前だろ。バカか」

「バカっていうな！！」

「というかお前、そこで何してやがる」

「やがるって言うな！！　あたしは美智子さんに誘われてお茶をしにきたの！！」

「はあ？ マジかよ」

「何その顔！ 何その『なんだこいつ超めんどくせえ』って顔！！」

「そう思ってたから仕方がねえだろ。マジなんでいんだよ、お前」
「くっそ．．っ！　ほんと失礼だなあんた！！」

「なんとも言えば？」

興味なくしたとしても言うように水無瀬は鞆を床に置いて、近くにあつた椅子に腰を降ろすと横にいる美智子さんを見た。あたしもイライラしながらも美智子さんを見ると、美智子さんは目を見開いてあたし達を交互に見つめた。

「・・・嫌だ、ちよつと愁也」

「んだよ」

「・・・あんた、猫かぶつてないじゃない」

美智子さんの言葉にあたしも水無瀬も固まる。

「・・・しまった、のか？ いや、美智子さんも水無瀬が猫かぶつてゐるって知ってたんだから問題はないはず。
ないよね？」

美智子さんの発言に水無瀬が深く溜息をついた。

「・・・バレたんだよ。四日くらい前に」

「うつそマジ!？」

「マジ」

「じゃああたしも猫かぶなくていいってこと!？」

「じゃねーの」

「・・・え？ いやいやちよつと待てよ。空耳か？ 今のはあた

しの空耳か？　ってか空耳であって欲しいんだけど。今、美智子さんが『あたしも猫かぶんなくていいってこと？』って聞いた様な気がするんだけど、気のせいであって。空耳であって。これ以上の猫かぶり発覚はマジで無理だから。

なんとなく危険を感じながらも美智子さんと視線を合わせると、美智子さんはニヤリと口角を上げた。

「そーかそーかー。愁也の猫かぶりバレてたんだ？」
「・・・・・・・・えーと・・・・・・・・」

キャラが急変したんだけど。やめてくれよ。実はあたしも猫かぶりだったんだー、とかいうカミングアウトはマジでやめてよ。

「愁也が猫かぶりのことで彩那ちゃんのこと信用してるってことはあたしも信用していいよね？」

「えっ・・・・・・・・」

「あたしも猫かぶりなんだよねー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なんだその爽やかな笑顔。なんだそのめっちゃくちゃ爽やかな笑顔。あたしが水無瀬の秘密を抱えているのにどれだけストレスを抱えているのかを知ってての発言ですか美智子さん！？

目を見開いて美智子さんに見入っていると、美智子さんはガハハ、と気品なか笑い声を上げた。

「いやあー！ 愁也の猫かぶり知ってる人なんて彩那ちゃんが三人目くらいじゃない？ これは楽しい！ しかも愁也のこと怖がってないケースとかはじめてじゃない！？ 何これ超楽しい！」

「……姉貴」

絞り出す様な声で水無瀬が美智子さんと呼んでも美智子さんは興奮状態のまま笑い続ける。先程の結婚を聞いた時の笑いとは違い、ぎる声に目を見開かずにはいられない。

……ってかなんだこの家族。猫かぶり家族かよ。まさかの。

「……なんで、美智子さんまで猫かぶってんの？」

あたしの問いかけに涙を吹きながら美智子さんが隣にいる水無瀬をチラリと見つめた。□元にはまだ笑みの名残がある。

「いやだつてね、愁也がこんな状態でしょ？」

「こんな状態？」

「完璧超人美青年を演じてるじゃない」

「……ああ……」

「そんな性格のいい奴が弟にいたあたしがいい奴じゃなかったらおかしいじゃない？ それに『弟さんはあんなにいい子なのに』とか近所のおばさんに言われたくないじゃん？」

「……」

まあ、確かに水無瀬の猫かぶりがあんななんだから家族もいい

人ばかりだと勝手に思い込んでただけど．．．．。思い返してみれば美智子さんのキャラはすごく優しくて美人の理想のお姉さんってタイプ。水無瀬は優しくてイケメンで頭も良い、運動神経が出来る理想のタイプ。

．．．．元タスベックがいいから出来る猫かぶりだよな。

．．．．ってかなんだこれ。なんであたしこんなことになってんのよ。なんでよりに寄ってあたし？　ほかの誰でもよかったのにあたし？　もうマジあり得ない。

水無瀬と美智子さんが会話を始めたところで（というか嫌そうな顔をする水無瀬に美智子さんが一方的に質問攻めしてるように見えるけど）家のチャイムが鳴り響いた。

．．．．こんな時間に誰が来るっていうのよ、と思って首を傾げると、目の前にいる二人は嫌そうな表情になったまま固まった。

．．．．え？

「．．．．夏菜^{かな}だな」

「．．．．そうだろうなー。迎えに行つてよ」

「嫌だ。姉貴が行け」

「はあ？　ざっけんな。あんたが行きなさい」

チツと舌打ちをして水無瀬が腰を上げた時に、チラリとあたしを見た。

「．．．有賀、攻撃されても俺は知らないからな」

「は？」

ちよ、そんな意味深の言葉をかけてそれ以上は何もなし!?？
な
んであんたはそう言葉が足りないのよ、水無瀬!!

．．．．とてつもなく嫌な予感がしてきた。

猫かぶり家族（後書き）

微妙な所で切ってごめんなさい。でもなんだか長くなりそうだったので、次の話でまとめてしまおうと思って・・・。

そんなに遅れなかったかな？ もう一つの小説の方も同時進行中で書いてたので、少し遅れてしまったのはすみません。というか基本的に不定期更新ですみません。

東北地震については外国住みである私もすぐに聞きました。日本に住んでいる家族や友人の無事は確認できていますが、放射線もあるし、地震や津波の影響でまだまだ非常に大変なので油断はできない状態です。

皆様のご家族や友人もご無事であることを祈っております。

ここまで読んでくれてありがとうございました。

嫉妬とライバル発言

夏菜、と言った水無瀬の言葉にあたしは密かに驚いた。いやだつて、なんか女の子を名前で呼ぶようなイメージがなかったから、普通にそれを口にするに対して驚くのは無理もないと言ってほしい。

彼女とかいても苗字ですつと呼ぶっていうイメージがあるし、苦手な人は『そいつ』とか『こいつ』とか『あいつ』とかなんとも無礼な口の聞き方をするとはかり思ってしまう。

「有賀、攻撃されても俺は知らないからな」

「は？」

と、目を点にするあたしを見ずに至極嫌そうに水無瀬が玄関に寄ってドアを開けた。あたしと美智子さんが覗き込むのと同時に、水無瀬がサツとドアの前から退いた。

瞬間、

「しゅうやああーっ！」

という叫び声と共に女の子が突撃してきた。

いや、マジで突撃という表現がぴったりと思ってしまうような勢いで家の中に入って来たのだ。驚いてあたしが目を丸めて、美智子さんは溜息をついた。恐らく女の子のすべきことが分かっている

横に退いた水無瀬も同じ様に溜息をつく。

女の子は家の中に転がり込むと、あたしと美智子さんを一瞥もせず水無瀬に向いた。

見た目だけで判断するとあたしや水無瀬と同年に見える。ミディアムロングの黒髪にはつちりとした茶目。雰囲気から既に明るさや元気が現れていて、ずいぶん可愛らしい女の子だ。

「避けるなんてひどすぎ！ もう聞いてよ愁也！ お兄ちゃんが、お兄ちゃんがあああ！」

「うるっせえよ。お前の突撃なんて受けたら即死だよ即死」

「ひど、酷い！ 人を突撃マシーンみたいに言わないでよ！」

「だってそうだろ？」

「違うよー！」

飛び上がって水無瀬に叫ぶ女の子を、水無瀬は軽くあしらってから再び台所へ進んで行く。

「……ってか水無瀬が猫かぶってないってことは……家族

？ いや、家族だったら一緒に住んでるだろうし……。いや、

従妹とかかもしれないな。水無瀬のこと名前で呼んでるし……。

マジで誰だこの子。

美智子さんは水無瀬の後ろ姿を微笑を浮かべてから追って行き、あたしは困惑したままだったけど美智子さんの後を追おうとした。が、

「……ちょっと」

後ろから聞こえた声に驚いて振り向くと、女の子はさっきの態度からは予想がつかないような顔つきであたしを睨みつけていた。

．．．え、何。あたしなんかした？

「．．．な、何ですか？」

聞いても返答はない。

女の子はすつと視線を横に滑らせると、隣に立っている美智子さんに視線を定めた。美智子さんが無言に見返してる。

．．．な、何なのこれ。ってか水無瀬もそんな所で立ってないでなんとか言えよ！

「．．．美智姉．．．。この子誰？　なんでここにいの？」

「友達。あたしがお茶に誘ったんだよ」

「友達って、高校生じゃん。はじめて見るんだけど」

「当然でしょ。そんな頻繁に連れて来てるわけじゃないんだから」

素っ気なく言い放つ美智子さんを見て、この子のことが好きじゃないってなんとなく感じた。女の子の方はその態度に対して得に何かを感じた様な素振りは見せず、ジロジロとあたしを見回してからふーん、と口にした。

．．．何なの？　この失礼な子は。

「夏菜。用があるんだったらとつとええよ。俺達だって暇じゃねえんだ」

プチ修羅場を目にしてながらも至つて冷淡に水無瀬が言うと、さつきまで座っていた椅子に再び腰を降ろした。美智子さんもベンチに立つてお茶を入れ始めて、あたしも流れでさつきまで座つてた椅子に座つた。

夏菜と呼ばれた女の子はズカズカと台所に入つて来ると水無瀬の態度に眉を寄せた。

「なんで愁也はそうやって冷たいのさ！ 遊びに来ただけなのに！」
「遊びに來ただけなら俺達に遊ぶつもりはないからさっさと返れ」
「ひどーい！！」

溜息混じりに言う水無瀬は本当になんというろくでなし。だけど夏菜ちゃんはその態度が普通なのか、深く傷ついた素振りを見せていない。それ所か当たり前のように水無瀬の隣の席に座つた。

瞬時に水無瀬の眉間のしわが寄る。

「・・・帰れって言つただろ」

「帰りたくないもーん。美智姉のお茶も飲んでいきたいし」

「てめえのお茶なんて淹れてねえよ」

「じゃあ愁也の貰うし」

「ざっけんな」

水無瀬の声色に、心底迷惑がっていることが分かる。別にあたしだって水無瀬のことをよく知ってるわけでもなんでもないけど、その態度に屈しない夏菜ちゃんすげえ。

っていうか、誰なのこの子。

「・・・あの」

声をかけると、全員があたしを見た。

「え、いや、あの、紹介は、してくれないわけ？」

あたしの発した言葉に水無瀬が眉をあげて、なぜか夏菜ちゃんに睨まれた。なんなのさつきから。

「ああ？ 紹介されてえのかよ」

「そういうわけじゃなくて！ いや、そうだけど！ 普通は紹介するでしょ？ 礼儀だよ礼儀！」

「面倒くせえなあ」

「そんなことくらいで面倒くさがらないでよ！」

はあ、と水無瀬が溜息をついた。

「こいつは市村夏菜^{いちむら}。近所に住んでる俺と姉貴の幼馴染だよ。んで、夏菜、こいつは同じクラスの有賀」

「あ、有賀彩那です。よろしく」

「……市村、夏菜です」

……え、なんでそんな不服そうな顔であたしを見るの？

ってか水無瀬と美智子さんの幼馴染みか。なるほど。そりゃあ猫かぶりはできないわけだ。名前と呼んでるのも納得できる。でも、夏菜ちゃんが水無瀬と美智子さんの猫かぶりを知ってても誰にもバレてないってことは、やっぱり口止めされてるのか？

……いや、本当にどうしてそんなに睨むの？

「……………」

じとーっ。

「……………」

じとーっ。

「……………」

じとーっ。

「何なの!？」

我慢が出来なくて叫んでも夏菜ちゃんの視線は揺らがない。

何なの!？ あたしこの子になんかしたの!？ 初対面でしょ!？

椅子から立ち上がって叫んぶあたし。微動だにしない夏菜ちゃん。それをつまらなさそうに見る水無瀬。そして笑いながら見ている美智子さん。いやいや、ここは助けようよ。

溜息と共に椅子から水無瀬が立ち上がったので、おっ、助っ人が入るかと思ってる矢先。

「着替えて来る。体育着暑いし」

「わかったー」

「え、ちょ、水無瀬!？」

助けるやゴラア!! あんた絶対あたしが夏菜ちゃんに睨まれてる理由分かってるだろうがああああ!!

と切実に視線で訴えても、水無瀬はあたしをチラリと見てからふんつと鼻を鳴らすと階段を登って行く。

は、鼻で、鼻で笑いやがったあああああああ!

「・・・あの野郎・・・っ!!」

と、水無瀬が二階に消えた瞬間、夏菜ちゃんは水無瀬のために置いてあった湯のみを掴むと、ダンツと勢い良くテーブルに置いた。驚いてあたしの肩が揺れた。
な、何？

「……………単刀直入に聞くけど、あんた愁也の何？」
「……………はい？」

え、いきなり何この子。
……………本当に目が点になったんだが。

「愁也の何って聞いてるんだけど」
「……………クラスメート、ですけど？」

なんだこの子。いきなり失礼になりやがった。しかも横で傍観してる美智子さんは何も言わないわけ？ マジ？ 一人で片付ける？
ってか攻撃ってこのことかよ水無瀬……………っ！！
無難に（っていうか実際そうだし）クラスメートと答えると、余計夏菜ちゃんの眉間のしわが寄る。

「ただのクラスメートの癖に、どうして愁也が猫かぶってないのよ」
「……………」

今『ただの』ってものすごく強調したよね。しかもクラスメートの『癖に』だあ？ クラスメートであつたら悪いのかおらあ。はっ、ヤバい。落ち着け彩那。キレてはいけない。

「．．．とある事情で、知っちゃったのよ」

「とある事情？ 何それ。なんで愁也が猫かぶってること知っててこうやってノコノコ遊びに来たのよ」

ピキッ。

「．．．別に水無瀬に会うために来たわけじゃないわ」

「嘘つかないでよ。それ意外にどうして来るの？ 愁也の猫かぶってない性格を知って惚れたんでしょ？」

「．．．．．．．．．．．．．．．．」

はい？

「どうしてそこに『惚れた』が出てくるのか聞いていいかな」

「猫かぶってる愁也の性格をしまって好きにならない子はいないもん。そついう奴だもん、愁也って。だけど猫かぶってない性格を知りながらもこうやって愁也と関わってるってことは惚れてるってことでしょ？」

「．．．．．全然違うんだけど」

「じゃあどうしているのよ！ 愁也のことが好きでもなんでもない

んだったらノコノコ遊びに来ないでよ！ 愁也はあんたみたいなウザイタイプなんて嫌いなんだから！」

ウザイって言いやがったぞこのアマ。

「あの、全然一切惚れてないから水無瀬のタイプとか関係なくない？」
「愁也にはこれ以上近づかないで！ 愁也にはあたしがいるから、あんたみたいなのは必要ないの！」
「……………」

はーん。

つまりなんだ。この子、あたしに嫉妬してるわけ？ 猫かぶつてない水無瀬があたしと普通に会話してるのを見て嫉妬したわけ？ つまりは水無瀬のことが好きってこと？ やば。こんな分かりやすい好意見た事ない。

ってことはあたしより鋭い水無瀬は当然夏菜ちゃんの好意には気づいてるってことか。美智子さんも知ってるっぽいな。攻撃つてのは夏菜ちゃんがあたしに嫉妬することを見越しての言葉か。ってか知ってるんだったら止めるや水無瀬。

……………なんで次から次へとこんな厄介ごとに絡まれるのよ、あたし。

「とにかく絶対に愁也のことは好きにならないで！」

「．．．いや、全然一切好きになる予定はないので」

「距離も置いて！ 愁也にはあたしがいるんだから、あんたはいらないの！」

「．．．．．」

「．．．この野郎．．．っ。人を道具みたいに言いやがって．．．
っ！」

「夏菜。いい加減にしなよ。彩那ちゃんは愁也には惚れてないって
言ってるじゃん」

溜息混じりに横から美智子さんの助け舟が入る。やっとかよ。もう
ちょーっと早く助けてくれても支障はなかったんだけど。

美智子さんの言葉に夏菜ちゃんはぶすつとしたけどそれ以上何か
を言う事はなかった。再び溜息を吐いて美智子さんはあたしの前に
湯のみを置くと、そこに緑茶を注いだ。

「．．．ありがとうございます」

沸々と沸き上がっていた怒りをなんとか落ち着かせて、あたしは
注がれたお茶を口にした。丁度いい苦さが口に広がって、一瞬にし
て幸せな気分。お茶って本当に極楽な気分になるよね。とくに緑茶
は大好き。マジ愛してる。

ふう、と満足そうに息を吐くと、美智子さんは微笑を浮かべて自

分にもお茶を注いだ。

「ごめんよー、彩那ちゃん。夏菜ってほんとに嫉妬深くて、今まで愁也と関わって来た女の子をみんな追っ払ってんだよねー」

「．．．．．はあ．．．．．」

「うるさいな！ 美智姉だって知ってるんだっいたら協力してよ！」

「嫌だね。あたしは愁也に嫁が出来るんだっいたら夏菜より彩那ちゃんがいい」

「．．．．．ちよつと美智子さん．．．．．」

「美智姉酷い！！」

「酷くないわよ。誰だって普通そう思うでしょ」

「酷い！！」

「．．．．．いや、夏菜ちゃんにめっちゃ悪印象を抱いたあたしでもその発言は酷い。美智子さんって、ほんと夏菜ちゃんが嫌いなのか．．．．．いや、でもそこまで言わなくてもよくない？」

夏菜ちゃんに冷たい表情をしながらも、あたしに顔を向けるとにつこりと美人お姉さんスマイルを向けていた。

「．．．．．なんという扱いの差。」

「それにしてもそろそろ遅くなって来てるから、お茶を飲んだら愁也に送らせるね」

「え、いや、いやいや。その必要はないよ美智子さん。あたし一人で帰れるし」

「何言ってるの！ 真っ昼間でも女の子のお客は絶対に送るのがうちのポリシー！」

「何そのポリシー!?」

その心遣いはとても嬉しいけど水無瀬になんて送らせてほしくないし！ 美智子さん絶対わざとだろ！

「ゴタゴタ言わねえでさっさとお茶飲めよ。送ってくから」

背後から聞こえて来た声に湯のみを持ったあたしが固まる。そのまま恐る恐る振り返ると、私服に着替えて水無瀬が面倒くさそうに階段を降りて来ている。くそっ、好きじゃないけどかっこいいなお前！

「ってかちよつと待てよ。『送ってくから』？ こいつ今『送ってくから』って言った？」

「え、ちよ、止めてよ！ 何企んでんの!? 借りでもつくらせてもつと口止めするつもり!?」

「……人の親切心に『何企んでんの?』はねえだろお前」

「だって水無瀬があたしを送る理由が分からない!」

「だから俺んちのポリシーだって姉貴が今言っただろーが」

「いやいやでもさ!」

「そっだよ!」

なおも信じようとしないうあたしの後ろでダンツと音がして、振り向くと夏菜ちゃんがテーブルに手を叩き付けて立ち上がっていた。

．．．地雷踏んでしまったか？

「なんで愁也がその子送るの！？一人で充分帰れるでしょ！」

必死の夏菜ちゃんの叫びにしかし水無瀬も美智子さんも完全無視。
．．．この姉弟厳しすぎるだろ．．．。

水無瀬はまるで夏菜ちゃんがないのようにズカズカと近寄って来ると、自分の湯のみを掴んだ。それから一気にそれを飲み干して、あたしに向く。
え。

「だからさっさと飲めよ。俺だって送って行きたいわけじゃねえし早く出て行ってもらいたいし心底面倒くさいけど女を一人で帰らせるわけにもいかねえだろ」
「．．．．．」

なんだこいつ。いいこと言ってるっばいけど腹立つぞ？
言われなくても帰ってやるわ！

手元にあった湯のみを口に運んで一気に飲み干すと、苦さで一瞬むせそうになった。でもこらえる。それからお茶を全部呑み込んで湯のみをダンッとテーブルに置くと、あたしは美智子さんと夏菜ちゃんに向いた。

「お茶ありがとう、美智子さん。会えてよかった。．．．夏菜ちゃんも」

「いいのいいのー。また今度遊びに来てね」

「．．．馴れ馴れしく名前呼ばないでよ」

「．．．．．」

夏菜ちゃんと仲良くなろうとは思わないほうがいいかも。

クルツと水無瀬に向き直ると水無瀬は既に玄関に向かっていた。あたしは美智子さんと夏菜ちゃんに小さく礼をしてからその後を追った。一度も振り返らずに進んで行く水無瀬の後を追ってあたしは斉木家を後にした。

．．．．．それにしてもおかしい気分だ。お互い反発してるのになんで水無瀬に送られてるの？ あたし。いや、斉木家／水無瀬家のポリシーだからなんだけど。それでもなんだか変な気分だ。

そういえば、こんな無言で歩いてても気まずいだけだし、夏菜ちゃんのことも訊くか。地雷踏みそうだけど。

「そういえばあんたさあ、夏菜ちゃんの気持ち知ってんでしょ？」

案の定睨まれた。

「知ってるよ」

「．．．やっぱり．．．」

「むしろあの態度で気づかれない方が難しいだろ」

「だよー。嫉妬心丸出したっただしねー」

「だから攻撃されるかもしれないねえって言っただろ」

「ってか知ってたんだったら先に言つてよ！」

「なんて言つてほしかったんだよ。『夏菜は嫉妬深いから気をつけろ』？ 『俺のことが好きだからお前と俺が話すのを見たら攻撃してくるかもしれないぞ』？ んなこと言つて、お前がはいそうですかって受け入れんのかよ」

「．．．．．．．．．．．」

ま、まあ確かにそんなこといきなり言われても多分あの状態のあたしだったら『は？』で終わっただろうな。．．．言われなくても『は？』で終わってたし。いや、それでもちよつとくらい注意してくれてもよかったような．．．。

再び沈黙に陥つて、今度は昨日言われたことを思い出して聞いてみた。

「そつえばあんたさ、昨日知つてたら怖いとか言つてたじゃん？ あれなんのこと？」

「．．．．．姉貴のことだよ」

「．．．？ なんで美智子さん？」

「姉貴が藤ヶ丘の子を時々お茶に誘つてこの前言つててさ、その人物の説明がお前みたいだったから気になったんだよ。案の定お前

「だっただけ」

「．．．．．そういうことか．．．．．」

「ああ。ん、じゃあ家についたから」

「へ？」

「．．．ほんとだ。いつの間にかついてる。ってかこいつなんであたしん家知ってんの？ あれ？ あたしが言ったのか？ ヤバい。なんかいろいろありすぎて記憶が追いつかない。」

「んじゃ、二度と姉貴のお茶の誘いには乗るなよ」

あたしが家に入る所で水無瀬が言い、驚いて振り向いた。既に水無瀬は歩き出していたからその後ろ姿に呼びかける。

「は！？　なんで！」

「なんで家にいる時までお前と関わってないといけねえんだよ」

「美智子さんが誘ってくれるんだから仕方がないでしょーが！」

「だからそれに乗るなっつつてんの。ただでさえ学校で会っのに家でも会いたくねえよ」

「あんたの都合で決めんなーっ！」

なんなのあの自分勝手な野郎は！　あたしがあいつの秘密握ってんの分かっててそんなこと言ってるわけ！？　っていうかここまでされても秘密ばらさないあたしって優しすぎない！？

はあ、と溜息をついてから家に入ると、台所の方で母さんとお父さんの声が聞こえる。さすがに喧嘩はしてないみたいだけど、声音だけで不機嫌なのが分かる。．．．あたしが出かけたことには気づいてたのかな？

ただいま、と呟いてから自分の部屋に戻ると、今日の出来事を思い返してみた。

．．．ま、何はともあれ、忠実に送ってくれた水無瀬のことは、少し見直したかな。

嫉妬とライバル発言（後書き）

土日までは多分更新はありません。ご了承ください。

ここまで読んでくれてありがとうございます。

好きになるのは勝手だけど、なぜこいつ？（前書き）

長くなった。

好きになるのは勝手だけど、なぜこいつ？

お母さんとお父さんがまた喧嘩してる。ってか最早日常茶飯事と化してるよね。本当に嫌になって来る。二人ともうちよつと大人になってくれればいいのに。原因は聞いてないし聞きたくないけど、どうせまたくだらないことだ。お父さんがお母さんの食べ物に文句を言った。お母さんがお父さんの態度に文句を言った。お母さんがいらついていた。お父さんがいらついていた。

どんな小さな事だつて二人に取つたらすぐに大喧嘩に発展するよ
うな問題だ。

あたしは土日家にいるのは嫌いだ。理由なんて、言うまでもない。
い。

「もしもし稔？」

携帯を耳に当てながら部屋のドアを開くと、お母さんとお父さんの声はまだ聞こえる。いい加減にしてよ、本当に。

稔の返答を待ちながら溜息をついてドアを閉めた。

『おつ、彩那！　よくぞ電話してくれた！』

「ってかあんたが電話しろって言ってたんじゃない」

『まあそいうことだよ。んで用件なんだけどさ、勉強会しない？』

．．．．．はい？

「え、ごめん。何？　今なんだかあり得ない単語が稔の口から聞こえた気がするんだけど」

『勉強会よ。勉強会。勉強すんの。学年第二位の有賀彩那から勉強が教わりたいのよー』

「．．．．．稔、酔ってんじゃないでしょーね」

『どっという意味だよ』

ツツコミが入りました。

だってそうでしょ。そう思うでしょ。稔から勉強会の誘い？　よりによって宇宙一の面倒くさがりやの立原稔たちはらからの誘い？　とてもじゃないけど信じられるわけがない。

『ぶつちやけ宿題写さして欲しいだけなんだけど』

「だよねー！　やっぱそうだね！　稔が勉強なんてしたいわけないもんねっ。そうだね、ああよかったー」

『．．．．．そこまで言うか？』

いやあもう心底驚いたよ。稔から勉強会の誘いを受けるなんて何が起こったのかと思っちゃった。ああほんとよかった。

『とにかく家が嫌ならすぐにでも来てよね。明日提出の数学とか手

付けてないから』

「・・・手付けてないってあんた、プリント五枚だよ？　しかも先週もらったやつじゃん」

『あんだねー。私が本当に机に座って真面目に数学のプリントやるとても思ってるわけ？』

「思っていないけどさ」

『即答かよ』

やがて稔との会話を終わらせてから、あたしは数学のプリントを溜息と共に鞆に詰めた。それから文房具、携帯、財布・・・は多分いらないだろうけど一応持つて行く。あとは・・・まあ特にないな。

普段持ち歩いてるものを適当に鞆に詰め込んでから部屋を出た。

台所の方を見ると二人の言い争いは終わったみたいだけど、閉まっているドアからもういやーな空気が漂って来る。

・・・一応行き先だけ教えとこうかな。

台所に近づいてそろつとドアを開けると、お母さんがキッチンに立っていてお父さんはソファに座ってテレビを見ていた。ってかお昼も食べて今一時なのになんでお母さんキッチンに立ってんの？

皿洗いか？

二人を一度見回してからお母さんの背中に呼びかける。

「お母さん」

「んー？」

振り向かずに皿を洗いながらお母さんが答えた。

「ちょっと稔んちに行って来るね」

「あら、どうして？」

「．．．稔曰く勉強会」

「稔ちゃんが勉強？ 珍しいこともあるもんねー」

「だよー。じゃあいつてきます」

「いつてらっしゃい」

最後にこちらに振り返ってから小さく笑ったのであたしも一応笑い返した。それからお父さんにもいつてきます、と言うと小さくだがいつてらっしゃいと返って来る。

．．．お互いに対してだけなんだよなあ、この二人が険悪になるのって。あたしに対しては大喧嘩したあとでも普通に接してくれるし。あたしに八つ当たりしたくないのか？ してるけどね、時々無意識に。

稔の玄関に近づいた瞬間にドアが勢い良く開いたから驚いて目を見開いた。目の前に立っていた人物も同じく驚いて茶目を見開いた。立っていたのは稔のお兄ちゃんの、立原拓さん。あたし達より一歳しか変わらないから普通にため口で話してるんだが、別にいいみたい。注意されたことも一度もないし。

漆黒の癖毛が普段よりも跳ねてる所を見ると、起きてから髪の手入れはしてないってことだね。まあ男がちまちまと鏡を見ながら髪を整えるのも気持ち悪いけど。

「彩那！　びくったー。何やってんの？」

「びくったのはこっちだよ。あたしは稔と勉強会」

予想通り拓が眉を上げた。

「稔が勉強だと？」

「うん」

「冗談だろ」

「冗談だよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ニツコリと笑ったまま拓と言葉を交わす。

あたしの言葉に首を振りながら笑うと、拓はポンポンとあたしの頭を叩いた。

「んじゃ、よろしく頼むよ。ちょっとくらいあいつに勉強する意思を叩き込んでくれ」

「無理だと思っけど頑張る」

「おうよ」

二カッと笑って拓が歩いて行き、その後ろ姿を少しだけ眺めてから稔の家に入る。あたしを待っていたかの様に（いや実際そうなんだけど）稔の部屋に行き着くと稔のテーブルの上には既に五枚の数学のプリントが並べてあった。もちろん白紙。

あたしが部屋に入るや否や稔はパアッと顔を輝かせてプリントを嬉しそうに差し出した。

．．．正直、この問題を学年五位の稔が出来ないとは思わなかったことは面倒くさいだけだったことか。

溜息と共に鞆を置いて、あたしは中からプリントを取り出した。ここまで来ると何を行っても稔は絶対に引き下らない。あたしの宿題を写すまでは絶対にね。

「はいはい。待つて。これで、五枚、っと」

「やった サンキュー彩那」

「へいへい」

無言になってプリントに答えを写して行く稔に溜息をついてから、あたしは自分の勉強を取り出した。勉強っていつても宿題はもう全部終わらしてるから予習なんだけど。

「ああ、そうだ」

二枚目のプリントを始めた所で稔が顔を上げずに声を上げたので、あたしは教科書から顔を上げた。二問目を終わらした所でビシッとあたしの顔にシャーペン突きつけて来る。

．．何？

「ズバリ答えてね」

「何をだし」

「水無瀬君と付き合ってるの？」

ボキッ、とシャーペンの先の芯が折れた。あまりの威力に芯が宙を舞って稔のプリントの上に落ちた。

あたしの反応を見た稔がパチパチと瞬きを繰り返す。

「え、図星？」

「んなわけねえだろーがっ！！！」

なんであたしが水無瀬と付き合わないといけないのよ！？　どこからそんな推察が出て来たわけ！？　信じられない！　しかもよりもよって稔！？　稔に聞かれたんだけどあたし！！　水無瀬に興味ないって知っててその発言をするのあんたは！？

わなわなと肩を震わせるあたしを見て、さすがに地雷を踏んだと思っ込んだ稔が慌てて取り繕った。

「い、いや！　別に私がそう思ってたわけじゃなく！」

「．．じゃあ誰？」

「え、えと、み、美里」

.....。

.....なんですと？

予想外の人物の名前に怒りがしずまっっていく。

美里ちゃん？　なんでそこで美里ちゃんの名前が出てくるのかがさっぱり分からないんだけど、稔の様子からして本当なんだろうなえ、でもなんで美里ちゃん？

「ちよつと待つてよ。なんでそこで美里ちゃんの名前が出てくんの？」

「.....付き合ってないのね？」

「んなわけないっていったらろうが」

「いや、だから確認だつて！　いや、そのね？　彩那と水無瀬君が付き合ってなければ言っただけでいいって言われたんだけど、美里って水無瀬君のこと好きなんだよ」

沈黙。

「.....なるほど」

そういうことね。所謂『嫉妬』ってところか。

いやでも待てよ？　あたしって別に今まで通りに水無瀬と過ごしてるはずだし、あたしと水無瀬が付き合ってるかもしれないなんていう疑惑は、ずいぶん前からあったってこと？

でもあたしが知ってる限りでは、とてもじゃないけど付き合っているカップルのような振る舞いは一切したことがないはず……。何がどうなってそんな結論にたどり着いたんだろう。

「……なるほどねえ」

再び呟くと稔がそうなんだよ、と頷いた。

「いや、でも、あたしと水無瀬、君が付き合ってるなんて、普通に考えてあり得くない？　今までそんな素振りしたことはないはずなんだけど」

ヤバイ。危うく水無瀬を呼び捨てにする所だった。

あたしの質問に稔は少し困ったような表情を浮かべた。

「いやあね？　私もそう思ったから、何がどうなったら彩那と水無瀬君が付き合うことになるの？　って聞いたんだよ」

グッジョブ稔。

「そしたら、金曜日？　だったのかな。駅の前で彩那と水無瀬君が話してるのを見たって言ってたわけよ」

．．．．．駅の、前．．．。あつ。あつ！ あれか！ 稔と別れた後に待ち伏せされていた時のことか！

うわー．．．。よりによってあんなタイミングを見られたのか．．．。つか水無瀬が美里ちゃんに気がつかなかったってことは、そこまであたしが美智子さんと知り合いだったら怖いって思ってたってこと？

．．．．．地味にム力つくな。

「ああ．．．。確かに駅の前でバツタリと会ったから少し話をしたけど．．．。どうしてそれで付き合ってるって思うわけ？」

「最初はそう思わなかったらしいのよ。でも、昨日彩那に会った後に、商店街に行ったららしいの。そしたら彩那が水無瀬君と一緒にいるのを見たって言ってたから、それで疑問が浮かんだらしいよ」
「．．．．．」

しくった。まさか水無瀬に送られている所を誰かに見られるとは．．．。ヤバい。バカ彩那。いくら午後でこの周辺にうちの学校の子達があんまり住んでないからって、なんで美里ちゃんのこととは思いつかばなかったんだろう．．．。すぐ近所なのに．．．。膝についてガクツとうなだれたい気分だ。

「で？ そうなの？」

「．．．．．まあ、そうなんだけど」

「マジで！？ じゃあやつぱ付き合ってたの！？」

「違ってたって言うてるでしょ！！ 何回言えば分かってくれるんだよ！！」

「だってそれってつまりどっかから送って貰ってたってことでしょ！？それで付き合っていないと思わせる方が無理だよ！親友としてシヨックだよ！そんなことが起こってたのに知らなかったなんて！」

「いい加減にしないとその口縫い付けるよ稔！」

息を切らして怒鳴りつけると稔はケラケラと愉快そうに笑い声を上げた。

こいつ絶対いつか思い知らせてやる。

「冗談だつて！でもなんで一緒にいたのさ」

「あのね？これには深いわけがあつて、つてか絶対美里ちゃんには言わないでよ」

「分かつてるつて！」

「・・・水無瀬君つてお姉ちゃんがいるんだけど、あたしとそのお姉ちゃんが結構仲いいわけ。それで昨日お茶を飲みに行ったらバツタリ水無瀬君と会つてね？午後まで居座つてたから水無瀬君が送ってくれたの」

ずいぶんと省いちゃったけどいいよね。夏菜ちゃんのこととか夏菜ちゃんのこととか夏菜ちゃんのこととか。

と、あたしの言葉に稔は頬杖をつきながらふーん、と口にした。

「なーんだ。つまんないの。もっと深い面白い理由があるのかと思つた」

「面白い理由があつたらよかったってことでしょ？とにかく早く

プリント終わらしてよ。あんたのせいで予習が進まない」

「へいへい。すみませんねえガリ勉さん」

「本当にその口縫い付けるよ？」

「あ、そういえばさ」

華麗に無視したこのやろつ。

「水無瀬君のことが好きな子って多いから、気をつけなよ？」

．．．．．注意されなくても分かっているつもりだよ。

はあ、とあたしは深く溜息をついた。

人間というものは、何かに気づき始めると、どんな時でもそのことが目に入ってしまうものだ。たとえば、カーテンについた模様とか、友達の背中の中のシャツにくっついてる糸とか、あたしの場合は友達の高い人へ向ける視線とか。

美里ちゃんが水無瀬のことを好きなのは一目瞭然だった。むしろよく今まで気づかなかったな、と自分に言ってやりたいくらいだ。理科が嫌いな美里ちゃんが浮き足立って理科室に移動して、実験中

も一生懸命水無瀬に話しかけて、話しかけると目が少しだけ輝いて、頬がほんのりと赤に染まる。

可愛いなもー。いや、本当にどうして今まで気がつかなかったんだろっ、あたし。

美里ちゃんと仲はいいけど、実際好きな人の話とかしたことはほとんどない。だから好きな人がいたとしても見当もついてなかったし、美里ちゃんもあたしに対しては同じだ。だからこそ、あたしが水無瀬と付き合ってるかもしれないと思った時に、あたしに聞くことができなかったのだ。

．．．複雑だなあ、乙女心。

付き合ってはいないものの、っていうかお互いに対して好印象を抱いてすらいないけど、美里ちゃんがいる前で水無瀬と仲良く話すのもなんだか気が引けて、出来るだけ水無瀬と会話をしないようにした。あたしの妙な態度の意味は理解していたのかしていなかったのかはよく分からなかったけど水無瀬の方もあたしと会話をしようとはしていなかった。

チラリと美里ちゃんを何回か盗み見るとそれはもう至極嬉しそうな表情だった。

．．．いや、マジでどうして今まで気がつかなかった？ あたし．．．。

「有賀、これよろしく」

隣から呼ばれてはっと右に顔を向けると、宮谷がスタンドを持ってあたしを見る。

え、これよろしくって、どういことですか宮谷君。

「．．．え、何が？」

「調整して」

「なんでスタンドが二つあんの？」

「こっちの方が早く進むかと思って」

「いや、そりゃそうだけど、同じスタンドでやった方が長さとかいちいち変えなくていいからこのままでよくない？」

「．．．そうかあ？」

「すぐ終わらせたいからって楽しようとすんなっ」

手にあつた紙を丸めてペイツと宮谷の頭を叩くと、チツ、わぁあつたよ、と言いながらスタンドを戻しに行く。その後ろ姿を頭を振りながら見送る。宮谷って、変な所で抜けてるよね。

美里ちゃんと水無瀬が続けている実験に視線を戻すと、美里ちゃんが一生懸命メモリを記録していたけど、水無瀬がじつとこっちを見ていた。驚いて目を見開くと、呆れような表情をしてから実験に視線を戻す。

．．．なんだ今の失礼すぎる視線は．．．。

そっいえば、水無瀬が誰に『絶対に家に入れんなよ！』って言う

てたかは分かったけど、その絶対に家に入れてほしくない人って、誰だ？ 夏菜ちゃんではないと思うし、美智子さんに言ってたんだから二人の知り合いってことだし．．．。

わからん。

現在掃除の時間。ゴミ箱を裏庭まで運んでいてそんなことを考えていると、噂をすればなんとやら。

同じくゴミ捨て当番だったらしい水無瀬とバツタリ出くわした。
・
．．．なんでよりによって周りに人がいない時に会つかね、あたし
達は。

なんだこの沈黙。

「……あの、退いてくれない？」

あんたのせいで巨大ゴミ箱に近づけないんだけど。
てつきりそのまま居座ると思ってたのに以外と素直に退いたの
で少し驚いてからあたしの持つてるゴミ箱を巨大ゴミ箱の中に入れた。
だけどその間もずっと背中に視線を感じていたからいらついで勢い
良く振り向いた。

「何？」

「別に」

「・・・・・・・・・・」

コロス。こいつ絶対にいつか殺してやる。

「なんか用があるんだつたらさつさと？」

「お前さ、なんで急に狭川に気遣ってるわけ？」

「・・・・・・・・・・」

やっぱりあたしの行動は完璧バレてましたか。そうだねえ。当たり前といえば当たり前だねえ。認めたくはないけどこいつって洞察力はすごいもん。

何の事？　つてとぼけても無理だと分かってたから、溜息混じりに捨て終わったゴミ箱を抱えた。

「・・・別に。変な勘違いされてたからそれをちゃんと証明しておこうと思って」

「変な勘違い？」

「駅前で話をしていた時と、土曜日にあんたがあたしを送ってる所、見られたの」

「・・・・・・・・ああ・・・・・」

納得した声出したぞこいつ。

「・・・え、ちょ、まさか美里ちゃんがいるの知ってて・・・?」
「誰かがいるのに気づかないほど落ちぶれてねえよ」

・・・それはあたしが落ちぶれてるってことかよオラ。

え。いや、ちょっと待ってよ。美里ちゃんがいるのを知った上で
あたしと話をしたりあたしを送ったりしたってこと?

「え、でもあんた美里ちゃんの気持ち知らないわけじゃないでしょ
ーよ!」

「まあな」

やっぱり・・・! あたしが気づいて(まあ稔に言われて気づい
ただけ)水無瀬が気づかないはずがなかった・・・!

「知っててあたしと話したり送ったりしたわけ!？」

「当たり前だろ。たかが一人の勘違いが怖くて行動なんてできるか
よっての」

「そういうことじゃないじゃん! 美里ちゃんがそのせいでどれだ
け悩んだのか知らないあんたじゃないでしょ!」

「知ったこっちゃねえつつてんだよ。そもそも気持ちに答える気
はさらさらないんだからあいつが勘違いしたってどうもしねえよ」
「・・・っ!」

．．．．．なんですって．．．？

．．．．．知ったこっちゃねえよって言った？　こいつ。勘違いしたってどうもしねえよって言った？　こいつ。

．．．．．あんなに、あんなに水無瀬のことを好いてる美里ちゃんに、勘違いしたってどうもしねえ、って言った？

「ふっざけんな！！　あんなそんなのが許されると思ってんの！！？」

「誰の許しがいるってんだよ！」

あたしが爆発すると、水無瀬も叫び返したから一瞬言葉が詰まってしまった。

「美里ちゃんがあなたのこと好きなの知ってて、あたし達が一緒にいるのを見たらどう思うくらい知ってて、それでどうもしねえ！？　やめてよ！　いい加減にしてよ！　あたしのことを踏みにじった上に美里ちゃんの気持ちまで踏みにじるのは止めてよ！」

「じゃあどうして欲しいっつーんだよ！　俺に告白しろっつか！？　俺に狭川と付き合えっつか！？　はじめから希望させずに興味がねえって示した方が、あいつも諦めがつくだろ！」

「優しさのつもり！？　それで優しくしてるつもりなの！？　だつたらやめてよ！　美里ちゃんね、どれだけ諦めた方がいいって示されたって諦めたりはしない！　そんなの、そんなの分かってるでしょ！」

「分かってるからやってんだ！　お前の問題でもねえくせに口出す

んじゃねえよ！」

「美里ちゃんはおたしの友達なの！！　あたしのせいで悩んだんだったら、あたしが美里ちゃんのために怒るのは当たり前でしょ！？」
「てめえには関係ねえんだよ！」

吐き捨ててゴミ箱を片手に抱えたまま水無瀬が立ち去ろうとする。
だけどそれ以上進む前に一歩踏み出して、あたしは水無瀬の腕を掴んだ。

「話はまだ終わってない・・・！」

「俺のは終わったんだよ」

「あたしのは終わってないって言うてんの！」

「お前しつこい！　これ以上話すことはないだろうっ」

再び水無瀬がいらだちを露にしたけど、これだけはさがるわけにはいかない。わざと美里ちゃんを傷つけて、自覚してくせに、飄々としやがって！

「あるから引き止めて？」

ガツとものすごい勢いで腕を掴まれたと思うと、ダンツと壁に押し付けられた。ゴミ箱が音を立てて地面に転がり落ちたけど、あたしも水無瀬も微動だにしない。

はっ、と驚いてあたしが息を吸って、力を込めたままあたしの腕を壁に押し付けた水無瀬はゆっくりと言葉を紡いだ。

「お前には関係ないから引つ込んでろって言ってんだよ。話はもう終わったから黙ってる」

「．．．っ、どうして！ どうしてそんなに冷たくいられるのよ！」

「．．．．．どうでもいいだろ。もう黙れよ」

「どうでもよくない！ 美里ちゃんは？っ！」

柔らかい何かが唇に当たった。壁に押し付けられたまま、一瞬間の中が真っ白になったけど、水無瀬の唇とあたしの唇が当たっているのを自覚してあたしは大きく目を見開いてからすぐに腕に力を込めた。だけど、力を込めた瞬間に水無瀬がより強くあたしを押さえつけて、キスも激しさを増した。

目を見開いたまま水無瀬を見ると、そろっと水無瀬の瞼が上がった。あたしが見つめていることに対して驚きは一切みせず、止めてほしいって訴えかけようとして開けた口に、濡れた感触が入って来て身体が強ばった。

な、にを、するの、こいつ！ 好きでもない女とそんなにキスがしたいのかよ！！！！

「．．．ん、ちよっ、んっ、くっ．．．！ やめっ、て！」

押さえられていない右手で水無瀬の胸板を押してもびくともしない。それどころか、抵抗をしようとするほどキスが激しくなっていくだけだ。

水無瀬の舌があたしの舌を絡めとろうとした瞬間に水無瀬の舌をガツと噛んだ。瞬時に水無瀬の動きが止まって、視線を外さずにい

た瞳が少し開いてから舌が抜けて行つた。腕にこめられた力も弱くなつたのであたしは瞬時に身を引いた。

荒く息を繰り返しながらも口の中にかすかに血の味がして、それだけ強く嚙んだのかと思つて水無瀬を見上げた。予想通り痛み顔に顔を歪めながら水無瀬は口を押さえて、座り込んでしまったあたしを睨みつけた。

睨みつけたいのはこっちだよ．．．．っ！！

「何、すんのよっ！！！」

「．．．黙つてろつて言つたのに黙らねえからだ」

じつと冷たい目で水無瀬を睨んでいるあたしを見てから、水無瀬は無言で立ち去つていった。

今度は、引き止めなかった。

好きになるのは勝手だけど、なぜこいつ？（後書き）

遅れてしまつてすみませんorz

一応毎日ボチボチ書いてたんですが、なにせインターネットに接続できる時間があまりないものですから・・・。

遅れてしまつてすみませんでしたorz

ここまで読んでくれてありがとうございます><

険悪な雰囲気ってどういふこと？

泣きたい気分だ。というよりも泣きながら怒りたい気分だ。大声を張り上げて涙を流しながら意味分かんない事を口走って爆発したい気分だ。

結論：気分は最悪。

それもこれも全て水無瀬のせいだ。言うまでもないかもしれないけど水無瀬のせいだ。というか元々あたしがこんなにも精神不安定になりはじめたのも水無瀬のせいなんだよ。

しかも一回にとどまらず二回も、き、キ・・・K I・・・

だめだ。言ってしまったらまた爆発する気がする。

落ち着いて深呼吸しよう。

すー、
はー。
すー、
はー。
すー

「落ちて着けるかボケええええええ！」

「あげええ！？」

ちやぶ台をひっくり返す勢いで立ち上がると、稔が驚いて奇声をあげた。

現在午後五時。学校の校舎。つてか教室。陸上部である稔のことを待つために教室に居座っていた所、何かを取りに戻つて来たらし

い捻にあたしの独り言」（ってか一人叫び）を聞かれた。
机の中の紙切れを取り出しながら捻は目を丸めてあたしを見ていた。

コホンッ、と咳払いをしてから書いていたノートに視線を戻した。
じつと捻があたしを見つめている。

「．．．．彩那さあ．．．」

「え？」

「なんだか最近、ぶっ壊れること多くなってる？」

「．．．．．」

え、何その超失礼な発言。確かに最近壊れてるかもしれないけど
だからってそんな単刀直入に聞くか？　なんていうの。プライバシ
ーってというか気遣いって一切ないよね。

しかもあたしにたいしてだけ。そういう性格だから分かんといえ
ば分かるけど。

「ストレスが溜まってんの」

「．．．何からの？」

「．．．．んー．．．．人生？」

「おもっ！！」

人生っていうか、なんていうの？　精神不安定〃人生全て嫌だ。
みたいな感じになんねえ？

とブツブツ言うと、捻が眉を上げた。

「．．．あんた相当病んでるね」

「そうだね。そうかもねー」

「．．．．．」

「稔は部活戻っていいよ。あたしはここで勉強してるから」

「．．．あのさ、」

「ん？」

「飛び降り自殺とかしないでね」

「約束はできない」

「おいしい！！」

「冗談。そんなことしないから」

「今の声音で冗談とか言われてもおもしろくないから！！」

そこまで病んでないっての。そもそも病んでないし。ってか病んでるように見えるなら多分この短期間だけだろうし。

ってかこんな状態でも理由を聞いてこない稔には心底感謝する。人には人のプライバシーがあるってちゃんと気遣いできる子だからいいんだよね。いや、気遣いとはまた全然違う部類かな。どっちかっていうと人の問題に首突っ込んで面倒ごとになったら嫌だからって理由だね。

稔すぎる理由で逆に安心するよ。

カリカリとノートにシャーペンを滑らせると、稔が心配げにあたしを見つめてから教室を後にする。さっきの紙切れは多分記録を書き込むための紙だからそろそろ部活が終わるってことかな。

ふう、と勉強に一段落つけてから、気分転換に校庭に視線を移した。今の時間帯で部活をやっているのは陸上部だけだ。ああ見えて

も稔は三番目に足の速い女子で、陸上部の中ではまだ二年生なのにと大いに期待されている。

かっこいいねえ。

そこでふと小さく歓声が上がったのを聞いて、その方向に視線を移した。

それからひくつと口元が引きつった。

陸上部の部員達に背中を叩かれて、丁度走り終わっていた水無瀬は荒く息をしながらも爽やかな笑顔を浮かべていた。

ああその爽やかな笑顔をぶん殴ってやりたい。

．．．．．そういえば水無瀬は陸上部のエースだったんだっけ。二年生のくせに。

嫌いであるあたしでもかっこいいと認めるあの顔に超頭もいい。

おまけに運動神経も抜群ってどういうことなの。神様、不公平すぎるでしょさすがに。

そのままじとーつと水無瀬の方向に視線を向けていると、全員から離れた水無瀬がふとこちらを見上げた。まるであたしがそこにいることを分かっていたかのようなのだ。

そこで窓から顔を覗かせているあたしを見つけて、見事に視線が合った。綺麗な瞳と目が合っと思わずうつと息が詰まった。水無瀬も目を見開いたが、あたしから目を逸らしはしなかった。まるで水無瀬もあたしと同じ様に息を詰まらせているかのように見えた。

ってまあそんなことはないと思うけど。そもそもなぜあたしを見て目を詰まらせるのかも分からんし。

しばらくそのまま見つめ合ってから先程のことを思い出してあたしはふいつと稔の方に視線を滑らせた。水無瀬のことを見ないようにはしていたけれど、まだ見られている気がしてどうも落ち着かない

気分だった。

あたしと水無瀬の間が険悪な雰囲気になっっているのに一番に気づいたのは稔だった。さすがといえさすがかな。ってか昨日の掃除から帰って来た時からあたしの気分が最悪だったのには気づいてるっぽかったけど。

日頃から特に水無瀬と良く話してるわけでも仲がいいわけでもないのにあたし達の雰囲気がよくないのに気づけたのはやっぱりさすがだ。以外と洞察力に優れている稔にはいつもながらも賞賛するよ。

「何かあったの？」

水無瀬と一切話さなくなってから三日が過ぎた頃、稔が聞いてきた。あたし自身もそろそろ来るだろうなと構えてはいたからとくに驚いたりはしなかったけど、それでも気づけた稔には驚いた。

「何か、って何が？」

「いやあ、私の気のせいかもしれないんだけど、なんだかあんと水無瀬君の間に嫌な雰囲気が漂ってる気がするんだよね。違う？」
「．．．．．いや、別に．．．．．そういうわけでは．．．」

理由自体は多分聞いてこないとは思っただけど、だからと言ってはつきり告げるのもなんとなく気が引けた。

とはいったものの口籠ってしまったあたしに対して稔が眉を上げた。けどあたしの気持ちを察してか稔はふーん、と興味無さげに呟いた。

こういう時に親友が稔でよかったと思う。洞察力がいつていうのもちゃんと分かってくれるからいいし。これが美里ちゃんとかだったら困る。なぜかって？ 美里ちゃんは絶対に理由を知りたがるだろうから。水無瀬のことが好きとか嫌いとかは抜きにして、いろいろ知りたい子なんだよね。

「でも嫌な雰囲気って．．．何がどうなってその結論にたどり着いたのよ」

「え？ いや、なんか最近まで二人とも仲よさげな感じだったんだけど？」

「．．．仲よさげ？」

「あ、いや！ だからその、お互いの領域に干渉しないけど、干渉して欲しくないことをお互い分かってる様な？」

「．．．．．」

「なんていうの。理解しあってるみたいなの？」

「．．．．．」

「そ、それが最近なんていうか干渉できるけど絶対しねえもう関わらねえみたいな雰囲気にな、ってる、気が．．．」

無言になつてただ稔を見つめるあたしに稔の聲がだんだん小さくなつて行く。

いや、あたしとしてはその観察力にびっくりだよ。あんた本当はあたしと水無瀬の間に何があったのかとか密かに知つてたりするんじゃないでしようね。

何も言わないあたしに稔は眉を上げたまましばらく見つめてたけど、あたしが何かをいう気配がないからか稔は諦めた様な溜息をついてから席についた。

ふと顔を上げると、丁度教室に入つて来た水無瀬と見事に視線が合つて瞬時に顔をしかめた。そんなあたしの表情を水無瀬はバカにしたような視線を向けてからふんつ、と鼻で笑つた。

．．．．あいつ、人の事をバカにする度に鼻で笑いやがるよな。

ふんつ、とあたしがそっぽを向く。でも水無瀬の席はあたしの斜め前だから嫌でも見えてしまうんだけど。わざとでもいうように音を立てて席につく水無瀬を睨みつけていると、隣にいる稔の視線があたしに注いでいるのが分かつた。

そういえば、あまり考えたこともなかつたけど、この三日間あたしが水無瀬と徹底的に話さないようにしてるのは明らかだけど、水無瀬の方も何かとあたしと接触を図つて来る様子は一切ない。

それはあたしの心中を察しているからなのか、単にあいつもあたしとは話をしたくないからなのかはよく分からなかつたけど、とにかくあの一件以来水無瀬とあたしがお互いから声をかけようとしたこともなければ、そもそも眼中に入れないようにつとめていた。元々よく話す仲でもなかつたから違和感がする人は稔以外にはいない

ようだったし、一緒のクラスもそこまで同じというわけでもない。
ただ問題なのは、次の時間が理科、物理ということだ。

昼食を食べ終わって一足早く理科室に移動したあたしと稔は、あたし達の他に理科室にいる人達を見回していた。やはり美里ちゃんは既に班の席に座っていて、あたしと稔を見つけるとニツコリと笑った。

あたしがニツコリと笑い返すと、稔も小さく笑ってからあたしの裾を掴んだ。

「え、ちょ、何よ」

「．．．あんと水無瀬君の間の空気がいやーなのになってること、美里、気づいてないの？」

「．．．んー。気づいてないっぽい。大体、同じ班だからってよく話してるわけでもないから、気づかない人は気づかないんじゃないの？ 稔は鋭すぎるんだよ」

「まあそこは否定しないけどさー」

「しないのかよ」

「あんたらの間で何が起こったかなんて知らないけど、美里の前では気をつけなよ？ 可愛い顔してすっげー嫉妬深いんだから」

「．．．分かってるけど。ってか気をつけるってたって何も話してないじゃん」

「そうじゃなくてさあ。あんと水無瀬君の間に何か秘密みたいなものがあるって気づかれたら、もう終わりだべ？ 何の事か知るまで絶っつっつっつっつ 対に詮索し続けるから」

「．．．．．．．．．．．．．．．．」

まあ、あたしだって美里ちゃんの嫉妬心に気づいてないわけじゃ

ない。これまでだってあたしと水無瀬が二人で実験の話をしていると、必ず美里ちゃんがなになにー？ という感じで割り込んで来る。その割り込みがあまりにも自然だったから今まで気づいてなかったんだけど、稔に言われてからは、その行動は美里ちゃんがあたし達の邪魔をするためのものだというのがに気づいた。

稔の言葉に肝に銘じておくよ、と言い残すと、人が集まりはじめた理科室の中でそれぞれ席についた。最後に稔が心配そうにあたしに視線を投げたけど、あたしは美里ちゃんという秘密探知機をなんとか回避しないといけない任務が待っているから構ってはいられない。

あたしが席につくや否や美里ちゃんの顔が僅かに輝いて、理科室のドアが開いて水無瀬が入って来た。それからすぐに視線があたし達の班に向いて、美里ちゃんと宮谷を撫でてからあたしに止まった。すぐにあたしが視線をはずして、水無瀬はあたしの前に腰を降ろした。あたし達の班はテーブルを挟んで二列に人が並んでるから、同じ班の人は向かい合っているような形式になる。

「今日もまた同じ実験？」

「ううん。今日からは変わるって」

「マジで？ 何に？」

「ビー玉の速度を測るとかなんとか・・・」

「・・・ああ・・・」

水無瀬と会話が出来て嬉しそうな美里ちゃんが可愛いったらありやしない。好きな人と話が出来てそんなにも嬉しいものかねえ・・・。

水瀬がなんとなく納得したような声を出してから黒板に視線を向けたので、あたし達も視線を向けると確かに黒板にはビー玉の速度と書かれてある。ってかそれだけかよ。

ザワザワと話をしているとチャイムの音が鳴り響き、先生も教室の中に入って来たので徐々に音が小さくなって行く。先生が教卓に立って静かになったあたし達を見回してから黒板をバンバンと叩いた。その指は『ビー玉』の下をなぞった。

「これ読めるひとー」

しーん。

「誰も読めないのかよっ」

「はいはい先生！ 俺読める！」

生徒達の中でムードメーカーの宮谷君が手を挙げた。最早お約束の展開としか言えないよね。

「はい宮谷君」

「ビーぎよく！」

「非常に惜しい！」

「先生さつさと説明してー」

「よしきた。この読み方はビーだまだ」

「読み方なんて聞いてねえよ」

「酷いよ遠田君！ それが先生への扱いですか！」

「そんな馬鹿げたことやってる暇があるんなら今日やる実験の説明してくれよ！」

「だからこの読み方から勉強しないといけないでしょ!？」

「マジでいい加減にしろよ先生！」

んー。相変わらず先生の扱いが酷い。まあ先生もああいう性格だから分かるっちゃ分かるんだけど。みんながケラケラ笑いながらあたしも小さく微笑を零すと、目の前にいる水無瀬も呆れた様に笑ったのが見えた。

なんであんたはあたしから見える位置にいつもいるんだろうね、まったく。

遠田から罵倒された先生はなんとなく寂しそうにしながらも説明を始めた。

「えー、実験は至って簡単でーす。式をあげるからそこに長さやら早さやらを当てはめて解いてねー」

「何を」

「ビー玉の速度」

「どこのっ」

「えー？ 一定の傾きのある板の上の速度測定器の間の瞬間に決まってるじゃん」

「いつ決まったの!？」

「今」

「今かよ！」

もしかしたら明美^{あけみ}先生とうちのクラスで漫才が繰り広げられるか

もしれないと思って来たよ、あたし。

「何回か説明したことがあるから実験道具しかあげないぞー」

「いつ説明したの!？」

「何週間か前に、こんなのやるよー。って言ったじゃない!」

「それだけでやれていうの!？」

「当然よー」

「先生の鬼!!」

確かにすっごい鬼だよ、先生。あたしはいつも予習してるから何をやるかは大体見当がつくし、式をくれたら格段に簡単になるからそれはそれでありがたいんだけど……。実験道具だけって、説明は何もなし？

みんなが抗議の声をあげたけど、先生はそれを完全に無視をする。と準備室に入って小道具をいろいろ持ち出して来た。速度測定器はあたし達の後ろにある棚に閉まってあるから、素早く一番新しいのを二つ掴んでから、ブーブー言いながらも実験道具を集めに行くみんなの中に交じった。

実験道具を全部集めた結果、目の前にあったのは、台、板、ビュ、速度測定器が二つ、定規。以上五つ。

「……これだけで全員に実験を求めるのは酷すぎるでしょーよ、先生。」

「……有賀さん」

その声に眉間にしわが寄ったけど、それをなくしてから顔をあげると、水無瀬が板を台に立てかけてからあたしを見た。

「この実験の仕方、分かるよね？」

「．．．一応予習はしてある」

「さすが」

ふわっ、と優しい水無瀬君の笑顔を浮かべたからつられて笑顔を浮かべる所だったけど寸での所で押し留まる。

「ってか、分かる『よね？』って聞いたってことは、水無瀬も知ってるってことだよな。当然。ってか知ってなかったら困る。あたしだけでできる自信はない。」

「ってか知ってなかったらキレるよ？」

「水無瀬君も当然予習してあるよね？」

「先生が説明した時にちゃんと聞いてたからね」

「それこそさすが」

お互いに笑顔を振りまいて話をしていると（実際は絶対に心の中で毒舌な会話をしていたけど）、まったくなんのことも分かっていない美里ちゃんと宮谷君が明らかにほっとしたような表情をした。二人ともまったく分かってないって顔だね今の。

「ああもつこういう時に水無瀬君と彩那と同じ班でよかったって思うよねー」

「思う思う。俺と狭川だけだったら絶対に無理だったよ」
「だよねっ」

あたしと水無瀬がそんな二人に苦笑を浮かべると、あたし達は実験を開始した。

二十分経った頃に実験が終わっていたのはあたし達の班だけだった。といっても殆どあたしと水無瀬の協同作業で、美里ちゃんと宮谷君はただ黙ってみていただけなんだけど。

実験のデータを全部集めた所で、あたし達は式に取りかかった。つて言っても宮谷君が水無瀬の紙を覗き込んで美里ちゃんがあたしの紙を覗き込んでるだけなんだけど。

「先生のくれた式は $V^2 - V_0^2 = 2ax$ であってるよね」

「うん。七センチの加速度から計算するよね」

「うん」

「んーと、」

二人で黙り込んでからシャーペンを紙の上に滑らせる。今の時間だけは水無瀬の助けがいるから睨みつけたい衝動は抑えることにしてる。データを集めてる間も水無瀬の手伝いがなかったら終わってたし。

計算が終わって、あたしは水無瀬に声をかけた。

「 0.46 の二乗引く 0.2 の二乗だから、 0.1716 になった？」

「なったなった。 0.17 まででいいよね」

「いいと思う。四十五センチの方は 1.62 になった？」

「なった」

「多分合ってるよね」

「これでいいと思うよ、俺も」

よし、と二人してシャーペンを置くと、宮谷君と美里ちゃんがせつせと同じことを自分達の紙の上に書き始めた。

ああ、なんであたしこんなに平和に水無瀬と会話してるわけ。

「はえー……。二人ともすごすぎ。何の話してるのか全然分かんないよ、ねっ、宮谷君」

「うん、全然分かんねえ。俺とお前だけだったら絶対最後まで残ってたぞ、狭川」

「だねっ」

笑いながらあたしが美里ちゃんの紙を眺めていると、前にいる水無瀬があたしを見てる気がしたから顔をあげた。案の定見られていた。……ってか何なの？ この何日間ずっと目が合ってたんだけど。

「何？ 水無瀬君」

訳：『何見てんだよ、水無瀬』

「え？ なんでもないよ。有賀さん、最近元気ないんじゃないのか
と思つて」

訳：『見てるわけじゃねえよ自意識過剰が。俺のこと避けまくり
なくせにすっかり俺のこと見てるじゃねえか』

「何言つてんの？ 普通に元気だよ。水無瀬君こそ最近なんだか浮
かない顔してるような気がするんだけど気のせい？」

訳：『てめえ何言つてんだよああん？ あんた、しっかりと自分
の行動くらい後悔してんでしょうね』

「そんなこと絶対ないよ？ 俺普通に元気だし」

訳：『はっ、後悔なんてしてるわけねえだろ。今すげー機嫌いい
し』

「そっかー」

「うん。心配しなくていいよ」

「なんだか水無瀬君らしくない気がするたからさ」

「そうかな？ 俺はこの上ないほど普通だよ？」

「そりゃよかったー」

ああ、こいつ殴りたいなあ。

険悪な雰囲気ってこういうこと？（後書き）

微妙なところで区切っちゃったかな・・・。

次話投稿は明日か来週になります。多分来週になるかな・・・。

。

ここまで読んでくれてありがとうございます。

恋は本当に大変なものだ。(前書き)

お久しぶりでございます。いろいろあつて長い間投稿できなくてすみませんでしたorz

お詫びといつてはなんです、明日も投稿するつもりでいます。

少し長めです。

恋は本当に大変なものだ。

結局この実験に成功したのはあたし達の班以外には三班しかなく、それも学年三位の神楽さんの班と、稔と遠田の班。まあ、つまりは学年トップファイブの班だ。当然といえば当然か。そういえばトップファイブって全員物理取ってんだな．．．。

ってか三班しかできてないから明美先生にはこっぴどく怒られた。いやいや、元はといえば貴方のせいでしょうに。

「それにしてもうちは遠田がいてくれたから助かったよー。いくらかくれたといっても遠田がいなかったら絶対出来なかったなあ」

「だから予習しときなさいって言ったじゃない」

現在放課後。またもや稔の部活が終わるまで待っている所を、休憩中の稔が教室に入ってきて来て会話をはじめた。

あたしの冷静な言葉に稔が頬を膨らませた。

「どっかの天才二人と違って私は予習しても分からないことが多いのっ」

「．．．天才はあいつよ。あたしは予習をしっかりとやったから出来ただけ」

水無瀬を会話に引っ張りだした稔に少し機嫌悪そうに言うと、じつと彼女がこちらを見た。

「．．．何？」

若干睨みつけながら言うと思いが慌てて両手を前にかざした。

別に殴るわけじゃないからそういう反応やめてよ。傷つくじゃない。

「いや、水無瀬君と喧嘩しても天才なのは認めるんだなあ、って思っただけ」

「別に喧嘩したわけじゃないよ。それに、天才なのは誰だって否定できないことですよ？」

「まあ．．．そうだねえ。彩那は学年二位なのに全然追いつかないしね」

「．．．．．」

「あ、いや、う、うそ！　嘘！　ごめんなさい地雷踏みました何も言ってません！」

ほんとにもう。

水無瀬のせいですとムカムカしてるんだよ、あたしは。だからといって本人に毒を吐けるわけじゃないし、ストレス発散も出来ないし。

ああもう！！　この胸の中のムカムカは誰にぶつければいいのよ！　実験が成功したと分かった後にニコニコ顔で『やったね。さすが有賀さん』とか笑顔を振りまきやがって！　おかげさまであたしは『いやあ、水無瀬君のおかげだよ』とか返さないといけない羽目になったじゃねえか！

．．．というか、そんなあたし達を美里ちゃんがじっと見てた

のが一番気になるんだよね．．．。稔からの連絡であたしと水無瀬がなんでもないって分かってるはずんだけど。ってか分かってほしいなあ。これ以上あいつの恋愛沙汰に巻き込まれたくない。あたしは夏菜ちゃんだけでもう充分懲りたよ。

「そつえば、彩那」

稔が声をかけて来たので顔をあげた。

「何？」

「宮谷ってあんたのこと好きなの？」

．．．．．
．．．。

「．．．．．はい？」

「いや、噂で聞いたんだけどさ、あんたと宮谷って中学からの付き合いでしょ？」

「そうだけど．．．」

「仲いいの？」

「．．．．．悪くないと思う．．．」

中学でも一年と三年の時に同じクラスになったわけだし、ああいう性格だから誰とでも気軽に話すのが宮谷君だ。男子の中でもそれ

なりに交流が多かったし、よく話したけど．．．。

「好きって．．．所詮噂でしょ？」

「そうなんだけどさあ、今日あんた達をずっと監視してて本当かなって思ったんだよね」

「監視なんてしてちゃ実験が出来ないのも当然だね」

「うるさいよつ。とにかく、宮谷って何かとあんたのこと見るのよ。しかもよく話しかけられるでしょ？」

「．．．．．」

そんな、ことは、ないと思うんだけど．．．。

「だからってあたしのことが好きってわけじゃ？」

「男が女を何回も見るのに恋愛感情以外に一体何があるっていうのよ！」

「．．．．．」

「それにしても水無瀬君もそれに気づいてるっぽいし、美里ちゃんもいるからまあ、あの班は見事な四角関係だね」

「いやいやいや、なんで水無瀬君が出てくるのよ」

「いやだって、あんたと水無瀬君が付き合ってるかもしれないって噂は美里ちゃんだけが知ってるわけじゃないんだから」

「．．．．．」

なんですと？

「そういうことは早くいえよおお！！！！」

「ええええええ！？　だつて知つてると思つたんだもん！！」

「知らないよ！！」

美里ちゃんだけじゃないつて．．．っ！！　つてことは学校の中ではあたしとあの猫かぶり野郎が付き合つてるつて思つてる人が他にもいるつてことかよ．．．．っ！！

「あり得ない．．．．」

「え、いやでもほら！　信じてない人も多いと思うし！　美里ちゃんもきつと違うつて言い張るからほら心配しないで！？　ね！」

机に突つ伏して言うつと、稔がオロオロしたままあたしを慰めようとする。

水無瀬と付き合つてゐるつて．．．．。そんな噂が流れたらあたし一体何人に目の敵にされると思つてんのよ．．．っ！　うちの学年所か一年も三年も水無瀬のことが好きな子つてゐるのに！

．．．．やだなあ、リンチとかにあいそうだなあ。そんなの漫画にしかない展開かもしれないけど．．．．。

「ごめんつて彩那！　余計なこと言つた！　私の言つたことはもう気にしないで！」

「．．．．いいよ。平気。稔のことは責めてないし、ほらっ、早く部活戻りなよ。先輩が呼んでるよ？」

あたしの言葉に稔が外に耳を向けると、校庭の方から『みのりーっ！』と叫んでいる声が聞こえる。

「ああ、もう！ 五分も経ってないじゃん！ とにかくごめん彩那！ 長引いたら先帰っていいから！」
「へいきへいき、終わるまでここにいますから」

さつさと言きなー、と手を振ると少し心配そうにこちらを振り返ってから稔が走り去って行った。

そして三十分が経過し、五時ぐらいにさしかかった所だった。

「．．．有賀さん」

窓の外見ていたあたしは、呼ばれた声にハッとした。こんな時間に稔以外に誰があたしを呼ぶっていうのよ。未だにムカムカしていたあたしは少し不機嫌そうに振り向くと、教室のドアの側にいる人物に目を見開いた。

立っていたのは、三年生生徒会副会長、久我夏美先輩だった。

「．．．久我先輩？」

えーと。世界の全ての人の中でよりによって貴方に声をかけられることは最大の予想外だよ。

名前を呼んでも口を開きかけてから再び閉じただけで、先輩は少し俯いてしまった。

．．．．．なんなの？

「あの、あたしに何か御用が？」

ってかなければここにいないよね。

声をかけると先輩は少しだけ顔をあげた。困惑した表情が浮かべてあったからこそちも困惑だよ。なんだっていうの？

「あのね、聞きたいことがあったの。本当はもう帰るつもりだったんだけど、貴方がいるのを見えたから寄ったのよ」

「．．．はあ．．．」

「．．．．．」

．．．．．再び黙り込んでしまった。

「あの、久我先輩？ 聞きたいことがあるのなら？」

「水無瀬君のことなの」

声の強さが変わって思わずびくつと身体が震えた。

えっ．．．水無瀬？

「．．．え、あの、水無瀬君がなに？」

はっとした。こ、これは、もしかしくとも、あの噂か．．．っ！？ あたしと水無瀬が付き合ってるなんていう馬鹿げた噂がまさか三年生に回ってしまってるのか．．．っ！？ だって、だって久我先輩って確か水無瀬のことが好きだし、あたしを問いただしに来たとしても不思議ではない．．．っ！

まさか、とか思いながら目を見開いて先輩を見ていると、恐る恐る先輩が口を開いた。

「有賀さんと水無瀬君が、付き合ってるって、本当？」

．．．うわああああ．．．やっぱり．．．．．。

「あの、なんか、そういう噂が回ってるみたいなんですけど、ガセネタなんで。本当に。あたしと水無瀬君本当に関係ないんですよ」

だからその泣きそうな顔やめてくださいよ先輩．．．！！

「まったく．．．！！　水無瀬がはつきりと断らないから先輩がこうやって来てしまったじゃないの！！」

あたしの強い口調にしかし、先輩は納得した様子は見せなかった。それどころか、なんとなく睨まれてる気がするんだけど、それは気のせいであってほしい。

「水無瀬君がモテることはよく知ってるの」

「は、はい」

「私の学年でも彼のことが好きな人は五人は知ってるわ。貴方の学年なんてもっと多いでしょうね。一年生にも彼に憧れてる子は多いみたいだし」

「．．．は、はい？」

何が言いたいんだろう．．．。

「だから、水無瀬君が誰かと付き合ったら、付き合ってることを秘密にすることは当然だと思ってるのよ」

「．．．．．．．．．．．．．．．．」

「付き合ってることが公の場に出たら、女子の矛先が彼の彼女に向くことは分かりきってるもの。水無瀬君は優しい人だから、彼女をそんな目に合わせたくないだろうし」

「．．．．．．．．え、あの．．．．まさか、あたしと水無瀬君が、秘密で付き合っていると、思ってるんですか？」

「そつでしよう？」

違うよ！！　なんでそういう結論にしかたどり着かないのよ恋する女子っていうのは！！　ワーストなシナリオばかり自分達のなかでたてていって勝手に傷ついて勝手に人を責めるんでしょうよ！　もう．．．！　冗談じゃないよ！　なんで水無瀬のせいでこんなに振り回されないといけないんだよ！

「本当に違うんですよ先輩！　なんでそういうことになるんですか！？」

「．．．だって貴方と水無瀬君は、仲がいいから」
「はい！？」

「前から思ってたのよ。二人とも学年トップの頭脳だし、運動神経もいいし顔もいいし。貴方達以上のお似合いのカップルはいないって思ってる人が殆どなのよ」

「冗談はよしてくださいよ！」

「本当よ！」

叫び返されて思わず言葉が詰まった。

「それに、私は水無瀬君をいつも見てるから分かるけど、彼は貴方の周りでは気を許してる。水無瀬君は一見誰にでも心を開いているように見えるけど、誰にも分け隔てなく接してるってことは、それだけ気を許してないってこと。だけど貴方の周りでは彼は落ち着いた様子を見せるもの。だから、私だけじゃなくてたくさんの人が貴方と彼が付き合ってるんじゃないかって前々から思ってたのよ」

「．．．．．」

「そんなこと思ってる矢先に今度は学校外で二人一緒の所を見たって噂が回るんだから、付き合っているとしか思えないじゃない！」

ええええええええええ。なんでそんなことになるのよお
お。。。。。

「本当に違うんですよ！　先輩！　本当に付き合つてたらあたしだって白状しますよ！　だけど本当に付き合つてないんです！！」

「そうだとしたらどうして彼は貴方の周りだと自然体なの！？」

「知りませんよ！！　よく相談に乗るからとか同じような立場だからとかそういうんじゃないんですか！？」

「違うわ！　あれはもつと強い絆なもの！　そうでなければ私だって貴方を疑つたりしないわ！」

「ああ、もう！　本当に違うんです？」

「有賀さんの言うことは本当ですよ、先輩」

女子二人の声に突然割って入って来たアルトにあたしと先輩はドアの方に振り向いた。気づかなかつたけど、いつの間にか先輩は教室に中に入って来てたんだ。

校庭にいるのを見たから声の持主を見てあたしはとくに驚きはしなかつたけど、先輩は目を大きく見開いた。

「水無瀬君」

先輩が名前を呼んだけど、あたしはムスツとして彼を睨みつける。

こいつのせいでこんなことになってるんだから、こいつの口から聞いてみようじゃないの！

「なんだかそういう噂が回ってるみたいなんですけど、俺と有賀さんはただの友達です」

「でもっ」

「回ってる噂は単にバツタリ会った俺と有賀さんを見て勝手に解釈した奴の仕業でしょう。俺だって、誰かと付き合ったら隠すことなんてしませんよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

さすがに本人に言われたからなのか、自分の気持ちが始どバレてしまっていることもおかまいなしに先輩は黙り込んだ。それから水無瀬を見て、あたしに視線を移す。

「・・・・・・・・ごめんなさい、有賀さん。悪いことをしてしまったわ」

「え、あ、いいえ、そんな。分かってくれたならあたしは別に・・・」

「」

先輩が弱く笑って、それから水無瀬を見た。

「・・・・・・・・水無瀬君もごめんなさい」

「・・・・・・・・いえ」

「じゃあ、また」

床に転がっていた鞆を拾い上げて、先輩は足早に教室から走り出て行った。

「……………それにしてもあたしの言葉には一切耳を傾けないくせに、水無瀬の一言で納得するとは。あれこそ惚れた弱みってやつかね？」

「……………ったく、めんどくさ。」

先輩が出て行ったドアをしばらく見つめてから溜息をつくとき、水無瀬の視線が真っ直ぐとあたしに注がれてるのが感じ取れた。か、考えてみれば、猫かぶってない水無瀬とは四日ぐらい話してないんだっけ。

「……………途方もなく長く感じるのはなぜだ？」

「……………有賀」

「話しかけないでよ。あんたを許したわけじゃないんだから」

「……………」

あんたのせいでどんな屈辱を味わったと思ってるのよ。それどころか美里ちゃんの気持ちもないかのように扱って。

ふんっ、とそっぽを向いて頬杖をつくとき校庭を見下ろした。パーン、と乾いた音がして、五十メートルの距離を三人の女子生徒が走って行く。

後ろで水無瀬が溜息をつくのが聞こえた。

「……………この前は悪かった」

「．．．謝って済む問題でもないでしょ。あたしだけじゃなくて美里ちゃんまで傷つけたんだから」

「．．．．．別にあの場に狭川がいたわけじゃねえだろ」

「そういう問題じゃない」

即座に返事をする、見えてるわけじゃないけど眉を寄せる水無瀬が想像できた。薄く窓に反射する水無瀬が頭をガリガリとかいてから、再び溜息をついた。

「狭川のこと、さすがに言い方が悪かった。そのことも謝るよ。．．．お前にあやってキスしたことも、ごめん」

「．．．．．何急に素直になっちゃって。気持ち悪い」

「てめえ．．．」

「あんなことされたのに、あたしはまだあなたの秘密をバラすことをしてないんだよ？」

言いながら振り向くと、水無瀬が少し驚いた表情をした。それからすぐに顔を伏せる。

「ああ．．．。ありがとう」

．．．．何なのよ。急に素直になっちゃって調子狂うじゃん。心の底から反省してるようになったかしょんぼりとしてしまった水無瀬に、あたしは溜息をついた。

「あたしと話さない方が秘密もバレないっていうのに、なんでわざわざ謝りに来るのよ。らしくもない」

水無瀬が苦笑を浮かべた。

「．．．．．案外、辛いもんなんだよ」

「．．．何が？」

「本当の自分を知っている人が、周りにいないのが」

「．．．．．だったら、猫なんかかぶらなければいいじゃない」

「そんな簡単にできるわけねえだろ。俺はもう、掘りすぎてしまった穴の中にいるようなもんなんだから」

「．．．．．」

「．．．．．何言ってるんだか。最初から猫かぶろうなんて考えなければ、抜け出せない穴なんかににはならなかったのに。」

「それもあんたのせいでしょ？」

「．．．．．まあな。だけど、今までは平気だったんだよ。学校で本当の俺を知っている人はゼロだったんだから。それはつまり素を出さずに一日過ごすってことだ。一回聞いたらすっげえ疲れると思うだろうけど、案外楽なんだよなあ。バレちまつてる人はいないから何をやっても誰も何も言わなかったし」

「．．．．．それは軽くあたしのことを責めてるわけ？」

「別にそういうわけじゃねえよ。ただ、一回俺のことを知ってる人

がいたら、素を出したくなるんだよ。特にお前は俺に無駄に媚びないし、一緒にいて楽だから」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なんで急にこんなこと言ってるのこの人。ほんとに謎なんですけど。大丈夫かな？ 熱とかあるわけじゃないよね？

「だけど、素を出せるたった一人の人物に無視を通されることがこんなにも辛いとは、思わなかったんだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「んでまあ、そうなってしまった原因が俺だったから謝りに来たわけ」

「・・・・・・・・・・そっ」

「・・そっ、て、お前なあ。人が謝るのにその態度はねえんじゃねえのか？」

「散々人のことを振り回したんだから、そんなに簡単にあたしが許すと思わないでよね」

はああああ、と水無瀬が長い溜息をついた。

「まっ、どうせそんなことだと思ったよ。お前が簡単に人を許す奴じゃねえことくらい予想の範囲内だ」

「よく分かってるじゃない」

「まあな」

一拍だけ長く見つめ合ってから、水無瀬は机にかけてあった自分の鞆を手にとった。それからスタスタと教室から出て行くところとするところで、あっ、と声をあげた。

少し目を見開いてそっちを見ると、ニツと水無瀬が口角をあげた。

「一応言っておくけど、反省はしてるが、後悔はしてねえからな」

言い残してビュンツとものすごい速さで廊下を走って行く音が聞こえた。

わなわなと肩を震わせてあたしはガタンと座っていた椅子を押し倒しながら立ち上がった。

「ふっざけんなあああああああ！！」

恋は本当に大変なものだ。(後書き)

しばらく書いてないからなんだか文才が落ちてる気がします。いやもうほんとごめんなさい！ 石でもなんでも投げてください！

明日も投稿するつもりですが、できなかつたら……もう見捨ててくださっても文句一つ言いません……。。

恋愛はやっぱり厄介だ。

それにしてもどんなに嫌な奴でも反省する時は反省するんだな。後悔しないって言われた時はぶん殴りたくなっただけ、まあ謝ってくれたからよししよう。

だけど許しはしない。

水無瀬と久我先輩が去って行ったすぐ後に稔が教室に入って来たけど、わざわざ今起こった話を話す気にもならなかったので放っておいた。でも機嫌がよくなってたらしく、仲直りでもした？ って聞かれた時は殺す勢いで睨みつけてしまった。

さすがに八つ当たりするのはそろそろやめたほうがいいのかも知らない。最近ずっと八つ当たりしてるのにキレ返さない稔には感謝します本当に。

雑談しながら二人で帰り道を歩いていると、ふと稔がこちらを見た。

「ところで、話の途中だったんだけどさ、宮谷に告白とかされてない？」

ピキッと青筋がたった気がした。

「さ・れ・て・ま・せん」

「なあーんだ」

「なんだとはなんだ！」

「あいつ絶対彩那のことが好きだと思っのよねー」
「……………」

稔のそういう発言のせいで勝手に噂が出回るんでしょーよ。まさか稔自身気づかず噂を回して、それが自分に帰って来た時も自分が回した噂だって気づいてなかったとか？

……………うわぁ、超あり得る。

「あのねえ、確信も持てずにそういうこと言っから噂が回るのよっ。宮谷君があたしのこと好きでも好きじゃなくてもそういうことを軽々と言わない！」

「だってー」

「だってじゃない」

「まったく。どこの駄々っ子だあんたは。」

「というかそういう稔のことが好きな男子だっているんじゃないの？」
「？」

「なんでいきなり私の話になんのよ！」

「さっきからずっとあたしの話してるんだからいいじゃん！　そういえば稔の初恋話とかも聞いてみたいなー」

「誰が言うか！　あ、信号変わったから私行くわ！　じゃあねー！」
「あ、こら、稔！　逃げんなー！」

チッ。人の恋愛沙汰にいつも首を突っ込むくせに自分の話になる

と絶対嫌がるんだから。

「……ん？　そういえば、稔って好きな人いるんだろうか。なんだか知らないけどいつもあたしの恋愛沙汰に結びつけるからよく知らないんだよねあ。」

溜息をついてから歩き出して、家の前まで来た。

「……また喧嘩とかしてなきゃいいんだけど。」

「ただい？」

「私のやることにいちいち口を挟むぐらいに嫌になってるんだったら、さっさと出て行けばいいでしょ……！」

家のドアを開けた瞬間に怒声が聞こえて来て、驚いて息を詰まらせた。

「……今の声は、お母さん……。いつもとは全然違う怒鳴り声。今にでも、泣き出しそう……。……。」

あたしがドアを開けたことに全く気づかずに口論を続ける二人がいる部屋に、恐る恐る近寄ってみる。台所へ続くドアをほんの少しだけ開くと、部屋の真ん中で睨み合っているお母さんとお父さんがいた。

お母さんの目にはうつすらと涙が浮かんでおり、お父さんの方は苦虫を噛み潰した様な顔をしていた。

「……今まで何回も二人が喧嘩する所をみてきたけど、あんな……あんな状態の二人なんて見た事がない……。……。」

「私が何をやってもネチネチネチと文句をつけてきて！　だったら貴方は何かできるわけ！？」

「出来たとしてもお前が何一つやらせてくれないじゃないか！！　俺に何をしろっというんだよ！！」

「ふざけんじゃないわ！！　私がやってと言っても何一つやってくれないくせに！！　都合のいい時だけ私のせいにしないで！！」

「お前こそ都合のいい時だけ俺のせいにすんじゃねえよ！！」

．．．．何なの。

どうしてこの二人はいつも喧嘩しか出来ないの。どうしてそうやっていつもいつもいつも喧嘩しないといけないの．．．っ！　その度にこんな気持ちになるあたしは、どうすればいいっていうのよ！

二人がこんな状態で家にいたくないと思ったあたしは、床に転がっていた鞆を拾い上げてから家から出て行った。

あの状況じゃあ、あと一時間は険悪の雰囲気が続くだろうなあ。
水無瀬といい親といい、なんであたしはこんなに険悪な雰囲気にば
っかり巻き込まれてるわけ？ いや、まあ、水無瀬との険悪な雰
囲気は今日で解決したからいいとして（多分ね）、両親が毎日あれ
じゃあ精神的に参るよ。ほんとに。

はあああ、と大きな溜息をついて、マックにでも寄るかと思っ
てる矢先、

「有賀？」

最近その名前を呼ばれる時は同じ人だから嫌そうな顔をしそうに
なった。けど、寸での所でその声の持主が違うことに気づいて驚い
て振り向いた。

立っていたのは宮谷君だった。

「宮谷君・・・」

名前を呟くと宮谷君がニツと笑みを浮かべた。

「こんな所で何やってんだよ、有賀」

「・・・ああ、いやあ、なんか家に帰りたくなくて・・・」

「？」

宮谷君が首を傾げた。

．．．宮谷君なら別にいいかな。

「両親が喧嘩しててね。すごい大喧嘩。だから」

にへらっ、と弱い笑みを浮かべると宮谷君が少し目を見開いた。それからそっか、と呟くと、あたしが入ろうとしていたマックを指差した。

「奢るよ？」

．．．宮谷君こそ真の優しさを秘めている男．．っ！！さすがすぎる！

わーいありがとー　といいながらルンルン気分でマックに入って行くあたしを、苦笑を浮かべて宮谷君が追って入って来た。そのまま二人でハンバーガーと飲み物を頼むと、窓際の席に腰を降ろした。

店内を見回すと制服を着ている子が多いことから、学校帰りの子が殆どなのだろう。まあ、確かにマックは小腹がすいた時にはもってこいの場所だから気持ちはよく分かる。勉強とかも出来るしね。あたしは人が多くて集中できないけど。

コーラを飲みながら店内を見回していると、宮谷君の視線を感じて顔を戻した。

．．．うあ、稔の言葉思い出しちゃったじゃない！　ああああ

あだめだ。ここで余計に気にしたら絶対変だから普通に振る舞おう！

「そういえばさ、宮谷君はこんな所で何やってんの？ 部活もないし、ずいぶん前に帰ってたんじゃないの？」

宮谷君は野球部に属しているけど、確か野球部は四時半に終わってたはず。

あたしの質問に、ああ、と宮谷君が声を出した。

「いや、今日好きな漫画の発売日でさ。俺の家の周りって本屋がないからここで買ってこうと思ったらしい立ち読みしちゃって、こんな時間に……」

「そうなんだー。でもその気持ち超分かるっ。本屋って立ち読みしちゃうよねえ」

あたしが同意すると宮谷君が小さく笑い声をあげた。

「そうそう。一冊だけ買って行くつもりが三冊立ち読みして二冊買っちゃったよ」

「あははっ、そういうこともあるよっ。それがきつと本屋の目的だね」

「むっ、なるほど。本屋って商売上手なんだな。チツ、はめられたぜ」

二人で笑い声をあげると、宮谷君がハツとした。

「そういえば、お前んちの親って、仲悪かったっけ？」

「え？」

いきなり会話が戻ったなおい。

「いや、中学の時に何回か見かけたことがあるんだけど、仲良さそうな夫婦だったから・・・」

「んー・・・。喧嘩を始めたのはあたしが高校に上がった頃から。

去年はそんなに喧嘩することなかったのに、今年からは小さなことですぐにお互いに食いつくようになったちゃってるんだよねえ・・・」

今日みたいな大喧嘩もしちゃうし。

はああ、と深く溜息をつく、宮谷君が少し眉を寄せた。

「俺んちの親も最近よく喧嘩すんだよ」

「え？ そうなの？」

「うん。ほら、俺達来年は受験生だから、進路のことでよくもめるんだよ。母さんは俺に特定の大学に行ってほしいんだけど、父さんが俺の進みたい大学に行くべきだってね。嫌になるよ」

ふう、と宮谷君が息を吐いた。

・・・そっか。そうだよなー。進路のことでもめるのはどの家族

でもありそうだけど、どっちかといえば親と子供が喧嘩ってイメージがして、親同士が喧嘩するっていうのは考えなかったなー……。

「そっかー。宮谷君ちも大変なんだね」

「まあね。まっ、有賀の親が進路のことでもめているのかどうかは知らないけど、そんなに気に病むなよ？ 親っつーのは兄弟並みに喧嘩するもんなんだからさ」

ニカツと宮谷君が笑顔を浮かべて、あたしも小さく笑い返した。さすがクラスのムードメーカーだなー。人の気分をすぐに変えられるのがすごいや。

「へへっ、ありがとう宮谷君。ちよつと元気出たかも」
「そりゃよかった」

その後も二人で雑談していると、いつの間にか六時になったのに気づいて慌てて二人して店内から飛び出した。

話し込むと時間が過ぎて行くのを全然感じないんだよなあ。お母さんもお父さんも喧嘩してなければいいんだけど……。

はあ、と息を吐いてから、まだ隣にいる宮谷君に向いた。

「それじゃあ気をつけて帰ってね、宮谷君」
「有賀こそ」

「今日はありがとう」

「いえいえ。励ましになれたのなら何よりでございます」

スツと紳士的にお辞儀をした宮谷君に笑い声をあげると、宮谷君もあたしを見て笑った。それから一瞬真剣な表情になったけど、それに気づかずにあたしは踵を返した。

家に帰ったらどうしようと考えながら歩き出した瞬間、

「っ、有賀っ」

グイッ、と腕を引っ張られたと思うと、そのまま身体を翻された。驚いて目を見開くと、宮谷君があたしの両腕を強く掴んだ。

「はっ、え!？」

「有賀、聞いてほしいことがあるんだ」

「・・・え？」

『あいつ絶対彩那のこと好きだと思っのよねー』

稔の言葉が脳を横切った。このタイミングでそんな言葉が脳を横切ったのは、きっと気まぐれなんかじゃない。

嫌味として言っているわけじゃないけど、告白されるのははじめてじゃない。だから、なんとなく告白される時は相手がどんなふう to 振る舞いのかは、なんとなく分かってる。・・・つもり。

少なくともこんな決死の表情であたしの両腕を掴んで『聞いてほ

しい事がある』って言われたら誰だってそう連想するでしょー！？
ちよっとパニックになつてきた！

「え、あの、み、宮谷君？」

「俺、俺さ、」

ちよ、いや、告白じゃないかもしれないし早まるなよ彩那！ そんな自惚れみたいじゃないか！ あああだから宮谷君が決死の覚悟であたしと向き合ってるからって別にあたしに告白するわけじゃないだろーし！

「俺、有賀のことが、その」

あたしの腕を掴んでいた力を緩ませて、一瞬だけ言葉を切った宮谷君が俯いた。

ねえ、ちよっと、本当に．．．っ！ あたし、宮谷君との関係壊したくないの．．．っ！！ いやでも『好き』って言われたわけでもないのにそんなこと言つのもおかしいけど、ただと言われてからじゃ遅いしああもうつ！

脳内で必死に思考を巡らせている間に宮谷君が顔をあげて真っ直ぐとあたしを見た。

「俺、有賀のことが？」

「彩那ちゃん？」

ピタツ、とあたしと宮谷君の動きが止まる。気のせいであって欲しいけれど宮谷君の口の形が『す』で止まっている。いや、気のせいだよね。そんなそんな告白とかされるわけじゃなかったしね！

．．．．．はあ．．．。

と脳内でそんなことを思っていたけど、そんなことよりもあたしを呼んだ声にあたしも宮谷君も振り向いた。背中を流れる黒い髪に整った顔立ち、右手にはスーパ－の袋。

まぎれもなく斉木美智子さんだ。

「．．．．美智子さん」

予想以上に声に安堵が込められていて、しまったと思っている間に美智子さんがあたしと宮谷君を交互に見た。それから、あら、という感じで口元を覆う。

「．．．．お邪魔しちゃったかしら？」

「美智子さん！」

本当にこの人のタイミングはなんなのよ！ 必死に、何も言わないで！ 的な視線を美智子さんに送っていたら（それを分かってくれたかどうかは分からないけど）、宮谷君が困惑した表情であたしと美智子さんを交互に見る。

．．．そりゃあ、なんちゅうタイミングでくるんだって宮谷君も思ってるだろうね．．．。

「．．．有賀、知り合い？」

「えと、う、うん。知り合いのお姉ちゃん」

なんとか宮谷君と目線を合わせてから美智子さんに視線を滑らせると、へえ、と静かに宮谷君が呟いた。だけど美智子さんがニツコリと微笑むと少し目を見開いた。

．．．まああれだけ美人に笑いかけられちゃ．．．誰でもそうなるよ。うん。同性でも見惚れるくらいだからね。

「はじめまして 齊木美智子です」

「あ、は、はじめまして、み、宮谷悠人です」

「よろしく宮谷君 あら、宮谷君は彩那ちゃんと同じクラス？」

「いえ、学年は同じですけど」

「あら、そう。じゃあうちの弟の愁也とも知り合い？」

「．．．愁也？」

ひいひいひいひいひいひい！！！！ 美智子さん！！ 美智子さんなんてこと言うのよ！！ ちょ、水無瀬のお姉ちゃんとあたしが知り合いとかが世に知られたらほかに何を言われるか分かったもんじゃない！ あたしの『何も言わないで』視線は効果がなかったのかよ！！！！

ここは水無瀬じゃないと言った方がいいのかいやでも水無瀬じゃないって言ったって愁也っていう名前の男子なんてあいつ以外にい

ないじゃない！ だけだからといって水無瀬のお姉ちゃんとおたしが知り合いだってバレルのもなんとなくまずい気がするっていうかいや絶対やめたほうがいいっていうか！ ちょ、どうするのあたし！！

とか心の中で叫んでいる間に二人の会話が続いて行く。

「愁也って．．．まさか水無瀬のことですか？」

「み、みや？」

「そうそう！ 水無瀬愁也、私は結婚してるから苗字は違うけど、私の弟なの」

「．．．．．水無瀬が？」

ああああああああ．．．．．宮谷君の視線があたしに注いでるのが分かる．．．．．だめだ、どうしよう、ここで下手に言い訳してもごまかせないし、それどころか美智子さんが何を言っても全然平気よねみたいな雰囲気にいるからちよつと無理これは無理！

「み、美智子さん！ あたしに話があつたんでしょ！？」

（美智子さんに取ったら）よく分からない沈黙に陥ると、すぐにあたしがそんな言葉を口にした。美智子さんが驚いて両目を大きく見開いたけど、今回はあたしの視線の意味が分かったのか、交互にあたしと宮谷君を見てから困惑気味に頷いた。

「えっ？ あ、え、えと、そ、そうだったわね」

「ということだから、ごめん宮谷君！ 今日はあるがとう！ 気をつけて帰ってね！」

「えっ、」

返事を待たずに美智子さんの腕を掴んで引つ張って行く。確かに宮谷君が見えなくなつてから角を曲がると、そこであたしは息を切らしながら本当に宮谷君が見えないかどうかを確かめた。

十分に距離を引き離れたからなのか、マツクの看板すら見えない。よし。

「ちよっと、彩那ちゃん？ 一体どうしたのよ」

「美智子さんのバカあああああああ！！！」

「ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ！？」

恋愛はやっぱり厄介だ。（後書き）

約束通り投稿できました！！　わーいわーい！　いやもうほんとよかった・・・。

微妙な所で区切ってますみません><　長くなっちゃったので、二話に分けようと思います。今日の夜か明日には投稿します。

ここまで読んでくれてありがとうございますorz

親の悩みを抱えてるのはあたしだけじゃないってことだね。

「．．．．．そ、それは悪かったわね。．．．ごめん」

目の前のお茶を手にとって飲んでるあたしは現在斉木家。多分水無瀬も帰って来るから抵抗があっただけど、事情を話さずに帰るのもなんだか気がひけたから、美智子さんに誘われるがままにここに来てしまった。

さっきまで起こっていた事を全て美智子さんに話し終わると、しよんぼりとしてしまったあたしに美智子さんがとても困ったように謝ってきた。

小さく首を左右に振る。

「いや、あの状態で美智子さんに何も言わないで、って分かってもらう方が無理だから、そんなに謝らないで。あたしも美智子さんには救われたし」

っていうか、美智子さんって鋭そうなのにどうして肝心な時に分かってくれないんだ．．．っ！ いいけど！ 救ってもらったから文句なんて言わないけどさ！

溜息をついてお茶をすすると、美智子さんが一瞬だけ視線を彷徨わせてから口を開いた。

「あの宮谷君、悪い子には見えなかったけどねえ．．．。嫌いなのです？」

「．．．そんなんじゃないんだけど．．．、宮谷君とは中学からの付き合いだし。でも．．．そんなふうには彼のことを考えたことはないし、これから先もそんなことは起きないと思うから．．．。それに、仮にあの時に告白されていたとして、あたしが断ってしまったら二人の間がギクシャクするのは目に見えてるもん。付き合いが長いだけに、そんなことになるのは．．．やだ」

ふう、と美智子さんが息を吐いた。

「仕方がないわね。私だって好きでもない相手と付き合いなんて言わないから、まっ、この件についてはお開きしてところね」

「．．．ありがとう」

「んで、彩那ちゃんと愁也が付き合ってるっていう噂はどこが発端？」

「．．．．．分からない」

いきなり話が戻ったからびっくりした。

正直に答えると、そう、と美智子さんが呟いた。

「．．．んー。この際だから正直に言うけど、あたしも愁也と彩那ちゃんが付き合ってると思ってたのよね、はじめて二人が対面したのを見た時に」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あれ？ 気のせいかな？ なんだかすごいことを言われた気がするんだけど。

あたしの表情に美智子さんが顔の前で手を振った。

「いやいや！ 今だってそう思ってるわけじゃないけどさっ！ 愁也が猫かぶりなのを知ってるのってあたし達の家族と夏菜達の家族しかないからさ。そりゃ、今まで他人にバレたことがないってわけじゃないんだけど、そういう場合はなんとか脅してもみ消すからさ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・もみ消す？ 一体どんな恐ろしいことをしてもみ消すんだろっ・・・・・・・・」

「それに、バレる場合って大体相手が愁也のギャップに怖がるのが多いんだよねえ。でも、彩那ちゃんだけは違っだし、愁也もなんつか、自然体？ だったから」

「・・・・素を出してるんだから自然体なのは当然のことじゃないの？」

「そうなんだけどさー。愁也自体気づいてないんじゃないのかな。彩那ちゃんと一緒にいた時にさ、家族と一緒にいるみたいない感じだったから、ちよっとびっくりしたんだよね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

脳裏に久我先輩と水無瀬の言葉が横切った。

『貴方の周りでは彼は落ち着いた様子を見せるもの』

『お前は無駄に俺に媚びないし、一緒にいて楽だから』

『素を出せるたった一人の人物に無視されるのがこんな辛いとは、思わなかったんだよ』

．．．．．。なんなのよ、みんなして。稔まであたし達はお互いのことを分かっているみたいなこと言ってたし。

あたしは水無瀬と付き合う気なんて一切ないっつーの。

と、ここまで考えてあたしは眉を寄せた。

「．．．美智子さん」

「何？」

「その水無瀬は、どこにいるの？ 部活終わったんだから家に帰ってると思っただけど」

「ああ．．．」

と言ってから美智子さんが顔を伏せた。

．．．．聞いているいけないことだったのかな？

何回か口を開こうとしてから、再び閉めることを繰り返してから、美智子さんは息を吐いて視線をあげた。

「．．．彩那ちゃんだったら、言っても平気かな」

「え？」

「．．．あのね、あたし達は四年前に母親に捨てられたのよ」

「！！」

いきなり重いことを言われて、あたしは驚いて目を大きく見開いた。

捨てられたって．．．．。だ、だから美智子さんの家に遊びに来る時に親がいなかったのか．．．。

あれ、でも、お父さんは．．．？

「．．．お、お父さんは？」

美智子さんが息を吐いた。

「お父さんは愁也が生まれる前に死んじゃったの」

「．．．．．」

「だからあの子は父親の顔は知らない。その分母親に対しての愛情は絶大だったのよ。特にあの人は再婚をしなかったからね。あの人もとても愁也のことを可愛がっていたわ。それこそあたし以上にね」

「．．．．．なら、どうして．．．」

美智子さんが視線を伏せた。

「嫌になったのよ。子育てに。女手一つで育ち盛りの男の子を育てるのは、あの人に取ったら荷が重すぎたのよ」

ギリッと美智子さんが歯ぎしりをした。

「馬鹿げてやがる。子供を育てることのどこに重い荷があるっていうんだよ」

吐き捨てた美智子さんに、彼女がどれだけお母さんを憎んでいるのが伝わって来た。父親のことは『お父さん』と呼ぶのに、母親のことを『あの人』と呼ぶことから、それが充分に伺える。

「美智子さん．．．」

「．．．とにかく、あたしが二十を過ぎたのいいことに、中学に上がってばかりの愁也を置いてあの人を出て行ったのよ。それから四年間ずっと音信不通」

「．．．．．」

「それが、ついこの間になって帰って来たのよ」

「え！？ か、えっ、帰って来た！？」

美智子さんが頷いた。

「そりゃもうびっくりしたわよ。この四年間どこをほったき歩いて

たのか知らないけど、謝り倒しながらまた一緒に暮らしたいとか言
って来たのよ」

「・・・・・・・・・・それで・・・・・・・・」

ふんつ、と美智子さんが腕を組んで椅子に寄りかかった。お茶を
すすってから力を込めて湯のみをテーブルにダンツ、と置いた。

「断つたに決まってるわつ。何考えてんのか知らないけど勝手に出
て行つたくせにフラフラ帰って来るなんて許さない！」

「っ！」

驚いてあたしが目を見開くと、『？』と美智子さんがあたしを見
上げた。

「どうかした？」

「・・・・いや、美智子さん、その事水無瀬には話したの？」

「話したに決まってるじゃない！あの人が帰ってから愁也に連絡
して事情話したら、まっ、あたしと全く同じ感じでキレてたわね」

「・・・・・・・・じゃあ・・・・・・・・」

確信した。あたしはじめてあの猫かぶり野郎が猫かぶってない
所を見た時、あいつは携帯の中に『絶対に家に入れるなよ』と叫ん
でいた。それも美智子さんと全く同じような怒気を込めて。

ってことは・・・・・・・・あの電話の相手は美智子さん、話の中心と
なっていたのが、二人のお母さんってことか！

ん？　ところで、

「えつと．．．それと水無瀬はどうやって繋がってるの？」

「え？　ああ、それが、今日の放課後も来たのよ。ったく、信じられない。もう三回目よ？　何回断れば気がすむんだっつーの。今回は愁也とも対面してね、大喧嘩を繰り広げてあいつが部屋に閉じこもって拗ねてるわけ」

「えっ？　あ、じゃあ水無瀬ここにいるの？」

「いるわよ？　何？　会いたいの？」

「違うっ！！」

必死に否定するとゲラゲラと美智子さんが笑い声をあげた。．．．
．．．そんなに美人なの相変わらず品の欠片もない笑い方をしますね、貴方。

それにしても、水無瀬いるのか。全く物音がしないからいないのかと思つてただけど．．．。そつか、水無瀬にそんな裏があつたとは知らなかったなあ．．．。それなら電話に向かって叫んでも納得するっていうか．．．。うん。

と、一人でうんうん頷いていると。

「ところで、彩那ちゃんはそろそろ帰らなくて平気？」

「え？」

美智子さんの言葉に顔をあげると、時計を指差しながらこっちを

見返している。そんなあたしが時計を見ると、七時を回っていた。

「え、ちょ、もうこんな時間！？ ヤバい！！ 帰らなきゃ！ ごめんね、美智子さんっ」

「いえいえ、あたしは全然平気よー」

慌ててお茶を飲み干して玄関まで行くと、あつ、と美智子さんが声をあげた。

「．．．うーん。一人で彩那ちゃんを帰すわけにはいかないわね．．．」

「えっ、いや、まさかまた水無瀬に送らせるとか止めてよね、ほんと」

あれはもう会話が持たないっていうか、何を話せばいいかわからないっていうか。ぶっちゃけ水無瀬と二人きりで帰るのが嫌なだけっていうか。

美智子さんが少しだけ不満そうな表情をした。

「もう。彩那ちゃんって愁也のどこがそんなに嫌なのよ。あいつ、確かに性格悪いけど、根は優しいのに」

「それは、．．．まあ、何となく分かってるつもりだけど、あたしに対しては悪魔になるから無理」

美智子さんが笑い声をあげた。

「分かったわ。仕方ないからあたしが送ってあげる」

「え、でも悪いよ!」

「平気平気、一人で帰すわけにはいかなから。ほら早く早くっ」

美智子さんが靴を履いてからあたしの背中を押すと、二人で家から出て行く。

．．．それにしても、二人の家族がそんなに大変な関係だったとは思わなかったな。見た所生活に不自由は全然ないように見えただから、てつきり両親共々いい仕事についていい給料でやっていてるのかと思ってた。

それが姉弟二人だけの生活だったとは、予想外だ。美智子さんが水無瀬よりも十歳は年上だったからいいものの、そんなに歳が離れてなかったら、子供二人を置いて出て行っちゃったのかな、お母さんは．．．そう考えると、両親の仲が悪くとも一緒に住んでるあたしは平和な方なんだろうか？

黙々と考え込んで思考を巡らせているうちにいつの間にか家の前に来ていた。美智子さんはこの間殆ど何も話してなかったけど、．．．お母さんのこと考えてるのかな。

「．．．送ってくれてありがとう、美智子さん。元気出してね?」

「あははっ、ありがとう」

二人で微笑み合って、あたしがドアのハンドルに手をかけた瞬間、
「彩那ちゃん」

呼ばれて振り向くと、美智子さんは弱々しく笑みを浮かべていた。

「一つだけ聞きたいことがあるんだけど」

「あ、はい・・・」

「愁也がどうして猫かぶってるのか、知ってる？」

「・・・。そりゃ、先生からの待遇はよくなるし、モテるし、
誰も敵に回らないし・・・みたいなこと言ってなかったっけ？ 確
か。いかにも下衆っぽい言い方だったけど。」

思ったことをそのまま口にする、美智子さんが大笑いした。

「あはははっ！ 言いそうだねっ、確かに！ いかにも愁也っぽい
真相の隠し方だよ」

「・・・」

真相の、隠し方？

美智子さんが微笑んだ。

「愁也が猫をかぶりはじめたのは、あいつが中学に上がる頃。つまり、うちの母親が行った直後からなのよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あいつが猫をかぶってるのは、人生がやりやすいからなんかじゃない」

「えっ！？ 違うの！？」

すっごく嫌味ったらしくあんなこと言ってたのに！

苦笑を浮かべて美智子さんが首を左右に振る。

「あいつが猫をかぶってるのは、母親がそういうあいつを求めているからだと思ってたからなのよ」

「っ！！」

息が詰まった。

「・・・・・・・・あの人が出て行ったのは、自分が悪い子だったから。自分がいけないことをしたから。お母さんの求めていた息子じゃなかったから。愁也はそう思い込んでしまっただから、猫をかぶっていい子を演じれば、あの人が帰って来てくれると思っていたのよ」

「・・・・・・・・そんな・・・・・・・・」

「・・・・・・・・子供は何を言っただって分からないって思ってる大人は多いけど、そういう人達は自分が子供だった時のことを思い出していないのよ。自分に向けられたものが好意なのか悪意なのか、人が自分を責めているのか責めていないのか。それぐらい、簡単に分かるの

よ、子供だつて」

「・・・・・・・・・・」

美智子さんが寂しそうに瞳を伏せた。

「今でも猫かぶってるのは、それが癖になつてしまった、つていうのもあるし、・・・心のどこかでは、あの人が帰つて来てくれるんじゃないかつて思つてたんでしょね。それが本当に帰つて来ちゃったもんだから、いろいろと思うことがあるのよ、きっと。あの子はおもう子供じゃない。自分が変わった所であの人が帰つて来ることはないのは分かつてる。だけど、変えることができないでいるのよね、やっぱり。四年も猫かぶつてたんだから、責めやしないけどさ」

あたしが顔を伏せると、美智子さんがふふつと笑った。

「あんまり気にしないで？　ただ、彩那ちゃんはいつの素を知ってるから、言つておきたかっただけ。・・・あたしも、多分愁也も、彩那ちゃんのこととはとても信用してるから」

「・・・美智子さん・・・」

「ふふつ、じゃあね」

言つてから、今度こそ手を振つて美智子さんは歩き出した。あたしもその後ろ姿に手を振り返してから、家の中に入つて行った。

声は聞こえてこない。つまり喧嘩はしてないってことかな。いや、

喧嘩はしてなくても嫌な雰囲気になってるだろうなあ．．．。あたしがいなかったことに気づいていたのかは分からないけど、台所を覗くと、テーブルにはあたしのための夕食が置いてあった。キッチンにはお母さんが、テレビの前には新聞を広げてお父さんが座っている。

．．．。つか、あんな大喧嘩するくらいにお互いに腹が立つてるんだったら同じ部屋にいないればいいのに．．．。

「遅くなつてごめん」

声をかけながら台所に入ると、お母さんとお父さんが二人ともこっちを見た。

「彩那！ どこいったのかと思っちゃったじゃないの。携帯もここに起きつ放しだし！」

「ごめんごめん。帰り道に友達とバツタリ会っちゃって、そのまま雑談してたらこんな時間に．．．」

．．．。まあ、嘘ではない。

「そう。まあ、無事ならよかったわ。とにかくご飯食べちゃいなさい。私もお父さんも食べちゃったから」

「はい」

言いながら席について、ふと思った。

水無瀬と美智子さんには、こうやって心配をしてくれる親とか、ご飯を作っておいてくれる親とかは、いない。それは、普段両親をうざがっている人からしたら、楽に聞こえるかもしれないけど。

とても、とても寂しいことだな。

あたしには、毎日喧嘩をしてもあたしを心配して、一緒に住んでくれる親がいる。

もしも、水無瀬と美智子さんの親みたいにな、急に出て行ってしまうたら、・・・とてもじゃないけど耐えられない。

口にご飯を運びながら、あたしは一人黙々と考え込んでいた。

親の悩みを抱えてるのはあたしだけじゃないってことだね。（後書き）

約束通り投稿できていてよかった……。それにしても
やっぱり文才が落ちてる気がする……。

あ、そういえば！ 昨日はアクセスが過去最高の数を叩き出して
驚きました！ いやもうほんと！ パソの前で『なん……。だと
……。！？』ってなりました！

もう皆さん愛してます！！ こんなに読んでくれているとは思っ
てなかったorz

これからもよろしくお願いします！

ここまで読んでくれてありがとうございますorz

噂も度が過ぎると笑えない

さてと、どうするもんかね。

そんなことを考えながら、あたしは学校への通学路を歩いていた。

昨日の水無瀬と美智子さんの件もちろんそうだけど、今は何よりもすつごく怪しいまま宮谷君を置いていつてしまったことが最大の悩みである。．．．いやもう、ほんとどうしよう。

あれが告白だとして（仮にね。仮に）、いくら美智子さんが乱入してきたとはいえ、あたしが聞こうとしなかったことは結構明白だったんじゃないだろうか。いや、どう考えてもバレバレだったと考える方が良さそうだな。うん。

．．．それにしても、どうしてあんなタイミングで告白を（仮）しようと思ったのかは謎だ。

．．．．．あああああだめだ！　こんなウジウジ考えても仕方がない！　少なくともあたしは宮谷君に対して変な態度で接することはしないから、宮谷君が何も言わない限りは平気だ！　多分！　ってかお願い！

うーんうーんと悩んでいると、ポンツと肩を叩かれて驚いて身を引いた。

稔が笑いながら立っていた。

「稔！　やめてよ！　超びつくりしたじゃん！」

「それが目的だもーん」

「．．．のやろう」

「ははっ。なーにらしくもなく考え込んでんのかなのよ？」

「．．．いやあ、ちよつとね．．．」

これは言ってしまった方がいいのかなあ．．．。だって稔は、なんか、宮谷君があたしのことが好きだってことに気づいてたみたいだし。でも言ったら言ったで『ほらっ！ やっぱりあたしが言った通りだったでしょ！？』とかすごい興奮状態で言われそう。

．．．容易に想像できる所があたしと稔の絆の固さを表してるよね。

とにかく今の時点で稔には秘密にしておこうと思ったあたしは適当にはぐらかすと、それ以上深く追求しなかった稔と共に学校へと足を運んだ。

ところで、水無瀬の話を知ってしまったからには、簡単に『猫かぶってることをバラすぞオラア』とも出来なくなったわけで。いやまあ、出来ることは出来るけど、猫をかぶってる理由を知ってしまったとなんだか．．．．．こう、罪悪感に襲われるっていうか．．．。

．．．あたしってどこまでお人好し？

いつものように学校のはじまる十分ほど前に教室に入ると、宮谷君が同じクラスじゃなくて良かったと思って息を吐いた。それはそれで最低な発言に聞こえるかもしれないけど、水無瀬の姉である美智子さんとあたしが知り合いだと知られてしまったからには、なんていうか、水無瀬とあたしの間に何かあるんじゃないかと疑うこともできるわけ。だってクラスメートの兄弟姉妹と知り合いつて、余程そのクラスメートと仲が良くて、よく家に遊ぶに行くとか

思われるわけでしょ？ 少なくともあたしはそう思う。だからこそ美智子さんが水無瀬のお姉さんだって知られたくなかったわけで。

．．宮谷君が誰にも言わなければいいんだけど。いやもうどうしよう。

ノートを取り出している所で、ふと斜め前に気配を感じて僅かに視線をあげた。

水無瀬が挨拶をして来る女の子達に笑顔を振りまきながら席に腰を降ろしていた。そんな挨拶を返された女の子達は至極嬉しそうにしていた。んー、学校一のモテ男に笑顔で挨拶されちゃあ誰だって悩殺されるよねー。因みにこれは棒読み。

．．しかし、まあ、いつ見ても完璧なほどの猫かぶりだね。俳優としての才能があるよ、あんだ。もちろん美智子さんも。

やれやれ、と溜息をついてノートを見ると、今日の時間割りを見て頬が引きつった。

．．．．．よりによって一時間目が物理かよ．．．．．これは最早神様からのあたしへの罰としか思えないねー。水無瀬とあたしが付き合ってるっていう噂が絶えてるわけじゃないと思うから、相変わらず美里ちゃんとは微妙な関係だし、水無瀬との関係は若干復興したとしても（若干ね。若干）、今度は宮谷君と気まづくなりそうだし。いやなんないよ！ 断じてなんないよ！ ていうか絶対なりたくない！

うわああ．．．、という表情を浮かべていると、コンコンと音がして顔をあげた。水無瀬がこちらに足を伸ばしながらあたしの机に足を軽くぶつけていた。注意を引きつける行為だったのか、あたしが顔をあげるとすぐに足を引っ込んだ水無瀬にあたしが眉を寄せた。

「．．．何？」

できるだけ声色に失礼さを出さないようにしたけど、あんまり上手に出来たわけではないらしく、水無瀬が一瞬素の憎らしい笑いを浮かべそうになっていた。寸での所でそれを押しとどめてから口を開けたのだが、それに続くはずの声が出ない。ん？と首を傾げていると、水無瀬の視線が一瞬だけあたしの右側に流れた。

つられてあたしも右を見ると、稔が必死に紙に何かを書き込んでいた。しかし稔が朝から勉強するわけではないから、つまりそれはあたしと水無瀬の会話を盗み聞きしているとバレない様にするためのごまかしということかしらね。

「稔？」

呼びかけると、シュバツとものすごい速さでびっくりしたように顔をあげた。

なんだよその速さ。こっちがびっくりするよ。

「え、は、何？」

「．．．．何してるの？」

「．．．．何が？」

「盗み聞きとはまた悪趣味だね」

「なーに言ってるのよ、彩那。私が盗み聞きなんてするわけないでしょ？ 勉強してるのよ、勉強」

「．．．．．．．．」

こいつは間違っても女優の道にいかないようにしないといけな

な。

小さく息を吐いてから再び水無瀬を見上げると、先程の女の子達に向けていた悩殺スマイルを浮かべてあたし達の会話を聞いていたようだった。

．．．くっそかつこいいなお前は本当に。認めるのも癪だけど。

「また後でもいい？ 水無瀬君」

「うん、別にそんなに大事な話じゃないからいいよ」

訳：

『後にしてもいいよね、水無瀬』

『お前絶対聞けよ。すっげー大事な話だから聞かなかったら絞めるぞ？』

．．．ちよつと訳ミスったかな？ まあいいや。大体あつてると思っし。

あたしは大きく息を吸ってから稔と一緒に理科室へ向かう。そんなあたしの様子に稔が眉を片方あげたけど、何も言う気はないあたしの気持ちを察してか、肩をすくめただけで特に質問攻めはしてこなかった。

一時間目だから理科室は開いていなくて、仕方ないから明美先生が来るのを待つために物理の生徒達が談笑しながら教室の前に群がっていた。あたし達の物理のクラスは人数が二十五人くらいいるから、この狭いスペースで溜まるのは非常に窮屈だ。

好きな人はいないと思うけど、あたしって狭い場所は大嫌いなんだよね。閉所恐怖症ってわけじゃなくて、人混みとかが苦手なだけ。

仕方ないから壁に寄りかかると、斜め前に水無瀬が現れた。いや、現れたという表現がぴったりの登場の仕方だったよ今の。おかげでめっちゃびびくりしたんだけど。

稔が友達の果鈴と話し始めたのをいいことに、水無瀬がくいつと顎をしゃくった。

「・・・お前、昨日うちに来たんだって？」

少しだけ人混みから離れてから水無瀬が囁くようにそんなことを言くと、驚いて瞬きを何回か繰り返してしまった。いや、まさか素のまま話しかけて来るとは思わなかったし・・・。

っていうかお前、知り合いが半径五メートルに入ったら優しい水無瀬愁也にスイッチオンするとか言ってたっけ？ 今の所半径二メートルぐらいなだけだ。

こくん、とあたしが小さく頷くと、そうか、と水無瀬が呟いた。

「何？　なんか悪かった？」
「．．．いや、そうじゃねえんだけど。なんか．．．」
「？」

らしくもなく水無瀬が言葉を濁して、あたしは首を傾げた。
なんだか迷ってる様に視線を彷徨わせてから、小さく息を吐いた。

「．．．うちの母親の話聞いたんだって？」
「．．．ああ．．．えと、うん．．．」
「．．．．．．．．．．．」

い、いけなかったんだろうか？

「ごめん、聞かない方がよかった？」
「．．．いや、別にお前は俺のこと知ってるからいいんだけどさ、
その．．．」
「．．．別に誰にも言わないよ？」
「それも分かってる」
「．．．．．じゃあ何よ」

さっさと言わんかい、的な視線を送り込むと、再び水無瀬が息を吐いた。

「．．．変な気を遣わないで欲しいんだよ」
「．．．．．．変な気．．．」

とは一体どういう意味？

「．．．だからさ、なんか、母親のことを知る奴って、大抵俺と姉貴にすつげえ気を遣うようになるんだよ。俺達は別にあいつが出て行ったことに対して悲しんでるわけじゃねえから、そういうことをやられるとすつげえ迷惑なんだよ」

「．．．そう、なんだ．．．」

普通ならそうなるだろうな、と思う。家族の誰かが何も告げずに出て行ってしまったことがわかれば、誰だって気を遣う。もしもあたしの周りの友達にそんな子がいたら、あたしは必ず気を遣うだろうし．．．。

正直言つてあたしも水無瀬と美智子さんに気を遣うところだったし。

「．．．姉貴が昨日言つてたんだけど、お前とはすごく仲がいいから変に気を遣つてほしくないらしいんだ。俺もそう思うし。だから．．．」
「．．．．．．そりゃ、そこまで言われりゃ．．．」

あたしが呟くと水無瀬が顔をあげた。安心しきった表情になったことに対してちよつと驚いたけど、その後に水無瀬が小さく笑った

のを見てまた驚いた。

．．水無瀬が普通にあたしに笑いかけてくれたことって、あつたっけ？ いや、あの、憎たらしい笑顔とかは抜きにして。

「助かる、悪いな」

「う、うん」

「遅れてごめーん！！！！ 鍵持って来たよーー！！」

動揺しまくりのあたしが頷くのと同時に明美先生の張り上げられた声が聞こえた。全員がその声がした方向に振り向くと、明美先生が全力疾走でドアの所まで走りよっていく。

「先生おそーい！」

「いつまで待たせるつもりだよ」

「もう五分以上待つてるんだけどー？」

「えーいうるさいぞ！ 抜き打ちテストをやってほしくなければ黙って入りなさい！」

げえ、先生の鬼！ などと声が飛び交いながらみんなが教室の中へ流れ込んで行く。あたしも苦笑を浮かべて人の波に乗ろうとすると、ふと二人の人物がこちらを振り返っているのを見て、うつと息を詰まらせそうになった。

振り返っていたのは美里ちゃんと、宮谷君だ。じつとこちらを見ていたけど、あたしのことを見てるわけではなかったらしい。二人

の視線は静かにあたしの右後ろにいる水無瀬に注がれている。あくまでさりげなくだけど、振り返ってるのがあの二人だけだから、逆に目立つつていうか。

少し目を丸めてあたしが水無瀬の方を振り返ると、

「・・・お前、また何か厄介ごとに俺を巻き込んだんじゃねえだろうな」

ボソツと聞こえるか聞こえないくらいの声量で言われた。

ええまあ、『また』という言い方は心外だけど、確かに巻き込んでます。

他のクラスメート全員がこちらをチラチラと見るくらいに、あたし達の班の空気は重いものであったらしい。普段の明るいムードメーカーの宮谷君は殆ど喋らず、美里ちゃんもたったの一、二回あたしや水無瀬に質問をするだけだ。あたしと水無瀬もこの重い雰囲気は何から来るのか分かりきってることもあって、あまり話さなかったけど・・・。

．．．キツイ！ キツイよこの空気！！

特に今日は実験はなくて、ただ先生の言う事に耳を傾けながらノートをとるような形だから、ずっと四人で動かずこの班に座ってることとなる。ああああああもう逃げ出したい。本当に逃げ出したい。重すぎるよこれ．．．っ！！

頭を抱えたまま机に突っ伏したくなっただけど、それはそれで状況が悪化するような気もするからやめたほうがいいかも。

心中大きな溜息をついてからふと視線をあげると、水無瀬がじっとこちらを見ていた。

驚いて目を見開くと、何かを伝えたいのか、水無瀬の視線があたしの左側に座っている宮谷君に何回かいった。

『おい、何があっただんだよ』

と目で訴えられたあたし。

．．．え、なんて（目で）返せばいいわけ？

『何がよ』

『何がじゃねえよ。お前と宮谷の間に何かあったんだろーが』

『嫌だなあ水無瀬君。そんなことあるわけないでしょ』

『告白されたのか？』

『うるっせえよその口縫い付けるぞ』

『そうか。ついに言われたのか』

『うるっせえよついにつてどういうことだよ』

『それでお前が断って気まづくなっただんだな』

『うるっせえよ断ってねえよ』

『まあお互い宮谷の気持ちを知っちゃまったってところだろ』

『うつっせえよ海に沈めるぞ』

とまあこんな感じに目での会話を繰り返している所で、明美先生が声を張り上げた。

「はい。そこで目で会話してるトップツー！ 頭がいいからって私の授業から逃げられると思わないでよね！ 二人とも黒板にあるこの問題を解いてもらっわよ！」

グルンツと一斉にあたしと水無瀬が全員の注目の的になった。あたしと水無瀬の後ろにいる美里ちゃんと宮谷君も顔をあげてあたし達を見た。

「．．．せんせええ．．．っ！！ 目で会話してるとか教室中に言うなよ．．．っ！！ ただでさえ変な噂が出回ってるんだからさあ．．．っ！」

席から立ち上がりながら素早く水無瀬を一睨みすると、注意しないと分からないくらいに動作で肩をすくめた。

後で絶対殺してやるこいつ。

黒板に書いてある復習のための質問は重力についての問題が一つと速度についての問題が一つ。お互い見合わせてからあたしがチヨークを手を取った。水無瀬も同じようにチヨークを手にもつと、あたしに向かって猫かぶり水無瀬君の笑顔を浮かべて来た。

「有賀さんの好きな方を選んで良いよ」

「それはどーもありがとっございますー」

学年一位の余裕を見せつけやがって！ あたしだってどっちも解けるんだよバカやろう！！

と叫びたい気持ちを押し殺して、あたしの前にあった速度の質問にチヨークを走らせて行く。目の端で水無瀬がふつと笑ったのを捉えてから、あいつも自分の前にあった重力の質問に取りかかった。

あたし達が解いて行っている間に先生が生徒の質問に答えて行く。話し声が増えたのいいことにすぐに教室中の人達が話し合いをはじめた。耳をすますと勉強とは関係のない会話をしている生徒の話し声が聞こえる。

「・・・あの二人ってやつぱり付き合ってたの？」

「違うと思うよ。美里も否定してたし」

「でもあいつって水無瀬のことが好きだから否定しただけなんじゃないの？」

「確かにそれもあるわよね・・・」

「ところで目での会話ってなんなのよ」

「そのまんまだろ？」

「何よそのまんまって」

「つまり見つめ合って会話してたってことよ」

「じゃあやつぱり付き合ってたのか？」

「そいうことかなあ・・・」

ボキッと、チヨークの先が少しだけ折れた。

隣にいる水無瀬がチラッとあたしを見たと思うと、今の会話を繰り広げていた班に視線をやった。それからふんつ、と鼻を鳴らしたからあたしが睨みつけたけど、水無瀬はそのまま顎をしゃくった。

「・・・こっちの班の方が酷いこと言ってるぞ」

ボソツと呟かれて今度はもう一つの班の方に注意を向けた。

「あいつらつてもう、あれか？ やっちまったのか？」

「まさか！ 付き合つて間もないって聞いたけど？」

「俺は二人が水無瀬の家にいるのを見たっていう噂を聞いたけど」

「げえ、マジかよ？」

「あたしは逆に彩那の家に水無瀬君がいるのを目撃した、っていう話聞いた事あるよ？」

「それってやつぱり有賀が率先してんのか？」

「まあ、あの水無瀬君が自分から言うとは到底思えないけど・・・」

「だよなあ・・・」

「げえ、有賀恐るべし」

今度こそボキツとチョークが半分に折れた。ギョツとして水無瀬がこちらを見たけど、あたしは出た答えを黒板に殴り書きすると拳を握りしめて一気にその班に向かおうとした。

ダンッ、と勢い良くチョークを置く音に噂していた班がこちらを見た。それからあたしがものすごい形相なのを見て瞬時に顔を恐怖に染める。ギリツと歯ぎしりをしてから一歩踏み出した所で、

「有賀っ！」

ガッ、と右の二の腕を掴まれたと思うと、名を呼ばれながら引っぱり返された。

「何、っ！」

言いながら腕を振り払おうとしたけど、水無瀬が眉を寄せたままあたしを見て腕を離そうとはしてくれない。騒ぎを見たみんなが徐々にあたし達に注目してくるのを見て、水無瀬が声を最低限に潜めた。

「てめえが殴り掛かってどうする．．っ！」

「あんたねえっ！ あんなこと言われて我慢してられるわけ!？」

対照的にあたしが大声で叫ぶと、今度は先生がこちらを見た。驚いて目を見開いてる。

「あ、有賀さん？」

殺す勢いであたしが噂してた班を睨みつけるけど、水無瀬が一向に腕を離してくれない。あたしが大声で叫んだにも関わらず、水無瀬は尚も声を潜めて言う。

「殴り掛かったら肯定してるのと同じようなもんだ．．っ！我慢しろ．．っ！」

「あんたは我慢できるかもしれないけどねえ！！　あたしはあんなことを言われて聞かない振りをすることなんて出来ないのよ！！　離して！」

「離さない！　落ち着け！」

水無瀬までもが声を荒げると、先生が慌ててあたし達の間に割って入って来る。

「ちょ、ちょ、ちょっと！　二人とも落ち着いて！！　何があつたのよ！　有賀さん！」

先生もあたしの腕を押さえ込んで動きを封じようとすると、さすがに先生を振り払おうことは出来ずにあたしは齒ぎしりをした。動きを止めたあたしに水無瀬が腕を離すと、明美先生が眉を寄せながら心配そうにあたし達を交互に見た。

「どうしちゃったのよ、二人ともっ」

「なんでもないです」

必要以上に強く言い放つと、あたしは怒りを充分ににじみだしたまま席に戻るために振り向いた。その動作に明美先生も腕を離してくれて、水無瀬が小さく息を吐いた。

「すみません、先生。あそこの班が有賀さんに対して失礼な発言してたから、有賀さんが怒っちゃって」

水無瀬が言うと、先生がまあ！　と言ってから腰に手を当てて指された班を見た。ビクッとその班員四人が肩を震わしたけど、それが明美先生から怒られることに対してではなく、水無瀬が四人を睨みつけていたからなんだと気づいていたのは、きっとあたしだけだった。

噂も度が過ぎると笑えない（後書き）

何気に明美先生が一番悪かったりする。

ここまで読んでくれてありがとうございます。

四角関係とか冗談じゃない

ムカムカムカムカムカムカムカという効果音が聞こえるぐらいにあたしは今すごく怒ってる。いやもうすごくなんか遙かに飛び越えて怒ってる。これだけの怒りを一人の人間の中に溜め込むことが出来るのに驚くぐらいに怒ってる。

つまりまあ、一言で言えば。

あたしに話しかけるな。

ただどいくらオーラで言っても話しかけて来る奴は必ずいる。いや、こいつの場合はあたしの周りの空気がどんな意味をかもし出しているのかを分かっている上で話しかけて来てるわけなんだけどね。いい度胸じゃねえか！ しかも学校で堂々となるとめえふざけてんのか！？

現在昼休みである。

一時間目の物理のクラス以降、あたし達に接触を図った生徒は一人たりともいない。それこそ物理を取っていないクラスメートまでがそうだから、まあ、うちのクラスは空気を読むのが非常に上手ということが分かった。

だがしかし、そんなことはどうでもいい。

なぜならば、あたしは今中庭で水無瀬と二人きりでいるからだ。なぜ二人きりなのか？ そりゃーあたしが稔と楽しく話しながら（え？ 全然楽しくなかったと思うって？ えーいやかましい）お弁当を食べていたのにあいつがいきなり屋上に乱入してきて、『有賀さん、ちょっといい？』とか言って強引にあたしを引っ張って

来たからであって、決してあたしの意味でついていたわけではない。あたしという意味でついていたわけではない。ここのポイントは重要。

中庭に連れて来たのは屋上には人が結構いたからで、ここは日が当たる割には結構狭いスペースで人があんまりこないからだ。．．．
ただ教室の中で弁当を食べている一年生には上から丸見えである。
あたしは溜息をついて腕を組んで壁によりかかった。水無瀬は後ろに重心を傾けながらベンチに座っていた。

．．．．．ってあんたが誘ったんだからなんか言えや！！

「．．．ちよっと、話があったんじゃないの？」

あたしとしてはとつと話をして終わらせたい。なぜならばこの場面を二階にいる一年生に見られたら終わりだからである。いや、っていうか一年生じゃなくても変な噂が出回ってる以上、誰に見られても好都合ではない。

あたしの言葉に木々を眺めていた水無瀬がん？　という感じであたしを見た。

．．．．ん？　じゃねえよ！

「話。あったんじゃないの？」

さっきよりも強く言い放つと、水無瀬が少し周りを見回してから息を吐いた。

「話があんのはお前の方じゃねえの？」
「は？」

いくら人はいないと言っても、学校内で警戒しているのか、普段よりも水無瀬の声は幾分小さかった。

「人のことを散々睨みつけやがって。俺は何も悪いことはしてねえ
つつの」

「・・・・・・・・・・」

いやいやいや、そもそもあんたが何も言わなければあたしが噂してた班に殴りかかることもなかったんだけど。

ってか一日中睨みつけていたことがバレていたか……。いやだからってなんでこのタイミングで呼び出すの！？ 今日だでさえあんなことがあったんだから接触はしないべきでしょうよ！！

と、顔に現れてしまったのか、水無瀬があたしを見て眉をあげた。

「あんなことが起こった日に俺達がいきなり接触を絶つたら周りの奴らはなんて言うと思う？」

「・・・・・・・・・・」『やつぱり付き合ってるから怪しまれない様に距離を取ったんだ』、的なの？」

「分かってるじゃねえか」

「いや、だけど、なんていうか、それでもあんたと一緒に見られるのは嫌だ」

「宮谷と狭川か？」

「・・・・・・・・・・」

もうこいつ本当に嫌い。

「やっぱり告白されてたんだろ」

「・・・・うるっさいなされてないよ」

「じゃあ今日のお前らの空気はなんだよ？ 三時間目の化学でもまったく同じ空気だったぞ」

「あんたはどうして人の空気なんか気にしてんのよ!？」

「面白いから」

こいついつか絶対にぶっ殺す。

「告白とかされてないから!」

「でも気持ちは知っちゃったんだろ？」

「・・・・・・・・・・」

こいつって、まさか密かに情報屋だったりするんだろうか。いくら洞察力がいいからって、なんで簡単に人の気持ちとか全部分かることができるのよ。物理の時もついにいわれたか、的なこと言ってたんだから、宮谷君があたしのことが好きだって気づいてたんだろうし・・・・。

え、あ、いや、まてよ？

「あんだ、それ、美智子さんから聞いたんじゃないでしょうね？」
「……………」

黙り込んだ。

……………って、……………ことは……………。

「ちょっと待ってよおお！！ 美智子さんどれだけあんだに情報あげたの！！？」

「……………まあ、昨日お前らが話してた大体全部の内容」

「マジかよおおお！！」

どうして……………っ！！ どうして肝心な所で美智子さんっていつも抜けてるのよ！！ いや、まあ水無瀬はどうせ分かってたっばいからいいけど！ あれがガールズトークだと思ってたのはあたしだけですかそうですか！

あああああ、と両目を覆うあたしに、クツクツと水無瀬の笑い声の聞こえて来た。

「まっ、宮谷がお前のことが好きだっていうのには前々から気づいてたから恥ずかしがるほどのことでもねえだろ」

「……………」

こいつ今前々って言った？

「ちょっと待ってよ。あんた、去年はあたしと宮谷君と違うクラスだったでしょーが。なんでそんなのが分かるのよ」

「別に去年からって言ったわけじゃねえだろ？ お前は知らねえだろうけど、俺と宮谷は通ってる塾が同じだったんだよ。俺は去年の途中で止めたけど」

「．．．．塾？」

「そつ。別に仲は悪かねえからよく話したんだけど、お前の話題がよく上がったんだよ。んで学校でのお前から見てちゃ結構バレバレだったわけ」

「．．．．．そ、それってさ、いつ頃、くらい？」

宮谷君が塾に通ってるのは知ってる。中学にいた頃もずっと塾に通ってたけど、水無瀬も中学の間同じ塾に通っていたとなると．．．。

あたしの表情を見て何を察したのかは知らないけど、ニヤツと水無瀬が怪しい笑みを浮かべた。

「俺は中二からあいつと同じ塾に通ってるけど、その頃からお前はよく話題に上がってた」

「．．．．．えっ、っていうか、あんた、高校入る前から宮谷君とは知り合いだったわけ？」

「まあな」

サラッて言っただよこいつ。

「げえ．．．言われなきゃ絶対に分かんないよ．．．。ってまさか

あんた塾でも猫かぶってたの？」
「当たり前えだろ？」

ソウデシタネ。スミマセンネ。

「．．．ところで、さっきから宮谷君の話ばかりだけど、あんた美里ちゃんとはどうしたのよ」

「何が？」

「．．．え、だからさ、告白とかされてないの？」

「なんで俺が告白されるんだよ」

「いやあ．．．だってあんた今『宮谷と狭川か？』って言ってたし．．．美里ちゃんと何かあったんじゃないかと思って．．．今日もなんか全然話してなかったし」

「あいつとは何もないし、この先どうにかなるつもりもない。話してなかったのは俺とお前の噂のせいであるいろいろ思うことがあるからだろ」

「．．．だといいいんだけどなあ．．．」

曖昧な返事をする水無瀬が眉を寄せた。

「なんだよ」

「いや、あのさ。あたしの口からあんたと何もないって言ったわけじゃないんだよね、美里ちゃんに。あくまで人伝だったから、ちゃんと分かってくれるのかなあ．．．って」

「聞けばいいじゃねえか」

「そんな簡単に聞けたら苦労してねえっつの。ってか話ってそれだ

けだったら帰っていい？ 上の一年生がいつこっちを見るのかがすつごく怖いから」

あたしの言葉に水無瀬は何回か瞬きをしてからスツと視線を上にあげた。そこではじめて一年生がいたことに気づいたかのようにあゝ、と声を漏らした。

てめえが気づかずに素であたしと話してるわけがねえだろーが！

あたしが苦虫を噛み潰したような表情でそんな水無瀬を見てると、彼の視線があたしの元へ戻って来た。

「見られちゃまずいのか？」

「．．．．．じゃあね」

だめだ。こいつの危機感とあたしの危機感が全く違うからこれ以上話しても無駄だ。

あいつの場合は『付き合っていないんだから別に一緒に見られても問題はない』って思ってるようだけど、普通だったら『付き合ってるって思われてる以上、一緒にいたら付き合ってるって思われるに決まってる』って思うわけで。

．．．．．もうほんとと疲れる。

溜息をついて踵を返すあたしに、おいっ、と言いながら水無瀬が追ってくるのが聞こえる。

中庭から建物内に入った所で、あたしは再び息を吐くと追いかけるな！ いうために振り向こうとした。

したけど、その前にこちら側に歩いて来ている二人組を見て動き

が止まる。止まったあたしに追いついた水無瀬も、その二人の姿にチツ、と舌打ちをしたのが聞こえた。

．．．もう言うまでもないけど、こっちに向かって歩いて来ているのは宮谷君と美里ちゃんだった。

そんな二人もあたし達の姿を見つけて驚いている様子だ。

．．．まさに噂をすればなんとやらだな。

「．．．有賀、水無瀬．．．」

話せる距離まで来て宮谷君が立ち止まってあたし達の名前を呟いた。宮谷君の少し後ろについていた美里ちゃんがやりにくそうに視線を逸らしている。

．．．いやだなあ、この空気。

「宮谷君も美里ちゃんも、こんな所でどうしたの？」

「．．．俺達は購買に。委員会があったからお昼食べるのが遅れたんだよ。そういうお前は？」

「えっ」

しまったー。こちらへんにいる人なんてなかないから聞いたんだけど、瞬時にそっくりそのまま返された。

言い訳を考えるために必死に脳の中を探しまわっていると、隣で水無瀬が小さく息を吐いたのが聞こえた。

「俺達はちよつと相談してたんだよね、有賀さん」
「あ、う、うん」

さすがスラスラと嘘が出る男！ 不自然な沈黙に陥る前に絶妙なタイミングで嘘を入れて来た！ あ、いや、案外嘘でもないのかな？ 水無瀬の言葉に宮谷君も美里ちゃんも困惑した表情を浮かべた。

「相談？」

「・・・何の相談？」

「ああ、ほら、今日の物理での件でね」

「今、なんか、俺達についての噂がいつぱいまわってるでしょ？ それについてどうしようかな、っていう相談」

「・・・だ、大体合ってる。」

あたし達の言葉に美里ちゃんはそっか、と呟いてから、大変だねも付け足してくれたけど、宮谷君は無言である。

やめてくれ。本当に無言とかやめてくれ。

もう本当この四角関係何！？

「・・・有賀つてさ、」

「あ、え、何？」

宮谷君が口を開いて何かを言おうとしたけど、一瞬だけ美里ちゃ

んに視線がいつてから、その口から言葉は発せられなかった。ちょっとしてからやっぱいい、と言って首を振ると、じゃあな、と言ってそのまま美里ちゃんと一緒に購買に向かってしまった。

．．．美里ちゃんを見たってことは、水無瀬関係だろうか．．．。
．．．多分美智子さんのことについてだろうな．．．。

充分に距離がとられてから、水無瀬が盛大に溜息をつくのが聞こえた。

「何を聞きたいかは狭川の気持ちと同じぐらにバレバレだな」

「．．．．．ちょっと」

「なんでお前と俺の姉貴が知り合いなのか知りたいんだろ？ あいつ」

「．．．．．」

こくん、とあたしが頷くと、再び水無瀬が溜息をついた。

「聞きたいんだったらとつと聞けつつの。イライラする」

「水無瀬っ！」

「俺は教室戻る。お前は後からついてこいよ」

「はっ!？」

あたしが声をあげると、水無瀬が呆れた表情をして振り向いた。

「一緒に見られたくないのはお前じゃねえのかよ」

「……………」

眉を寄せて視線を逸らすと、ふんつ、と鼻で笑ってから水無瀬が教室の方へと向かって行った。私は宮谷君と美里ちゃんが行った購買の方向をしばらく見てから、溜息をついて、あたしも教室へ戻るために歩を進めた。

教室に戻ると、ずいぶんと怒りが鎮まったのを感じ取ったのか、稔が気楽そうな感じで話しかけて来た。水無瀬があたしと稔との昼食中にあたしを引き離れたのを見ていながらも、彼のことを話題に出さなかったのはこの子の配慮であると考えておこう。

水無瀬の方も同じ感じで、ちよつとだけツンツンしてる様子もあったけど、朝とは打って変わって何人かの女子と会話を繰り広げていた。若干笑顔が強ばってる気がするけど、あいつ、ああいう時は猫かぶってるの嫌だろうねえ。あたしだったら絶対に嫌だし。

五時間目、六時間目と、特になにも起きずに時間が流れて、気づけば放課後になっていた。稔を待つことが日課となってるあたしは今日ばかりはずっと教室にいるのはつまんないと思ったから、学校をウロウロしようと思った。

いや、多分気のせいだとは思っただけど、今日はどこに行っても

誰かに見られてる気がして殆ど座ったままだったんだよね。だから
気晴らしに誰もいない学校の中を歩き回ろうかと。ついでに職員室
に寄つて明美先生に謝つて来た方がいいかなあ．．．結局あの後
は怒り度MAXだったから全然明美先生と話してなかったし。
よしっ、そうしようと思つて階段を降りるために角を曲がろうと
した瞬間、

「有賀のことなんだけどさ」

シュバツとものすごい速さであたしは柱に身を隠した。

「今の声は……宮谷君……。ちよつと遠めに聞こえるつてことは、階段を上がつて来ているのか、下の階で話しているのか。」

「有賀さんがどうかした？」

[illegible]

トンツ、トンツと階段を上つて来る音が聞こえる。声の大きさを
らして上つて来てるのは水無瀬だ。

って、いや、ちよつと！　ここで隠れてるあたしを見られてはす
ごくすごくまずい！　教室に戻っても良いんだけど、すぐそこまで
水無瀬が来てるから、今動いたら絶対に勘づかれるよ！　や、ヤバ
い！

「お前って有賀のこと好きなの？」

トンツと足音が止んだ。ホツとしたけどそんなのもつかの間、宮谷君の言葉にあたしは口あんぐり。窓に薄く移っている水無瀬を盗み見ると、同じく目を大きく見開いてる。

．．．ってか、ここからだあたしは二人のことが窓に反射して
るからよく見えるけど、あつちからは見えないんだな．．．。仕組
まれたかのように都合よくここにいるよねえ、あたしも。

とか呑気なことを考えてるのはただちよっぴり現実逃避に走りた
いからである。

目を見開いていた水無瀬が、スツと目を細めてから宮谷君の方へ振り向いた。

「……そういう宮谷こそ有賀さんが好きなの？」

「……だったら悪いかよ」

. . . え、ちょ . . . っ!! あたし超気まずい場所にいる
 んだけど! ちょ、もう教室帰っても良いですか!? 水無瀬がも
 うちょっと離れてくれたら確実に聞かれますに走って帰れると思うん
 ですけど! そのまま階段を降りてくれませんかね水無瀬君!!

とあたしの心の叫びが聞こえるはずもなく、宮谷君の言葉に水無瀬が息を吐いて壁に寄りかかった。

「俺と有賀さんはなんでもないよ」

「俺は付き合ってるのかを聞いたんじゃない。好きなのかって聞いたんだ」

「・・・好きと嫌いだったら好きだけだね」

「・・・・・・・・あの・・・水無瀬を嫌ってる自分からしたらすごく複雑な一言であります。本当に。しかも宮谷君がそんな水無瀬にだんだん苛立って来てる・・・っ！はつきり答えてやれよ！本当にあいつは意地が悪いな！」

「俺が言いたいことは分かってるだろう」

「・・・恋愛対象としては別に好きじゃないよ」

好きだったらこっちが困るわ。

宮谷君の眉間のしわが寄った。

「・・・だったらなんで最近お前と有賀関連の噂が増えてるわけ？前から何回か噂は聞いたことがあったけど、こんなに流れたのはじめてだろ」

前も噂なんてあったのかよ！？とか驚愕に満ちた表情を浮かべていると、水無瀬が呆れた表情を浮かべたのが分かる。

「そんなの俺が知るわけないでしょ？俺と有賀さんが学校外で一緒なのを誰かが見て、そこからいろいろ作り話が発展したんじゃないの？噂なんて殆どそうじゃん」

「・・・じゃあ、」

先程よりも静かに宮谷君が口を開いた。

「どうして有賀は、お前の姉貴と知り合いなんだよ」
「・・・・・・・・・・」

壁に寄りかかっていた水無瀬の目が少し見開いたのが見えた。あたしの目も大きく見開く。あたしじゃなくて水無瀬に聞いちゃうの！？　そこ水無瀬に聞いちゃうの！？

水無瀬の視線がチラツと宮谷君に向いた。

「・・・・・・・・俺だって良く知らないよ。いつの間にか姉さんと有賀さんが知り合いで、俺は何も知らされてなかったって感じ」
「・・・・・・・・・・」

白水無瀬君一（白水無瀬とは猫をかぶってる時を指します）だと美智子さんへの呼び方も変わるのか・・・。

水無瀬が答えると、ギリツと宮谷君が歯ざしりをした。

「・・・俺は苛立ってんだよ。お前は有賀のことが好きでもなんでもないのに、ああやって噂が出回って有賀が振り回されてることにつ。あいつはあんだだけ悩んでんのに、今日だってお前は飄々としてたじゃねえかつ！」
「・・・・・・・・・・」

怒りを露にする宮谷君とは反対に、水無瀬の表情は変わらない。それが余計癢に触ったのか、宮谷君が拳を握りしめた。

「あいつは殴り掛かろうとしてたんだぞ！？ それだけ酷いことを言われたってことなのに、お前は殆ど顔色を変えずに止めてたじゃねえか！ あんだけ叫んで、あれだけ怒ってたっていつのにお前は？」

「じゃあそのまま殴り掛かってたら？」

言葉が遮られて宮谷君が言葉を詰まらせた。

予想外に水無瀬がドスの聞いた声を出したからだ。水無瀬が言葉続ける。

「そのまま有賀さんが殴り掛かってたらどうなつてたと思う？ 本当に違うから殴り掛かったんだって人は思つかもしれないけど、殆どの場合にはムキになって否定をすると肯定だとするバカが多い。別に俺達は付き合っていないんだから俺はどうでもいいんだけど、有賀さんはああいうのが許せない質だから、性格的に余計疑われる。そのまま俺が有賀さんに殴らせてたら、やっぱり付き合ってるんだって周りの人に言われて、最後に傷つくのは誰だと思う？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

宮谷君が黙り込んで、あたしも目を見開いてしまった。

・・・・・・・・そんなに・・・・・・・・考えてくれてたとは・・・・・・・・。

水無瀬が苛立ったように頭をかいた。

猫かぶってるのに怒りを露にする水無瀬はあんまり見た事がないから、なんとなく新鮮な気がする。こんなこと思ってる場合じゃないけど。

「話したいことってそれだけ？」

いらだちを込めた水無瀬の言い方に、しかし、宮谷君は終わってない、と言。

水無瀬の眉が寄る。

「．．．お前は、本当に有賀のことはなんとも思っていないのか」

「しつこいよ。思っていないって言ってるじゃん」

「それじゃあ、有賀が他の誰かと付き合ったら、なんとも思わないって言い切れるのかよ」

瞬時に水無瀬の目が鋭く変わる。

「．．．．．どうして言い切れないっていうの？」

「．．．お前らは、傍から見てもお互いのことを大切にしているように見えるから」

「．．．．．」

「……宮谷君も、そんなことなのかよ……っ!!」
水無瀬もさつきとは打って変わって目を大きく見開いてる。

「大切？」

「普段の何気ない会話とか、特に物理の時の班では、なんつーか親密そうにしてるじゃねえかよ」

「……してるの？」

「……今日の一時間目だって、お互いのことちゃんと分かってたっばいし」

「……」

これはさすがの水無瀬も黙り込んだ。いやいやあたしも同じ立場だったら黙り込んでるよ。

なんでこう、嫌いな人に限って周りからは仲がいいように映るんだろう？

「……有賀さんとは勉強関係で普段からよく話すし、性格も親近間が湧きやすいからそう思うだけじゃないの？」

「じゃあなんとも思ってたないんだな」

「何回言えば分かるんだよっ」

……水無瀬が語尾を荒げたけど、以外と宮谷君はそれに対して驚きはしなかった。

けどそんなことも吹き飛んでしまうほどに宮谷君の次の言葉は衝撃的だった。

「・・・じゃあどうして、この前有賀とキスしてたんだよ」

・・・・・・神様。いつそのこともうあたしを殺してくだ
さい。

四角関係とか冗談じゃない（後書き）

タイトルミスったかな・・・。あんまし四角関係な感じが、
ない・・・。
まいっか！

ここまで読んでくれてありがとうございますorz

嫌じゃなかったとか断じて思っていない。思っていない。（前書き）

なんだかすごく長くなった。後半だけ微妙にR15なのだろうか？
というかR15がどこからどこまでなのかがよくわからない。
。

と、とにかく、苦手な方はご注意を！ 性的描写ではないとだけ
言っておきます！

嫌じゃなかったとか断じて思っていない。思っていない。

硬直するあたし。硬直する水無瀬。そんな水無瀬を睨む宮谷君。
．．．．．嘘でしょ．．．．．

水無瀬がゆつくりと宮谷君の方に首を向けた。

「．．．キスって？」

と・ぼ・け・た！ とぼけたぞこいつ！ ここは『とぼけんじゃ
ねえぞ！』とかお約束のことを言われるのを待っているのか、水無
瀬君よ！

案の定宮谷君は齒ぎしりをする、より鋭く水無瀬を見据えた。

「とぼけてんじゃねえよ！ 俺は見たんだ！」

「．．．何を？」

「この前、お前らが二人ともゴミ捨ての当番だった時に、お前が有
賀を壁に押し付けてんの見たんだよ！！」

「．．．．．」

この発言にはさすがに水無瀬が僅かに目を見開いた。

だけどあたしはパニックである。

見られてたあああああ！？ どうして！ いつ！ どうやって見られてたの！？ どこからみてたの！ っていうか見られてるんだっただうしてもっと早く言わないのよ！ 宮谷君が問いつめてくれれば変な言い訳でも考えつけたかもしれないじゃん！

．．．いやそれは無理だけど。無理だけど！ 見られてたんだったら水無瀬が謝って来た後でも縁を切るためには必死に遠ざけてたかもしれないじゃん！ 決して宮谷君のせいにしてるわけじゃないけど！ かんっぺきにあたしと水無瀬のせいだけど！

頭を抱えて思考がグルングルンとしてて安定しない中、水無瀬は至って冷静に宮谷君と会話を繰り広げていた。

．．．お前の冷静さは一体どこから来るんだよ。こんな状況で逃げ場なんて皆無に等しい状況でどこから冷静さを引っ張りだしてくるんだよ！

「．．．だったら何？」

「は？」

「俺がキスしてたとして、俺になんて言っただけなの？」

うつわっ！ うつわっ！ 開き直ったよこいつ！ 開き直りやがった！

はあ！？ という表情を浮かべた宮谷君に全力で同意した。

「てめっ！ 好きでもない相手を壁に押し付けて、その上無理矢理キスしてて、その台詞はねえだろ！！」

「無理矢理じゃなかったら？」

「・・・何だと？」

「有賀さんが同意してたとしたら？」

何を言い出すのこいつ。ねえ、何を言い出すの。

「・・・同意なんてしてるわけがねえだろ」

「どうして分かるの？」

「・・・あいつはお前のこと嫌ってんだろ。大体、あいつの性格上、そんなの同意するはずがない」

水無瀬が目を細めた。

あたしは宮谷君の言葉に心の中で全力に頷いた。さすが！ よく分かってらっしゃる！

「だから俺が無理矢理キスしたと・・・」

「それ以外に何がある」

ふう、と水無瀬が溜息をついた。

・・・っていうか、さっきからこいつ全然自分の素を隠そうとしてないんだけど・・・。宮谷君もそれに対して一切ツツコミは入れてこないし。あたしに散々脅しかけてまで口止めしてたくせにその緩さはなんだよ！ バレてほしくないんじゃないかねえのかよ！

眉間にしわ寄せて睨みつけて来る宮谷君に、水無瀬はただスツと

視線を合わせただけだった。

「．．．その通りだ、って言ったら？」

バキィッ！！

水無瀬の顔に容赦なく宮谷君の拳が当たった。あたしはハッと息を呑んで口元を覆うと、そのままあまりの衝撃に後ろに飛んだ水無瀬とバツチリ目が合ってしまった。

あたしの姿に瞬時に水無瀬の目が大きく見開かれた。口の端から血が垂れているのを見てあたしも目を大きく見開く。あたしに対して水無瀬が何かを言おうとした様子だったけど、宮谷君がそのまま寄って来る姿に舌打ちをして立ち上がった。

「つてえ．．．」

「ふざけんじゃねえよ！ 周りの奴らには優しい振りをしやがって、本当はそんな奴だったのかよ、水無瀬！！」

振り返ればあたしがそこに立っているのが見えるような位置だけど、今の怒り狂った宮谷君の目には水無瀬しか映っていなかった。水無瀬も水無瀬でキッと宮谷君を睨みつけていた。

「薄々気づいてたんじゃねえのかよ、お前も」
「っ！」

瞬時に声が低くなって口調が変わった水無瀬に、さすがに宮田君が僅かに動きを止めた。だけどそれもつかの間、全てを呑む込むと殺す勢いで水無瀬を睨みつけていた。

「薄々はな。塾でのお前はもっと口調が碎けた感じだったのに、ここにいるお前はちっともそんな雰囲気は見せねえから、変だとは思ってたんだよ」

嘲笑うかのように宮谷君が鼻を鳴らした。

「はっ、なんだよ。猫かぶってたのかよ。道理でおかしいわけだ」

「……………」

「……下衆野郎が。猫かぶって全員を騙してる上に、女に無理矢理迫るような行為をする男だったのかよ。くそが、幻滅だよ」

「……お前に幻滅された所で痛くもかゆくもねえよ」

ドゴツ、と今度は宮谷君の拳が水無瀬の腹に向かった。けど、寸での所で水無瀬が避けたから、その音は宮谷君の拳を水無瀬が受け止めた音だった。思わずあたしが鋭く息を吸うと、そこではじかれたように宮谷君がこちらへ振り返った。

口元を覆って目を見開いているあたしの姿を見つけると、時が止まったかの様に一瞬全員が動かなくなった。

「……………あり、が……………」

だけどやはりというかさすがというか、水無瀬が止まった私達の中で最初に動いた。掴んでいた宮谷君の拳を離すと、そのまま彼の前から退いた。はっとして宮谷君が水無瀬の腕を掴んだ。

「おいっ！　話はまだ終わってねえよ！」

「有賀がここにいる状態で何を話せて？」

「．．．っ！」

水無瀬の言葉に宮谷君は言葉を詰まらせた。それから一瞬悔しそうな表情を浮かべたけど、渋々水無瀬の腕を離した。そのままあたし達から顔を背けると、水無瀬が溜息をついた。

「いつ．．っ」

宮谷君を見ていたあたしはその声にはっとして水無瀬を見ると、顔を抑えている左手についている口元から流れた血が予想以上に多かった。

「ちょ、水無瀬っ！　あんた、大丈夫！？」

「対したこと、ねえよ」

とか言いながら思い切り顔しかめてるよ！

見せてっ、と言いながら思わず水無瀬の両頬を自分の手で包むと、それを見た宮谷君と水無瀬が目を見開いたのに気づかなかった。宮谷君に殴られたことで口の中に相当大きな切り傷ができてしまったのか、口元には結構な血の量がついていた。この様子だと口の中はもつと酷いな・・・。

水道！　と言いながら水無瀬の身体を翻すと、廊下にある水道に水無瀬の背中を押す。しかめっ面をしながらも口の中の血を洗い流す水無瀬を見ながら、はっとして今の自分の状況を思い返してみた。

・・・あれ。あたし、今宮谷君と水無瀬が解いた誤解を、また招くようなことしちゃってるんじゃないか・・・？

そろっと宮谷君の方を振り返ると、案の定困惑した表情を浮かべている。

「え、あ、みや？」

「有賀は、水無瀬の猫かぶりのこと知ってたの？」

予想していたことと違うことを聞かれて度肝を抜かれた。

「は？　え、あ、えと、う、うん」

「・・・いつから？」

「い、いつから？　えと・・・い、一ヶ月くらい前、かな？」

瞬時に宮谷君の眉が寄る。

「．．．あんなキスもされてたつていうのに、誰にも言っていないかよ．．．」

「．．．．あ、いや、あの．．．」

誰かに言つたらキス以上のことをやられるとはさすがに言えない。というか、あたしも別にそれが理由でバラしてないわけじゃなくて、猫かぶつてゐる理由を知つたからには．．．なんとなく、バラすのはやるせないっていうか．．．。

黙り込んだあたしの背後で、水無瀬がバシヤバシヤと音を立ててからキュツと水道の元を締める音が聞こえた。そのわざとらしい音に宮谷君がキツと水無瀬の方を見る。

．．．とことん嫌われたぞ、水無瀬。

「そ、それにはいろいろわけがあつて．．．」

「．．．．信じらんない。こんな奴の事情に振り回されるなんてどこまでお人好しなんだよ、有賀」

「．．．そ、それは自覚してます．．．」

「．．．．．」

俯いてしまったあたしを宮谷君がじつと見下ろすのが分かる。黙り込んでしまつて、この沈黙に耐えられずにあたしが顔をあげると、宮谷君はあたしの目を真つ直ぐと見てから盛大に溜息をついた。

「．．．あり得ねえ．．．。俺達ずつとあの猫かぶり野郎に振り回されてたのかよ。マジで信じらんない」

猫かぶり野郎という単語に対してあたしも水無瀬も何も言わないと、宮谷君はもう一度溜息をついてから踵を返して階段を降りて行く。水無瀬の方を振り返ってから、洗い残していた血を見て再び水を流し始めたのを良い事に、あたしは慌ててその宮谷君の後を追った。

下の階についてまたもう一階降りようとしてる所を慌てて呼び止める。

「みやたにくんっ！」

ピタッと動きが止まって、そのまま振り返った宮谷君は、やけに疲れきったように見えた。

「・・・何？」

「あ、あの・・・こんな、こんなこと言うのもふざけてるって思うかもしれないんだけど、水無瀬が猫かぶってるのは他の人に言わないでほしいの！」

「・・・なんで・・・」

予想通り宮谷君が困惑に満ちた顔を浮かべる。

当たり前の疑問だ。宮谷君はあたしと水無瀬がキスしてるのを目撃してる。それが水無瀬に無理矢理されたキスだということも知ってる。そんな無理矢理キスされた張本人が、キスをした奴の秘密をバラすな！ というのは、おかしいと思うのは当然のことだった。

・・・だけど、

「．．．水無瀬が猫をかぶってるのには、その．．．結構複雑な理由があつて、家族とかも絡んで来るから、だから．．．バラさないで欲しいんだよね」

「．．．．．」

「あたしがこんなこと言うのもおかしいのは分かってるんだけど、でもお願い！　結構．．．結構複雑だから．．．」

さすがに本当の理由を教えるわけにはいかないから、これしか言えないけど．．．。分かってくれ、宮谷君！！

目の前にいる宮谷君が溜息をつくのが聞こえた。

「．．．本当にどこまでお人好しなんだよ」

「．．．．．分かってるけど．．．」

「安心しろよ。別に誰かに言うつもりはなかったし。言った所で信じてくれる人なんて殆どいないと思うよ？」

「．．．．．」

．．．それは、確かに一理ある。特に女子にそんなこと言ったらただの男子の嫉妬だとか思われて終わらだろうな．．．。そこらへんも含めてあんな優しい猫かぶってるんだろうか、あいつは。

黙り込んだあたしにふつと小さく宮谷君が笑った。

「．．．いろいろやられたよ」

「え？」

「……お前と水無瀬が仲いい理由がやっと分かった気がした」

「……いや、あの、仲良くないし……」

「お前らにそういうつもりはなくても、共有の秘密を持つてる以上、話す事も多くなるだろうし、協力関係も成り立つだろう？　それがいくら無意識だったとしても。だから周りからは仲が良さそうに見えるんだな」

「……なんか、いろいろとごめんね、宮谷君」

宮谷君が苦笑を浮かべる。

「お前が謝ることはないよ。悪いのは全部あいつだと思ってるし」

「．．．それには同意する」

「ははっ。．．．じゃあな、気をつけて帰れよ」

「……うん。宮谷君もね」

小さく笑つて宮谷君が階段を降りて行く。その後ろ姿をしばらく眺めてから、はあ、と大きく溜息をついた。

・ ・ ・ とんでもないことになっちゃったなあ ・ ・ ・

思いながら来た道を戻つて、階段を上つて行くと、柱に寄りかかっている水無瀬がこちらを見た。

「……バカじゃないの？」

「
・
・
・
はあ
？」

なんだよその第一声！ 頼み込んだあたしにほかにいうことはな

いのか！

「バカとはなんだ！ バカとは！」

「宮谷と組んで俺が猫かぶりだつてバラせば、信憑性も増すだろ。なんでバラそうって思わないんだよ」

「バラしてほしいわけ？」

「そういうわけじゃねえよ」

はぁ、と息を吐いた。

「あんたにはあんたの事情がある。あたしにはあたしの事情がある。いいじゃんそれで。言ってほしいんだつたらまた宮谷君と組んでバラすけど？」

「．．．．それはやめろ」

ふひひという不気味な笑い声をあげると、

「あ、いたああ！！ 彩那！」

ビクツとあたしも水無瀬も肩が跳ねた。驚いて声がした方へ振り返ると、稔が手を振りながら体操着でこちらを向かって来ている。．
．うわぁ、すっかり忘れてた．．。

息切れながらあたし達の所まで駆け寄って来ると、あれ、水無瀬君！ と言いながら水無瀬にも挨拶をする。ニツコリと瞬時に切り

替わった水無瀬が挨拶を仕返す。そんな水無瀬を胡散臭そうな目で見たい衝動があっただけ、今の所は心の目に任せておこう。

「どうしたの？ 稔。部活終わった？」

「それがさー、今日はなんか特別訓練であたしだけ残るらしいの。だから彩那は先帰ってていいよ？」

「えっ？ いや、いいよ、待つよ」

「いいっていいって！ 本当に六時半ぐらいまであるからさ、そんな時間まで引き止めておくのはさすがに悪いから！ あっ、水無瀬君！ この子のこと送ってやって！」

「えっ？」

「は？」

と驚くあたし達を放っておいて、稔はじゃあねー！ と手を振りながらさっそに行く。

．．．嵐のような子だなほんとに。

隣で水無瀬が溜息をついた。

「俺も今から帰る所だし、どうせ道は同じだから送るよ」

「はあ！？ あんた懲りてないわけ！？ あたしとあんたの噂が絶えたわけじゃないんだから、他の生徒に見られたらどう言い訳するつもりなのよ！」

っていかどうして人を送ることになるとそんなに律儀になるのよ！

「別に付き合っていないんだからいいだろ？ 帰り道が重なって勉強の話をしたたとも言えれば誰でも信じるよ」

「・・・・・・・・・・」

いや、まあ、確かに学年一位と二位が勉強の話をした、って聞けば納得はするかもしれないけどさ。遠くから見た人があたし達にその疑問をぶつけずに勝手に解釈したらどうするつもりだよ！とか心の中で叫んでる間に水無瀬はとっとと階段を降りて行ってしまうてる。

「宮谷とのことで話もあるから一緒に帰っても損はねえだろ」
「・・・・・・・・・・」

・・それはさすがに一理ある。
仕方ない、と腹を括って、あたしは教室に戻って鞆を掴むと、水無瀬と一緒に帰ることにした。

とあつさりと言ったものの、やっぱりなんとなくこいつと一緒に見られることに抵抗を感じたから斜め後ろについて歩いていた。それが気に入らないのか何回か水無瀬がこちらを振り返ったけど、特に何も言わなかったからあたしも気にしてない振りをした。

時間が時間ということもあつてうちの学校の生徒は全然見当たらない。学校に残る生徒達はだいたい五時ぐらいまでは部活があつて、ない人はその生徒を待っているのか、先に帰ってしまうのが殆どだから、中途半端な時間で学校から出て来たあたしと水無瀬が誰かに会う確率は非常に低い。

といつても警戒はするよ。もちろん。これ以上噂が増えたらとてもじゃないけど耐えきれない。

はあ、と溜息をつく、チラッと水無瀬が肩越しにあたしを見た。

「お前、ずっとあそこにいたの？」

「え？」

さつきから一言も話してないのにいきなりそんなことを言われてあたしは目が点。

「……すいません、もうちょっと分かりやすく言ってくれませんかね。」

「……あのー、何の話？」

「さつき。俺と宮谷が話してる時に、お前ずっとあそこにいたの？」

「ああ……えと……た、多分？」

「多分ってどういうことだよ」

「いや、二人の会話がどこから始まったのかは知らないからよく分かんないけど……あたしがいたのは二人が階段を上って来てる時

だった」

「……………」

「そもそもどうやってあんなことになったのよ」

あたしが盗み聞き（いや別にあの場合は不可抗力だよね！？）を始めた時には二人とも会話の途中だったと思うから、何がどうなつてあんなことになったのかはよく分からない。二人は部活も違うから、いくらどっちも部活の時間が同じだからって偶然一緒になつて話していたとは考えにくい。

となると、宮谷君が水無瀬を呼び出したのか、水無瀬が宮谷君を呼び出したのか……。いや、前者だな。

「……俺は今日の部活は早めに終わらせるつもりだったから、他の奴らがまだ部活やつてる間に、着替えてて、丁度更衣室から出て来た時に宮谷が俺を呼んだんだよ」

やっぱり……。

「なんだか知らないけど怒ってる様子だったから、お前関係だろうなとは思ってたけど」

「……なんで宮谷君が怒ってたらあたし関係なのよ」

「それ以外にあいつが俺に話しかけて来る理由はないだろ」

「……………」

「とにかく、最初はまあ穏やかに勉強の話とかしてたんだけど、これがどこに向かつてるのか察した俺が話を終わらせるために校舎に入っただよ。そのまま追いかけて来るから、聞きたいことは他に

あんだろ？ と聞けば黙り込んだ。そのまま俺が階段を上って行ったら、お前のことが話題にあがったわけ」

「．．．．．じゃああたし本当に悪いタイミングであそこにいたんだね．．．」

「そうだな。すげえタイミングだったな」

いや、あたしは悪いと言ったんだけど。

と、そこまで思つてより重大なことを思い出した。

「つてちよつと！ 今更だけど、あんた宮谷君に猫かぶりのことバレて平気だったわけ？」

「言つただろ。あいつだつて薄々気づいてたんだ。俺も無理にあいつの前で偽物装つてたわけじゃないし、バレても別になんともないと思つてたから」

「．．．あの．．．なんであたしにはあれだけの酷い口止めをしないで、宮谷君には何もなし？」

「お前と違つて口が軽くないから」

「．．．あんたねえ．．．っ」

「大体あいつも言つてただろ。言つた所で誰も信じてくれないってあいつはあれを分かつてるけどお前は分かてない。この違いだよ。まっ、さすがに二人で組んだんだつたらいろいろ違うだろうから確かめたんだけど」

あたしの家がある通りに曲がりながら水無瀬が言つて、あたしの口角は引きつった。

どこまでバカにしゃがるんだこいつ。

「．．．ってか、何気に宮谷君のこと結構信頼してるんだね」

「他の奴らと違ってなにかと付き合いは長いからな」

「ふうん．．．」

あたしの家の前まで来て水無瀬が立ち止まった。あたしは鞆の中をあさって鍵を見つけると、それをドアに差し込む前に車がないことに気づいた。

．．．車がないってことは、二人とも帰って来てないのかな．．．。

溜息をついてドアを開けると、お礼を言っために水無瀬の方を振り返った。

けど、あたしが何かを言う前に水無瀬が口を開けた。

「それで、正式にお前に自分の気持ちがバレた宮谷のことはどうするんだ？」

「．．．どうするって．．．」

どうするも何も、あたしには何もできないでしょう。返事が欲しいと言われたわけじゃないし、なんていうか．．．ちゃんと告白されたわけじゃないし．．．。

俯くあたしに水無瀬が眉をあげた。

「なんだよ。フラないのか」

「．．．いや、だってちゃんと告白されてないじゃん」

「でも宮谷の気持ちを知ってるってお前もあいつも分かってるじゃ

ねえか」

「そうだけど、なんか、そこであたしが返事があげるのは違う気がする・・・」

水無瀬が息を吐いた。

「好きじゃないんだったら好きじゃないってはっきり言ってやれよ。あいつもそっちの方がすつきりするだろ」

「・・・あんたは気持ちを伝えた側じゃないからそんなことが言えるのよ」

「無駄に返事を引き延ばされた方が酷じゃねえのか？」

「・・・そんなのことは、ない・・・と、・・・思う、けど」

「めんどくせえなー。そんなに深く考えずに、好きだったら好きって言って、好きじゃなかったらとととふっちゃえばいいじゃん」

キツと水無瀬を睨みつけた。

「あたしはどうしてあんたに彼女が出来るのかが時々すごく疑問だよ」

「へえ、俺の魅力が分からないと」

「はあ？ 分かりたくもないよ。大体、あたしの中では魅力という点では宮谷君の方が勝ってるよ」

「はっ、じゃあどうしても選べと言われたら、俺よりも宮谷の方がいいんだ」

「当たり前だよ！」

「へえ・・・？」

呟かれたと思うと、ズイツと水無瀬が一気に間合いをつめた。あたしが驚いて家の中に後退すると、顔に怪しい笑みを貼付けたまま水無瀬が更に近づいて来る。ボタンツとドアがしまったと思うと、グツと腰に水無瀬の腕が回された。

「ちょ、ちよっとっ！」

「じゃあお前は、」

チュツと音を立てて水無瀬が首もとにキスをした。そのまま唇を耳まで這わせると、低い声で囁く。

「宮谷にこんなこととして欲しいんだ？」

その声を聞いてあたしが身震いしたのをいいことに、口元に笑みを浮かべながら耳を甘噛みして、そのまま首もとに下がって行く。慌ててあたしが水無瀬の胸板を押し付けたけど、当然びくともしない。

「ち、違っつ！　ちょ、みなせっ」

あたしの声を見無視し、水無瀬は顎の下に口付けをすると、頬を上ってそこにもキスをする。それから、腰に回していない方の手であ

たしの頬を支えると、力強く唇に自分のを押し付けた。

一瞬酔いしれそうになった自分の理性を慌ててかき集めて、身体を動かそうとしたけど、身体どころか顔さえ動かない。がっちりと固定されてしまっている。

「んんっ！ んんっ！」

と必死に音をたてるけどそんなものにおかまいなし。水無瀬は綺麗な睫毛を伏せたままキスを繰り返す。熱っぽく繰り返されるそのキスのせいでどんどん力が抜けて行くのが自分でよく分かる。胸板を押し付けていた手からはいつのまにか力が抜けて、いつの間にか水無瀬の腕を弱く掴んでいる。

なんだか、傍から見ればとてもじゃないけどあたしが抵抗してるようには見えない気がする。

いやだからって抵抗してないわけじゃなくてっ！

と、そこまで思った所で、唇を割ってあたしの口の中に何かが入ってくる。そのままあたしの口内を浸食して、歯列をなぞると、逃げ惑っていたあたしの舌を簡単に絡めとった。

もうその瞬間に何も考えられなくなっていた。

ただ荒い吐息だけが耳に聞こえてきて、今のあたしには水無瀬が自分に触れていることしか認識できなくなっていた。

一瞬だけ水無瀬が唇を離すと、思考が回復するような気もしたけど、あたしを見て何を思ったのか、そのままさっきよりも強く唇を押し付けて来た。何度も何度も角度を変えて何回もあたしの舌を絡めとって行く。

腰に回されている腕にグツと力が入り、容易く水無瀬の元へ引き

寄せられると、そのままその腕がスツとシャツの中に入り込んだ。背中に当たる水無瀬の手が布越しではないことが分かってはいても、キスのせいで正常に考えられなくなっていた。

キスがどんどん深くなつて行き、背中に円を描いていた水無瀬の手がスツと背中をのぼつていった瞬間にカツと目を見開いた。

そのまま殆ど吸い取られてしまった力の最後を振り絞ってグツと水無瀬の左腕を押さえつけた。

ピタッ、と動きが止まったと思うと、水無瀬の唇が離れて行く。

ズザザザ、とものすごいスピードで水無瀬と距離を取ってから、荒い呼吸を繰り返す自分を必死に落着かせようとした。体中が熱くなっている。水無瀬を見上げると、なぜだか少し目を見開いていた。

だがそんなことはどうでもいい。

「あんだ、今何を、しようしたのよ!!」

「・・・何って?」

「とぼけるなあああ! 思いつきり人のぶ、ブラのストラップを外そうとしてたじゃねえかよ!!」

「だったら?」

コ・ロ・ス。

「もう出てけえええ!! 早く出てけえええ!! 送ってくれたことに感謝をする気も起きないわ!!!」

「言われなくても出て行くよ。宮谷への考え方は、今の俺のおかげ

でずいぶんと変わったろ？」

「失せろおお！！！」

絶叫するあたしにニヤリと口角をあげたまま、水無瀬は玄関のドアを開けて外へ踏み出した。

あたしは目に涙を浮かべながら口の中で呪いを繰り返していて、一通り呪いを繰り返してから今起こったことを思い返してみた。瞬時に体中が熱くなる。

．．．いや、いやいやっ！ 別に全然！ 全然違うし！ 嫌じやなかったなあ、とか思ってないし！ 思ってないからっ！！

ああああああああ．．．、と弱り切った声を吐き出してあたしは床に突っ伏した。

この時、ドア越しにいた水無瀬が今の行動に自分自身が驚いていたということ、あたしは知る由もなかった。

嫌じゃなかったとか断じて思っ
てない。思っ
てない。（後書き）

。 一人称だと他人の考
えてることが書け
ないからちょっと大
変・・・

ここまで読んでく
れてありがとうございますorz

閑話 水無瀬愁也の有賀彩那への第一印象（前書き）

ああもうつ．．ずいぶん前からこつこつ書いてたのにこんなに
も遅れてしまった．．。
ごめんなさい！

閑話 水無瀬愁也の有賀彩那への第一印象

有賀への第一印象は『宮谷が好きな美人』だった。一見、普通に見えることは見えるのだが、誰かと並ぶことで、あいつの美しさは際立ったと思う。そこそこのいい方だと思う他の女子と並んでいるのを見た時に、はじめて『美人』だという印象を抱いた。

塾で何回も宮谷が話題にあげるため、クラスは違うが、何かと興味深く、俺は有賀がどういう人物なのかを観察しようと思ったのだ。観察していればするほど、有賀彩那という人物は美人である自分の容姿に関して全くの無自覚だというのが分かった。あの容姿に兼ね備えて、強気で常識人という性格があつて陰ではそれなりに人気な方なのにも関わらず、自分がモテることを知らないのを見ると、そんなことを思う程の人数に告白はされることがないということなのだろう。違うクラスである俺のクラスメートの間でも、入学してばかりだというのに話題にあがるぐらいの人物であつたため、それはそれで意外な印象だった。

だが、有賀に対して感じたのはこんなもので、結局『宮谷が好きな美人』から印象が変わることはなかった。

そんなことを思うのも束の間であり、俺の有賀への印象は一学期の定期テストの結果発表を見たことで変わることとなる。

自慢ではないが、俺は昔から勉強はよくできるタイプだ。分からないことがあれば、説明を一回聞くだけで全てを理解できる。既に自分のクラスの中では『秀才』として知られていて、ほかのクラスの奴らでも俺に勉強を教わりに来る奴らは多かった。

そのため、一位から五十位の点数が書き記された紙が廊下に張り出された時、一位に自分の名前があつたことに対してそこまで驚くことはなかった。

だが、二位に記された名前を見て、僅かに目を見開いた。

「あ、彩那っ！ あったよ！」

隣から上がった嬉しそうな声に少し視線を向けると、隣のクラスの立原稔が目を輝かせながら俺の後ろに向いていた。その視線を追うと、有賀が三十位ぐらいの所を一生懸命見ていたが、立原の声にはじかれたように顔をあげると、すぐさまこちらに向かつて来る。

自分の名前が二位にあるのを見て目を見開いたけれど、飛び上がって喜ばないことから上位であることに對してとても驚いているようには見えない。ということは、自分の頭の良さに対してある程度自信はあったということだろうか。何よりも当の本人よりも立原が興奮していたからなのかもしれないが。

「すごい！ 二位だよ二位！ やっぱり彩那は頭がいいんだよ！

三十位なんかにいるわけがないと思ってたんだよね！」

「・・・そういう稔こそ五位なのはどういうこと？ テスト期間中一回も勉強してる所を見た事がないんですけど」

「私は一回聞けばすべてのみこむ生まれつきの天才型だから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

笑顔を浮かばせたまま立原が言うと、有賀は溜息をついて成績表を見つめた。

正直言つて、有賀と俺の点数差に對して俺は驚いていた。たくさんの人に勉強を教え込みながらも自分の勉強が簡単に出来て、なおかつ便利な脳をしているため、一位になってもならなくても、一つ順位が下の人とは圧倒的な点数の差をつけられると思っていた。し

かし、俺と有賀の点数差はたったの五十点だ。三位である神楽は有賀と百点も差をつけられており、四位の遠田、五位の立原も同じ様な点数差であるにも関わらず、有賀だけは俺のすぐ後ろについていた。

確かにこの時に興味を持ったのかもしれないが、俺の有賀への印象は『宮谷が好きな頭のいい美人』としか変わることはなかった。

「一位は水無瀬君かあ」

「知ってるの？」

「知ってる、ってあんた．．．。すぐ後ろにいるんだけど」

立原の言葉に有賀が驚いて振り向くと、俺は少し困った表情を浮かべながら彼女を見た。俺の姿に有賀は目を見開いてから、成績表を見て、再び俺を見た。

「あ、ごめんなさい！ まだ全員の顔を覚えてなくて．．．」

「大丈夫だよ。俺も全員知らないし」

ニツコリと微笑むと、有賀も小さく微笑み返した。

．．．この瞬間『宮谷が好きな頭のいい美人』ではなく『すごく美人』に印象が変わったということは俺の中にとどめておく。

「有賀さんでしょ？ 百人以上いるのに二位なんてすごいね」

「そんなこと言ったら水無瀬君はその百人以上の中の一位だからもつとすごいよ？」

「ははっ、そんなことないよ。きつとたまたまだつて」

「またまたー！　ねえ、よかったら勉強教えてよ！　学年一位から勉強を教えてもらえるほどいい勉強方法はないから」

嬉しそうな顔で聞かれては、猫かぶつてる以上断ることは出来ず、俺は面倒くさいと思いながらも首を縦にふった。

「うん。いつでもいいよ」

「ありがとっ」

これが、有賀彩那との初めての会話だった。

違うクラスということもあって、有賀との交流は所謂『勉強会』以外で増えることはなかった。そういう『勉強会』でも会話することとは殆どなく、学年一位と二位が共に勉強をすると嗅ぎ付けて来た奴らが加わったこともあって、俺と有賀、そして気晴らしについてきた立原は、そんな奴らに勉強を叩き込んで行くだけだった。

有賀と共に勉強していて気づいた事は、教えられる全ての物事を簡単に呑み込むことができるということだ。他の奴らには何回も何回も同じことを繰り返して一つ一つ丁寧に教えて行かないといけないが、有賀の場合は問題の解き方を大体説明すると、納得した声をだして簡単に解いて行くことが出来るのだ。また、解き方さえ分かれば、応用問題を出されても、深く考え込まずにスラスラと解けるのだ。この時思ったのは、頭がいいというよりも、有賀は頭の回転が非常に早いのだろう。頭の回転が早いために大体の解き方が分か

れば全ての段階を説明しなくても推測して解けて行けるのだ。だから応用問題も対して難易度が上がったと思う事もなく、簡単に解けるだろう。

俺にはないその頭の回転に、確かに少し尊敬の念を抱いた。

「なあ、水無瀬と有賀って付き合ってたの？」

初めてこれを聞かれた時は一年生の三学期に突入した時だった。そこまで交流があるわけでもない（というよりも共に勉強する以外に殆ど話したことがない）のに、そんなことを言われた時は心底驚いた。

は？　と思わず素で答えようとした所を、その質問をして来た田辺滉太が眉を寄せたまま更に質問を投げつけて来た。

「なんか噂で回ってたんだよ、もうずいぶんと長い間秘密で付き合ってるってきいたけど？」

「えっ、その噂の根源はどこ？」

答えに寄っては素で殴り込みに行くぞ。この噂が宮谷の耳に入ったらどうしてくれるんだよ。

と思っていると、田辺が更に困惑した表情を浮かべた。

「さあ。気づいた時にはもうずいぶんと回ってた噂だったし…。有賀に聞くのは怖いからお前に聞くことになったんだけど」

「・・・・・・・・」

三学期にも入れれば、大体の人物の性格は掴めて来る。俺は完璧に猫をかぶっているというのもあって、男女関係なく温和で優しく、運動神経も抜群で頭もいい完璧なイケメンとして全校生徒の中で認識されている。後半の三つは本当だとして、最初の二つは姉貴が聞いたら笑ってしまうような言い方だ。俺としてはそう認識されるために猫をかぶっているため、なんら問題はなかった。

だが、有賀は違う。

最初は頭のいい美人と全員に認識されていた有賀も、段々とその強気で真っ直ぐな性格を現すようになっていた。三学期に入ってから三人に告白されたと聞いたが、どれも『ごめんなさい。好きじゃない人とは付き合えません』という一言でどん底に突き落とされているらしい。曲がったことも嫌いであるらしく、一度裏庭でタバコを吸っている男子生徒を見つけては、タバコがもたらす悪影響を延々と説教したあと、聞く耳を持たない三人にバケツに入った水を盛大にぶちまけたらしい。そんな彼女に怒った三人に一瞬たりとも怯まず、逆に大声で怒鳴り返ししながら、立原が止めに入るまでずっと怒っていたと聞いた。

その話が耳に入った時は声をあげて笑いたくなった。第一印象はまったくもってそんなものではないため、どんな人物も露になって来る彼女の性格には驚いている様子だった。

「で？　どうなんだよ」

黙って考え込んでしまった俺に、田辺が先を促すように言った。はっとして田辺を見て、俺は首を横に振る。

「どこからそんな噂が發展したのかは知らないけど、完全にガセネタだから」

「あ、マジで？」

「マジで？　ってどういうことだよ」

「いや、お前らって一緒に勉強するくらいだからそんな仲に發展しててもおかしくないって思ってる奴らが多くてさ・・・」

田辺の言葉に今度こそはあ？　と素で返してしまった。

「一緒に勉強つて、俺と有賀さんの二人きりなんて絶対ないよ？

必ず五人ぐらいが勉強会のために集まって来るし」

「なんだ、そんなもんか」

「うん」

つまんねえの、と言いながら田辺が去って行き、俺は溜息をついた。噂が立っているのに対して驚いたのは本当だ。だが、そんな噂がたつのも無理はないかもしれないと、俺は考え返してみた。

言わずもがな、俺は完璧超人美少年として成り立っている。有賀の方も性格はともかく、それ以外ならば完璧なステータスを誇っている。美人であり俺の次に頭が良く、運動神経もいと聞く。そんな二人が揃って勉強をしていれば、人というものは噂をたてたくないものらしい。

再び溜息をついてふと教室の外を見ると、宮谷がこちらを見ていた。

早速きたか、と思いながら腰をあげて、目でこちらを呼んでいる

宮谷の側へ寄った。宮谷は階段の近くまで俺を寄せてから、周りを見回しながら口を開いた。

「噂で聞いたんだけど、お前と有賀が付き合ってるって本当？」

案の定有賀のことを聞かれた俺は、呆れて首を横に振った。

「付き合っていないから。完璧にガセだよ。有賀さんから聞いたんじゃないの？」

「いや、なんかそんな噂が回ってることすら知らなかったっぽいから聞いてないんだけど・・・」

「・・・え、聞いてない？俺なんて聞いてくる人はお前で二人目なんだけど」

「うえ、マジ？　ってことは無意識のうちに全員が有賀に聞く事は躊躇ってるってことか？」

「そうじゃない？　さっき田辺に聞かれた時也有賀さんが怖いから聞けないと言ってたし」

「そうか・・・じゃあ、付き合っていないんだな」
「付き合っていないよ」

あからさまにほとした表情を浮かべた宮谷に思わず笑ってしまふ所だったが、寸での所で押し留まる。

「・・・そんならなんか、悪かったな、水無瀬」
「いや、別にいいよ」

言つと宮谷は笑つてもう一度だけ悪い、と言ひ残して教室へ戻つて行く。

と、そこで入れ違いのように有賀が教室から出て来た。噂をしていた本人の登場に僅かに目を見開くと、こちらに気づいた有賀が笑みを浮かべながら手を振った。

周りの人達の視線を感じ取りながらも引きつった笑顔で手を振り返すと、あるうことが有賀がこちらに歩み寄つて来た。

．．．本当に噂のこと知らないんだな。

「二学期ぶりー、水無瀬君。定期テストに向けて勉強してる？」

「二学期ぶり、有賀さん。毎日予習、復習してたらわざわざ勉強しなくてもいいような気がするから、正直あんまりしてないかな」

「あははっ。分かる分かる。あたしも全然勉強してないんだよねっ。もちろん予習、復習はかかさずやってるけど。おかげで稔にはガリ勉と命名されちゃったわ」

少しむくれて言う有賀に笑いを零すと、有賀も少し笑った。

「そういう立原さんはどうなの？」

「あの子は天才型だから勉強なんてしなくても余裕でテストで高得点取れるのよ。頑張つて勉強して上位キープしてるあたし達に取っちゃム力つく現実よね」

「ははっ、そうだね」

と、そこまで話してからふと有賀の教室に目をやると、宮谷が友人と話ながらさり気なくこちらをチラチラと見ていた。

．．付き合っていないと言ってる側から．．．これはちょっとヤバイ。

誤解されないように俺は素早く有賀から離れることにした。

「とにかく俺はそろそろ戻らないといけないから、有賀さんも戻ったほうがいいよ」

「え、あ、そうだねっ。引き止めてごめん、またね」

笑いながら手を振って去って行く有賀に俺も小さく手を振り返す。そのまま有賀が教室に入ると、俺は溜息をついた。

この日以降、どうして有賀の耳に噂が入らなかったのかはまったくの謎のままに終わった。

考え事すらする暇をくれないのが学校生活というもの。(前書き)

ああもつ煮るなり焼くなり蹴るなり殴るなり好きなようにしてください！

考え事すらする暇をくれないのが学校生活というもの。

「で？ 彩那は参加するの？」

稔の声にあたしははっと我に返った。目の前で稔が首を傾げながらこちらを見ていて、何やら質問を投げかけて来たようだった。

．．．正直全然聞いてなかった。

「え、あ、何の話？」

「私の目をはつきりと見つめながら会話してたのに『何の話？』はねえだろーよおい」

「ごめんって！ ちょっと考え事してて！」

すつと稔が目を細めた。

「へえ．．．。考え事ねえ．．．。一週間も私の言う言葉が耳に入らないぐらいのふかー．．．．．い考え事だったらぜひとも聞きたいわね。言ってごらん？」

「いや、だから．．．ごめんって．．．」

「答えになってない。言いなよ」

「言わないよっ」

「言えよ」

「言わないよ！」

ムキになつて返すあたしに稔が訝しげな表情を浮かべたけど、それ以上深く追求してもあたしが何も吐かない事を推測したのか、諦めたように溜息をついた。

悪いね、稔。これの理由だけは本当に言えない。

考え事というのは言うまでもなく水無瀬と宮谷君のことである。

実はこの一週間、殆どどちらとも口を聞いていない。宮谷君はともかく、水無瀬があたしに話しかけてこないことはさすがに想定外だったかも。いや、水無瀬のことだからこの前の事件（あたしと水無瀬が付き合ってるだのどーのこーのの事件ね）があつたとしても、『知ったこっちゃねえよ』という感じであたしを怒らせるためにわざと話しかけてきたりすると思つてたから。なんていうか、拍子抜け？　つていつても決して残念だと思つてるわけじゃないんだけど。どつちにしろ、あの噂について追求して来る人がなぜか全然いなかったこともあつて、ここ一週間あたしは（外見的には）平和に過ごしている。

「で？　何の話をしてたの？」

聞くと稔がこちらを睨み上げた。

「本当になんにも聞いてなかったんだね」

「だから謝ったじゃん！」

といつてもやっぱ稔は不機嫌そうに眉を寄せた。

「あのね、もうすぐ藤祭ふじまつりでしょ？」

稔の言葉にあたしは、ああ、と思わず声を漏らした。そういえなそんな時期になっていたなあ。

藤祭とは、他の学校で行われるいわゆる『文化祭』というやつだ。なぜあたし達の学校も文化祭という名ではないのかは疑問だけど、どうやら文化祭だけじゃあたし達の個性が出てないから、藤ヶ丘の『藤』をとって『藤祭』としたらしい。『祭り』っていう命名のせいで、どっかの神社で行われる祭りなんじゃないかと思いついてしまった人も少なくない。

それでもここらへんじゃ何かと評判で、去年もものすごい数の人達が来てくれていた。

そんな藤祭の時期があるために、今やどのクラスも出し物やら何やらを決めているのだ。この出し物を決めるのがなかなか大変で、クラスの全員が一致するような出し物は存在しないから、ものすごくめめ事となってしまうことも多々ある。あたし達のクラスも去年はお化け屋敷にするのか喫茶店にするのかものすごく抗議したもんなあ。

結局はお化け屋敷になって、一応『現実味』が一番あった出し物だって絶賛されたから結果オーライだったけど。

あたしが、そんな時期だねえ、と呟くと稔がうん、と頷いた。

「それで、うちの出し物なんだけどね？」

「おおっ、決まってるの？」

「うん。本当に私の言う事何も聞いてないんだね」
「．．．いや、あの、本当にすみませんでした」

極上の笑顔を浮かべて言われると本当に申し訳なく思いながらも
のすごく怖いです。

「昨日クラスで話し合ってたんだけど、当然彩那は聞いてなかった
からまた一から説明するよ？」

「はい．．．。あの、お願いします」

「私達のクラスは演劇部の子が多いってこともあって、演劇に決定
しましたー」

「．．．演劇？」

「うん。やだ？」

「全然そんな滅相もございません。ただ、去年のやり方とか出し物
とかを考えると新鮮だなあ、って思っただけですはい」

普段は逆の立場なのになんだろっ、この威圧感。

「私もそう思ってたんだけど、新鮮なものいいんじゃないかと思って」
「まあね。誰もあんまりやったことがないから、毎年来る人も楽し
みにするかもしれないね」

「でしょ？ で、その演劇に彩那は参加する？ って聞いてたわけ」

あっ、それで冒頭に戻るわけか．．．。いや、それは申し訳なか
った。

それにしても、演劇ねえ……。別に演技するのは嫌いじゃないけど、なんつっても経験があるわけじゃないし、演劇部が多いんだからやっぱりその子達に任せた方がいいのかな……。

考え込むあたしに、その反応が想定内だったかのように稔が話した。

「実はね、今年から評価の制度が変わったんだよ」
「え？ 出し物への？」

うん、と稔が頷いた。

「全ての出し物に寄って、評価される場所が違ってた。うちは演劇をやるって言ったらメインで評価される点は三つあるって言われて……」

「へえ……。で、その三つの評価を合わせて総合評価が高ければ高い程優勝、ってこと？」

「うん、そんな感じ」

それは面白そうだ。去年の藤祭はただの売り上げで評価されていたから、あまりお客さんが来ない、場所的に不利な所で出し物をしていて、本当に面白い出し物だったりとか、おいしい食べ物を出していた喫茶店とかはそれほど評価されていなかった。あたし達のクラスもあくまで『現実味がある』って絶賛されただけで、そんなにすごかったのに優勝候補にすら入ってなかったからね。

新しい制度が入ったからには、結構平等に評価されるようになる

ってことかな。

「面白そうだね。どんな感じで評価されんの？」

「おっ、よくぞ聞いてくれた！」

ビシッと稔が人差し指を立てた。

「一つ目！ その演劇のテーマをどれだけ観客に見せることができるのか、どれだけ気持ち伝えることができるのかを評価する『表現力』！」

「ほうほう」

「二つ目！ 演劇の中にキャラクターにどれだけ役者を合わせるることができるのか、どれだけその役者がその役柄に合っているのか、台詞の言い回しは確実か、などを評価する『構成力』！」

「へえー」

「そしてこの一番最後が一番重要なの！」

指を三本立ててから稔はキッとあたしを見た。

「いい？ 彩那。この最後の評価は一番彩那に頑張ってもらおうと思ってるから」

「はい？」

「この最後の評価はどの出し物も評価される、ズバリ『ビジュアル』！」

休み時間の教室の中で響き渡った稔に声に、あたしは眉をあげた。

「．．．それって差別じゃない？」

「差別じゃないよ！ 現実よ！ どれだけ内容がよくても、見た目がよくなきゃ誰も見ないじゃない！」

「．．．そりゃそうだけど．．．」

さすがに外見にこだわるって酷くないか？ お化け屋敷とかどうやって評価されるのよ。どれだけ外見が怖い？ それともどれだけお化けをやってる人が綺麗か？

ビジュアルがどうして全出し物共通の評価なんだろう．．．。

「そのどこにあたしが入るわけ？」

「彩那には、絶対に何回もステージに出る人の役を演じてほしいのよ」。出来れば主役とかねっ」

「．．．なんでよ」

「彩那が美人だから」

．．．音譜つけたよこいつ。

「その台詞を否定すると同時に、ちつとも演技をしたことがないあたしを主役ってどういうことよ。普通に考えて演劇部の子でしょ」

「だめなんだって！ ビジュアルを考えると彩那しかないんだよ！」

「あのねえー。可愛い人なんて他にたくさんいるでしょーよ?」

「でも綺麗の部類に入るのは彩那だけなんだって!」

「稔だって充分綺麗でしょ? 自分で主役かって出ればいいんじゃない? 稔だからみんな許してくれるよ」

「私は監督だからだめ」

「……なんですと?」

「……監督? あんたが?」

「何よその言い方」

「いや、だって……」

宇宙一の面倒くさがりやの立原稔が監督をするって……どうしよう。明日は地球最大の台風でもくるんだらうか。

「まさか、立候補したの?」

「そうだけど?」

変更。明日は地球が減びるのかもしれない。

「……大丈夫? 熱とかない?」

「……いつも疑問なんだけど、彩那の中の私ってどこまで面倒くさがりやなの?」

「少なくとも、ジュースを買いに行くのが面倒くさいから、冷蔵庫

の中の飲み物を飲み干してわざわざお母さんに買いに行かせるぐらいには・・・」

「そっちの方が遥かに面倒くさいし！」

「うそ。冗談。でもそれぐらいの例が出るくらいには面倒くさがりやのイメージがある」

「・・・酷すぎる。それが親友に対する態度？」

「いや、だって稔が普段からそう思わせるような感じなんだもん」
「もん、とか可愛く言っな」

はあ、と溜息をつきながら稔は机の中から一枚の紙切れを取り出した。

身を乗り出して覗き込むと、あたし達のクラスの何人かの名前が書いてあった。

「何それ？」

聞くと、稔はシャーペンを取り出してリストの一番下に『有賀彩那』という名前を付け足した。

・・・っておい。

「ちょっとちょっと稔さん。何やってんですか？」

「見ての通り、あんたを主役候補にしてるのよ」

「やめてよちょっとほんとに」

「抗議は一切受け付けません。監督である私が決めた以上、彩那には素直に従ってもらうからねっ」

呆れて何も言えないあたしの表情を見て稔は笑い声をあげた。
ってあれ。ちよつと待って。

「ちよ、ちよつと稔！」

席を立つた稔に慌てて声をかけると、何？　と言いながら振り向いた。

「ビジュアルってことは、．．．水無瀬、君も参加するの？」

あたしが聞くと、稔が驚いて何回か瞬きを繰り返した。
それから、

「何言ってるの？　当然でしょ」

ですよー。

学校一のイケメンとまで言われる水無瀬が、ビジュアル評価のために出ないんだったら何に出るんだ、って話だもんなー。

「やっぱりね、あそこまでイケメンとなると水無瀬君も中心人物の一人にしてあげたいのよねー。出来れば彩那とセットで」
「やめい」

「という抗議は受け付けないと言ったはず。んー、どうしようかなあ」

「．．．っていうか、何の演劇するのは決まってるの？」

「決まってるないよ」

うわー。即答したよこの子。

「決まってるないのに配役してどうすんのよ！　っていうかむしろ配役じゃなくね？」

「何言ってるの！　誰が何の役をするのかを決めてから、その人達に一番合うキャラがいる演劇を選ぶのが常識！」

「違うでしょ！」

とあたしと稔が言い争っていると、ガラッ、とドアが開いた音がした。条件反射であたしも稔もそちらに視線を向けると、水無瀬が誰かに何かを言ってから教室の中に入ってきた。

瞬時に睨みつけるあたしとは正反対に、稔はおおっ！　と声をあげてから水無瀬の所に駆け寄った。

「水無瀬君、良い所に！」

「どうしたの？　立原さん」

世の女子全員を虜に出来る様な笑顔を浮かべた水無瀬に対して、その場で溶けなかったのはきつとあたしと稔の二人だけだ。それも笑顔を向けられた張本人なのに頼も赤らめないって．．．。稔、

とことん水無瀬には異性に対しての興味はないんだな。どっちかといえ、新しく入った商品が超人気だったことをすごく嬉しがってる店主のようだ。

「あのさ、私達のクラスは演劇やるって言ったじゃん？」

「そうだね」

「んで、その演劇で評価される分野が三つあるって言ったでしょ？」

「うん。表現力、構成力、ビジュアル、だっけ？」

「そうそう！ 誰かさんと違ってよく聞いているね！」

おい。

「それがどうかしたの？」

「水無瀬君には、ビジュアル評価のためにぜひとも中心人物の役をやってほしいのよ！」

稔の言葉に水無瀬はキョトンとした。そりゃそうだ。

それでもその言葉を呑み込むと、水無瀬は苦笑を浮かべた。

「それって差別じゃない？」

「彩那と同じこと言わないでよー。これは現実よっ、現実」

あたしの名前を出すと、水無瀬が僅かに目を開いてからあたしに視線を移した。頬杖をつきながら二人を見ていたあたしはそんな水

無瀬と目が合うと、思い切り睨みつけてやった。少しだけ水無瀬の目が細められた。

「有賀さんもビジュアルで参加するの？」

「そうよ。美人だからねっ」

「確かにそうだけど、立原さんも充分綺麗なんだから何かの役できるんじゃない？」

「口の上手い男だね！」

笑いながらバシバシ水無瀬を叩く稔。 . . . どのおばさんだあんたは。

「でも私は監督だからだめ。さすがに役も監督も同時にやるっていうのは素人の私にはきつと無理だし」

「そう？ まあ、立原さんがそう言うんだったら無理強いはいしないけど . . . 」

「ってことで、やってくれる？」

「まあ、俺でよければなんでもいいよ」

「よっしゃ！ サンキュー水無瀬君」

張り切って来た！ とか叫びながら教室を飛び出して行く稔にあたしは溜息をついた。変な所で火がつくんだよなあ、あの子。普段は何事も興味なさそうに振る舞ってるっていうのに。

稔の後ろ姿を苦笑を浮かべてから見送ると、水無瀬はあたしの斜め前にある自分の席に腰を降ろした。あたしが一瞬だけ視線をやるのと、水無瀬がこちらを見ていて驚いて目を見開いてしまった。水無

瀬はそれを見ても得に何も言わずに前を向くと、それ以降あたしの方を見ることはなかった。

稔が役者を全員決め終えたのは放課後になってからだ。相変わらず稔を待ちながら教室で勉強をしていたら、決まったあああああとか叫びながら稔が教室に転がり込んで来た。

ビクッと肩を揺らしたあたしをおかまいなしに稔は机に紙を置くと、シャーペンで何かを書き込みながらベラベラと話し始める。

「役者は全員で二十人！ エキストラとかはクラスのみんなにやつてもらおうとして、中心人物が少なくとも四人はいるような演劇を選ぼうかなー。そして三角関係。巻き込まれるのは死んでも嫌だけど、見るのは楽しいから絶対に入れたいわねー」

「それは誰かを指しての言葉？」

「だけどなあ、四人となると男二人女二人ってどこか。．．チツ、宮谷も美里も違うクラスだから無理か．．」

「っておい！」

何を企んでたのこいつ！ 誰だよ稔の監督立候補に賛成した人は！

「っていうか疑問なんだけど！ どうして稔が配役決めなわけ？

他の役員はどうしたのよ、他の役員は！」

「いることはいるけど、やる演劇を決めるのは私だから、自然と配役係も私になったのよ」

「あり得ない．．」

「まあ、これも私の親友という立場になったことで受け止めてよ？

ね」

稔の言葉にあたしが彼女を睨みつけると、稔は笑い転げてから帰るーぜーと言って鞆を手を取った。

そのまま学校を出て駅で別れようとする、ふと稔があたしを見た。

「．．．あのさ、彩那に聞きたいんだけど」

「？ 何？」

「．．．．．あんたと水無瀬君の間に何かあるのかは、いつか話してくれる？」

「えっ．．．．．」

唐突な質問に何も言えずに驚くと、稔が少しだけ目を伏せた。

「私達って親友だけどさ、周りの人達が称する『親友』とはまた少し違うでしょ？ 相手を深く追求しないから私も彩那も歩み寄ったってだけで、実際私達ってお互いのことは殆ど知らないじゃん」

「．．．うん」

稔の言う通りだった。

あたしと稔は、ものすごく気が合うから親友になったわけではない。究極の面倒くさがりやである稔は、人と深く関わることを嫌ういや、嫌いというよりも苦手なだけなのだと思う。その分稔自身も人のことを深く追求しようとは思わない。あたしも、稔ほどではない

けれど、いろんな人に自分のことを話すのはあまり好きじゃない。

別に知られることで何か悪い事を言われるとか、知られたら恥ずかしいとか、そういうことではなくて……。ただ、『友人だから』という理由で、何もかもを話さなければいけないとは思わないだけだ。まあ、稔と違って親しい友人とはそれなりに話はするし、宮谷君とかにも親の話をしたのは、彼とは長い付き合いだからだ。

稔はどんなに長い付き合いの人間でも自分の悩みを打ち明けたり、自分の内面をぶついたりすることは、絶対と言っていいほどにない。あたしはそれを知ってて、稔はあたしのことを知ってて、それであたし達はこうやって一緒にいる。

お互いがお互いのことを深く追求せずに、気楽でいられる相手だったからこそ、あたしと稔の友情はこうやって続いている。

「話したくないのならいいんだ。ただ、いくら私でも、ここまで来ちゃうと気になるっていうか……。ねっ」

「……だね」

「そんな暗い顔すんなって！ 私も無理に聞きたいとは思ってるわけじゃないから！ 答えづらい質問しちゃってごめんね。んじゃ、私は明日までに劇とみんなの役を決めとくわっ。気をつけて帰ってねっ」

「ん。稔もね」

おー、と言いながら手を振って稔は駅に入ってしまった。

あたしはそのまま小さく溜息をつく、青に変わった信号を見て、道路を渡った。

翌日の朝のホームルーム。

稔はそれはもう嬉しそうな表情で教卓に上がると、チョークを持つて黒板に何かを書いて行った。書き終えてチョークを元の場所に戻すと、満面の笑みで稔は真っ直ぐとあたしに視線を向ける。

嫌な予感しかない。

「とゆーことで、私達のやる劇は『真夏の夜の夢』に決まりました！ 主要人物の四人は決まったので、発表しちやいまーす」

そのまま黒板に役柄を書いて行く稔。

「主人公のハーミア役は有賀彩那さん、ハーミアの恋人、ライザンダー役は水無瀬愁也君、ハーミアの婚約者、ディミトリアス役は村上宗吾君、そして、ハーミアの友人でディミトリアスに想いを寄せているヘレナ役を、神楽絵実さんかぐら えみにやってもらう事にしました
ー！」

稔の発表に先生を含めたクラス全体が固まる。

今のうちにこいつと絶交してやろうかな。

考え事すらする暇をくれないのが学校生活というもの。（後書き）

ということでもベッタベタな展開すみませんでした！

遅れてしまつて本当にごめんなさい！

いや、なんだか『よし！ 書こう！』とか思つてて一部書いても
そのままズルズルと引きずつて時間が経過・・・して・・・行つて・・・。

いや、もうほんつつつとくに申し訳ない。ほんつつつとくに！

来週は年末テスト尽くめなので再来週までは更新はありません！
本当に次回はちゃんと時間通りにアップします！ すみませんで
した！

こんな作者でも読んでくださる皆様には最大の感謝を！

ここまで読んでくれてありがとうございます！

あたしだつてムカつく時は本気でムカつくんだから。（前書き）

お久しぶりです。予定よりも遅れてしまつて申し訳ない。ちゃんと書いてあつたんですけど思ったより忙しかつたorz

水無瀬と村瀬つてなんかかぶるから村瀬を村上に変えさせていた
だきましたw

計画力がなくてごめんなさいorz 短い上にあんまし話は進んでないです。

あたしだってムカつく時は本気でムカつくんだから。

決めた。あたしはもうこの先稔とは口を聞かなければいいことにした。もしかしたらそっちの方が人生楽になるんじゃない!? やっべ。超名案じゃん、あたし。

「じゃあ稔ちゃん? ちょっといろいろ説明してもらおうか?」

そんなことを言いながらにつこり笑ってるあたしは現在屋上で稔と対面中。

つい十分前、ホームルームが終わった瞬間に固まる教室中の先生生徒をほっといて、稔はニコニコ笑いながら席についた。隣であたしはそんな稔を殺す勢いで見ていたけど、あたしなんて存在しないように無視しやがって。

ついでに斜め前の水無瀬があたしを見てふっと笑ったのは見逃してないからな!

稔はあたしの顔を見て引きつった笑みを浮かべている。だけど瞬時にあたしが笑みを顔から消すと、稔はすぐに視線を泳がせた。

「セツトにしたいとは言ってたけどさ、なんで恋人役? なんてよりによって、恋人役?」

「え、いや、だってほら、面白いじゃん？」

今ここでこいつを殺しやろうか。

あたしの恐ろしい形相を見た稔が慌てて取り繕うとする。

「だ、だって！ ビジュアル評価重視だから、必然的に主要人物の二人は美男美女がいいでしょ！？」

「ふざけんじゃないよ！ 今どいう噂が回ってるのか知ってる上で、どうしてああいう配役になるのよ！！」

「仕方ないでしょ！！ 他にいい役が見つからなかったんだもん！」

「もんっていうな！ 役なんて普通にいっぱいあるでしょーが！」

「だいたいハーミアとライザンダーのキャラがどうやったたらあたしと水無瀬君に合ってるっていうのよ！ 構成力はどうした、構成力は！！」

「そんなもんは捨てた！」

「捨てるな！！」

三つの部類で評価されて、その総合点で優勝するとかほざいてながらも結局ビジュアル重視どころかそれだけしか気にしてねえじゃねえか！

相も変わらずあたしが睨み続けると、開き直ったかのように稔が話だした。

「とにかく、監督には逆らえないって言ったはずだから、彩那に拒否権はない！」

「どうしてそうなのよ！ あんた本当にあたしの親友！？」

「練習は放課後から始まるから絶対に来なさいよ！ 来なかったら外してくれるかなとか思っても無駄だからね！ 外さないからね！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あたしの発言を無視した上に釘を刺された。行かなかつたら役を違う人に回すかなとか密かに思ってたのに。本当に余計な親友の分かち合いだよ。

そそくさと屋上を後にして行く稔を怒鳴りつける気力も失せて、あたしは仕方がないから放課後までは鬱憤晴らしは自重することにした。

そしてその日の放課後、午後三時半。中心人物の四名以外は決まっていないということもあって、教室の中は嫌にガランとしていた。まあ、教室の外に群がっている人達を除いたらだけど。

殆どうちの学年全員が集まってるんだだけど。そんなにあたしと水無瀬が恋人を演じる所を見たいのか。そうか。

・・・・・・・・くっそ稔！！ 絶対にいつか後悔させてやる！！

ムカムカム力という効果音をたてているあたしを無視して、稔はあたし達四人を椅子に座らせながら説明をしていた。

「最初のシーンが宮殿のシーンで、ハーミアのお父さんがハーミア、

ライザンダー、ディミートリアスを連れて殿下の前に来るから、そこからねー」

「はい」

っていう返事をしたのは村上だけで、他三人は眉をあげて台本を見ていた。

「．．．なんつだこれ。いや、シェイクスピアの時代だし、翻訳されてるんだから仕方がないっちゃ仕方がないんだけど．．．なんでこんな台詞が、こう、クサイの？ あたしこんなやり取りを水無瀬としないといけないわけ？」

ああ、だめだ。朝の怒りがまたこみ上げて来た。

「ヘレナはまだ出番ないから、神楽さんは横で見てていいよ」

「分かった」

「彩那と水無瀬君は村上と一緒にここに配置ね。お父さん役とシーウスはまだ決まってるから私が台詞言っけど．．．ってちょっと。その二人。聞ってる？」

稔から声をかけられてあたしと水無瀬が同時に顔をあげる。それからあたし達の顔に書いてあるものを読み取ったのか、一瞬だけ表情に恐怖が走った。けどそこはやはり腐っても立原稔。一切触れずにあたしと水無瀬をさっさと位置につける。

因みに『真夏の夜の夢』あるいは『夏の夜の夢』はシェイクスピアが1590年代に書いた喜劇だ。なんだか、『夏の夜の夢』の方が一般的に使われているらしく、『真夏の夜の夢』は直訳で、どち

らかというと古くから親しまれている名前なんだとか。

全五幕からなり、だいたいの劇の舞台はアテネ近郊の森で行われる。主要人物は男女四人、ハーミア、ライザンダー、ディミートリアス、ヘレナであり、全員が貴族だ。んでまあ、この四人が見事な四角関係を成り立たせているわけ。ハーミアとライザンダーは恋人なんだけど、ハーミアにはお父さんのイージラスが決めた婚約者のディミートリアスがいて、ディミートリアスはハーミアのことが好きで横から彼女を奪い取ったライザンダーのことは毛嫌いしてるんだけど、ハーミアもライザンダーも『はっ！ お前となんか結婚しねえよ！』って感じで（いや、多分違うんだろうけど）、ハーミアの友達であるヘレナはそんなディミートリアスに切ない片想いをしていて、三人の関係を余計に複雑にしているわけなんだけど。

．．．簡単にいうと、ハーミアとライザンダーが恋人で、ディミートリアスはハーミアが好きで、ヘレナはディミートリアスが好きてってわけだ。

まだまだ序盤だからこの四人とかイージラスとかイージラスが話してる公爵やら女王しかいないんだけど、他に妖精とか職人さんとかもたくさんいる。まっ、あたし達がやってるのは本当に最初の方だからまだ妖精とかのことは考えなくていいと思うんだけど。

あたし達が台本を手にとると、稔がうん、と頷いた。

「まだ最初だから台詞に集中するだけで、細かい演出とかは後で決めるからねー」

「うん．．．」

「分かった」

「その女。テンションあげて」

「誰のせいでこんなテンションだと思つてやがる」

「んじゃあイージアスがハーミヤを連れて来る所からねー」

「．．．．．」

「村上も彩那の隣で待機して」

「ああ」

いっそ清々しいほどに無視したなこいつ。

村上があたしの隣に立つのを確認してから、稔は台本に視線を落とした。

「んーと、イージアスが『まったく、困り果てております．．．』
ながっ！　ちょ、この台詞長いから省略するわ」

「うおい」

「どっちにしるこのあとにシーシウスが『ハーミヤ、考え直すことはできないのか？』なんちゃらかんちゃらつてなって．．えーと．．」

稔が眉を寄せながら台本に書いてある台詞を目で追って行く。

因みにシーシウスというのはハーミヤ達が暮らしているアテネの公爵の一人。どっかの女王であるヒポリタ姫と結婚をする話をしてると、イージアスがヘレナ以外の三人を引き連れて来て、ハーミヤがデイミートリアスと結婚しないのであればハーミヤを殺すしかないとか何とか言う。アテネの中で法律なんだとか。

なんちゅー法律だよ。

「まいつか。全部行くよー。んーと『ハーミア、考え直すことはできないのか？ 父親というものは子にとって神も同然なのだ。そのために子をどのようにするのは父親の思いのままではないか。デイミートリアスも立派な若者だろう？』はいハーミア」

「．．．『ライザンダー様も立派なお方でございます』．．．」

「声が小さい！！」

「『ライザンダー様も立派なお方でございます』！」

「よろしい。シーシウスがデイミートリアスは父親に好かれてるんだからよ結婚しろ、的なことを言って」

「いや言つてないよ」

「はい、ハーミア！」

「はあ．．．。父は私のことを理解なさろうとはしないのです」

「シーシウスが『いや、お前だつて父親を理解していないのではなにか？』と言つて」

「『ご無礼をお許しください。何がこのように私を強くしてるのか、あ、強くしてるのか分かりません。殿下の御前でこのように自分の思いをさらけだすことはあまりにもはした．．．ん？ あ、はしたないか。あまりにもはしたないことかも知れません。でも私には止める事ができないのです、この思いを。もし父の決めた結婚を拒んだ時は、あ、時には、この私にどのような重い罰が与えられるのでしょうか』」

「噛み噛みだね．．．」

「うるさいよ！ だいたい台詞が全部長い！」

「当たり前でしょ！ シェイクスピアなんだから！ だいたいあんなの台詞には感情が全然乗つてない！」

「細かい演出はいいってさっき言つてたじゃん！」

「感情くらいは乗せるよ！」

キー！！　という感じでお互い睨み合っていると、水無瀬と村上が慌てて仲裁に入った。神楽さんも座っていた椅子から立ち上がると足早にこっちに近づいて来た。

「まあまあ！　立原も有賀もちょっと落ち着けて。立原もさ、ここはみんなで台詞を読み合ってからどんな感じなのかを掴んだ方がいいんじゃないの？」

「感じ？」

「そつ。だって結構古い時代の劇だろ？　観客にももっと親近間湧かせる様にさ、台詞ももうちょっと馴染みやすくしたりできるんじゃないのか？」

「そりゃあ、多分平気だと思うけど・・・」

村上の提案に稔が眉を寄せる。因みにあたしはその案には超賛成。困った表情を浮かべた稔に水無瀬が笑いかけた。

「そんなに力まなくても平気だよ、立原さん。俺達にはまだまだ時間あるし、台本があれば家で練習も出来るし、ね？」

「・・・うん」

小さく稔が頷くと水無瀬も村上笑った。隣にいた神楽さんも少し微笑を零してから、口を開いた。

「稔ちゃん、ここはさ、みんなで座って台詞をいろいろいじってこよう？　二人の言う通り私達にはまだまだ時間があるしねっ」

「・・・・・・・・・・」

なんとなく不満そうに見えたけど、あたしもその案に素早く賛成すると、稔も渋々頷いた。

結局その日の練習は台詞をいじるだけで終わり、外であたしと水無瀬が恋人を演じるのを見たがっていた方々には申し訳ないことをした。

ざまあみる！ 面白がつてみるからだバカ共！！

・・・・・・・・ なんかテンションがおかしいな。今日はいろいろあつたせいで。

あたしは、演技をするためにどけた椅子とか机とかを元に戻しながら、ゾロゾロと帰って行く野次馬を見て溜息をついた。

どうすっかなあ……。猛烈な勢いでこのことが学校中を回るような気がするのはあたしだけか？ だってさ、だってさ！ なんかよく分からない噂が出回ってた時だって真っ先に久我先輩に問いつめられたよね！？ その噂が消えて間もない時にこんな劇をやるんだったら普通に回るよね！？

もう一度溜息をついて椅子をしまうと、隣で気配を感じてふと顔をあげた。

水無瀬が飄々とした様子で机を押していた。

・・・こんなにあたしが悶々と考え込んでるのになんだその『え

？ 何？ 何か問題でもあったけー？』みたいな様子。ああもう尋常じゃないくらいにム力つく。

睨みつけてから椅子から離れようとすると、有賀、と小さく言う声が聞こえた。少し目を見開いて首を動かすと水無瀬が机に腕を置いたまま真っ直ぐとこっちを見ていた。

．．．．．くっそ。しばらく直視してなかったから気にしてなかったけど、久しぶりに顔を見るとくっそかっこいいなこいつ。

「何？」

みんながこっちを見てないのをさり気なく確認してから返すと、それを見た水無瀬がふっと笑った。

「何？」

さっきよりも強く言うと、水無瀬が少しだけ首を傾げた。

．．．こいつ、何をすれば余計にかっこよく見えるのかを熟知してやがる。

「お前さ、いつまで俺のことを無視するつもり？」

「別にしないですよ。話してないだけだよ」

「なんで？」

「．．．．．」

いい加減にしねえと本気で泣くぞ。

ピクツとあたしの眉が跳ね上がったのを見て水無瀬の顔に張り付いていた笑みがますます大きくなる。

もうなんなのこいつ。

「もうそういうのやめてよ。本気でムカつく」

「……………」

言い放ってからさつさと背を向けると、あたしは黒板を綺麗にしていた稔の傍に歩み寄った。

稔はあたしを見てから後ろにいる水無瀬にも視線を投げたけど、今回はさすがに何かを察したのか何も言わずに黒板消しをあたしの手の中に入れた。

無言で黒板を消し始めてから、あたしはさり気なく後ろに視線を向けると、机に手を置いたまま水無瀬がこちらに背を向けて動かない様子で立っていた。

……………いつまでも同じ反応を返すと思うなよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3914r/>

猫かぶりなあの男とキスをする。

2011年11月30日12時46分発行